

平成 1 6 年 度

研 究 集 録

— 川越市教育委員会委嘱学校研究 —

川 越 市 教 育 委 員 会

あいさつ

川 越 市 教 育 委 員 会

教育長 星 野 明 徳

平成16年度川越市教育委員会委嘱の各学校研究が、大きな成果を上げ、「研究集録」として刊行されることになりました。それぞれの研究主題に沿い、学校をあげて研究に真摯に取り組まれた熱意と努力に対し、ここに、心から敬意と謝意を表すものであります。

現在、川越市教育委員会では、各学校に、学力向上に向けた基礎・基本の徹底、指導内容・指導方法の工夫改善、少人数指導及びT T指導の在り方や評価内容・評価方法、さらには不登校問題の解消に向けた取組等について研究を進めていただいているところでございます。

このような中、本年度の委嘱学校研究では、教育課程の趣旨に基づき、教科等における基礎・基本の徹底、学習意欲を引き出す指導、個に応じた指導、生徒指導、「総合的な学習の時間」の指導等について研究を推進していただきました。特に、学校研究委嘱校のうち3年次、2年次を迎えた9校については、各学校の特色を生かした実践の成果について発表をいただき、市内各学校へ多くの示唆を与えていただきました。

この度、各学校のご協力を得、研究の概要をこのような研究集録にまとめることができましたことに重ねて感謝申し上げますとともに、ここに紹介された学校研究の成果を、平成17年度の自校の指導計画の見直しや指導方法の工夫改善に有効に生かしていただきたいと願っております。

おわりに、委嘱研究に携わってこられた各学校及び関係の先生方のご努力と、ご指導いただいた各位のご尽力に対し厚くお礼申し上げ、あいさつといたします。

目 次

《 学校名 》	《 研究主題 》	《 ページ 》
【3年次】		
川 越 小	自分の力で歩いていける児童の育成 ----- ー算数科を中心とした個に応じた指導の充実ー	1
【2年次】		
泉 小	一人一人の学びを大切にする算数科指導 -----	7
寺 尾 小	学力の基礎・基本となる力を身に付けるための指導法の研究 ----- ー一人一人がわかる喜びを味わえる授業をめざしてー	13
霞ヶ関南小	「わかった！」喜びと学びがいのある算数学習 ----- ー効果的な少人数指導の在り方を目指してー	19
川 越 西 小	自然に親しみ、自然の事象に主体的に働きかける児童の育成 ----- ー日常生活とのかかわりを重視した取組を通してー	25
東 中	自ら学び考え、主体的に取り組む生徒の育成 ----- ー生徒一人一人の意欲を引き出す指導の研究を通してー	31
大 東 中	小中連携による生徒指導のあり方 ----- ー彩の国スクーリング・ジョイントモデル校の実践ー	37
霞ヶ関西中	基礎・基本の定着と学習意欲の向上を目指す学習指導 -----	43
川 越 西 中	「ふしぎはっけん！」楽しみを味わえる授業の創造 -----	49
【1年次】		
中 央 小	子ども自らが、進んで伝え合おうとする力の育成 -----	55
芳 野 小	仲間と豊かに関わりながら主体的に活動する児童の育成 -----	61
武 蔵 野 小	「生きる力」を育てる算数の学習指導 ----- ー「確かな学力の向上」を目指した指導法の工夫改善を通してー	67
新 宿 小	互いに認め合い、よりよい人間関係を築く子の育成 ----- ーおりあいをつける話し合い活動を通してー	73
南 古 谷 小	一人一人を大切にする授業の創造 ----- ー生徒指導を中心に 「算数科」の授業を通してー	79
霞ヶ関北小	学びのよさを味わえる子どもの育成 ----- ー指導方法の工夫・改善を目指してー	85
上 戸 小	自ら課題を見つけ、主体的に解決する子の育成 ----- ー指導方法の工夫と改善を通してー	91
山 田 中	「各教科等の学習指導に関すること」 ----- ー生徒一人一人に確かな力を身に付けさせる学習指導法の研究ー	97

「自分の力で歩いていける児童の育成」 －算数科を中心とした個に応じた指導の充実－

川越市立川越小学校

研究のポイント

- 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫
 - ・習熟度別学習の推進（少人数指導の充実）
 - ・小学校における教科担任制の計画と実践
- 指導に生きる評価の在り方
- 個に応じた指導のための教材開発

1 研究の概要

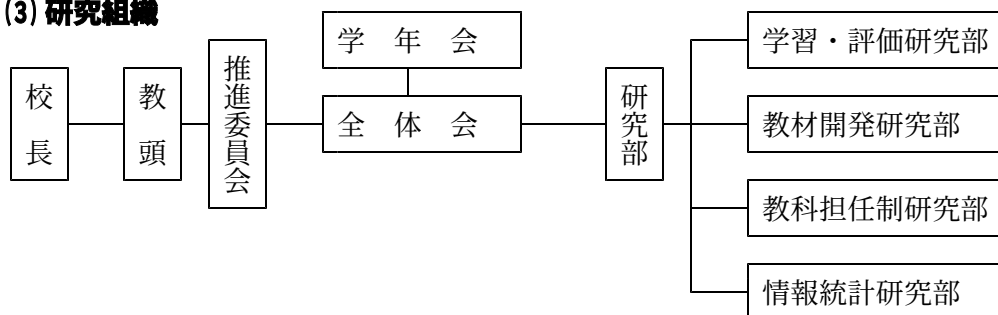
(1) 研究のねらい

- ① 個に応じた指導のための指導方法・指導体制を工夫することにより、児童一人一人の学力の向上を目指す。
- ② 教師の特性を生かした指導体制を組むことにより、より効果的に児童一人一人の学力の向上を目指す。
- ③ 指導に生きる評価の工夫や教材開発により、児童一人一人の学力の向上を目指す。

(2) 研究主題設定の理由

本校では、中央教育審議会が提言された「生きる力」も、教育課程審議会が示された各学校段階の役割についての記述でも、キーワードは児童の「自立」を目指すことであると捉えた。このような考えの下に、本校の現状を眺めてみると、児童は素直で明るい子が多く学習への取り組みの姿勢もよい。しかし、自ら考え主体的に判断し行動できる子はまだまだ少ない。保護者は概して教育熱心で、親子関係も大変よい状況にあるが、過保護と思われる面が多くなっているのも事実である。一方、社会情勢を眺めると、完全学校週5日制の下、新学習指導要領の全面实施に伴い、ますます注目が高まっているのが「学力」の問題である。このような現状を踏まえ、本校として、どのような児童を育てていくことが必要なのか全職員で協議した。多くの職員から、本校の学校教育目標「進んで考える子、だれとでも仲よくする子、やりぬく強い子」の実現が強調された。こうした時代だからこそ、各自が自分の役割をまっとうすることが強く求められているのではないかという意見が出された。そこで、全職員の共通理解のもと、研究主題を「自分の力で歩いていける児童の育成」と設定し、「心の教育」の充実と「確かな学力」の向上を表裏一体のものと考え、研究主題に迫っていくことにした。

(3) 研究組織

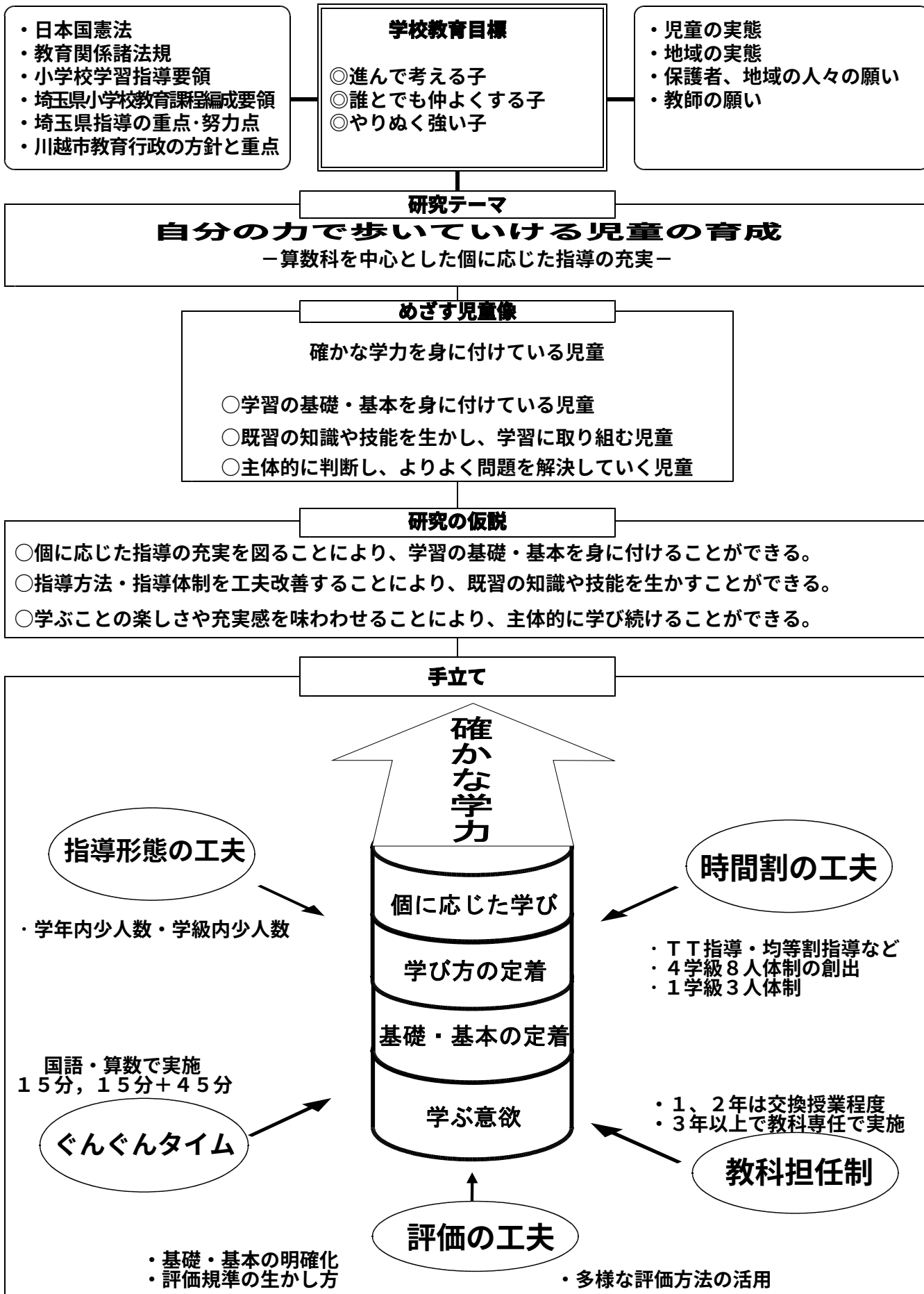


2 研究の内容

	学習・評価研究部	教材開発研究部	情報統計研究部	教科担任制研究部
研究内容	◎授業研究を中心にした、コース別の指導を取り入れた指導の工夫	◎教具の開発（特に導入教材） ◎単元途中で要支援の児童のための教材の開発	◎アンケートと実態の分析 ◎インターネット等を使った情報の発信	◎教科担任制を実施しての成果と問題点を調査によって確認し、来年度に向けて改善していく。
研究の手だて	◎日頃の授業のために ・教室等の掲示物の作成 ・自己評価カードの工夫 ・効果的な授業の流れ ◎授業研究するために ・習熟度別課題別コースなど多様に考えていく ◎他の研究部とのつながりを大切にして全体としての研究になるようにする ◎フロンティア研究推進としての算数から他教科への発展を大切にしていく	◎研究授業の単元中心に考える。 ◎普段の授業での体験的活動を積み重ねていく。 ◎単元が決まったら部会で話しあっていく。	◎アンケートは昨年度の物を使用 ◎人間学力調査の結果をまとめていく ◎パソコンへの打ち込みを部員全員が出来るようにしておく ①アンケートの確認 ②発信内容について ③ホームページ作成ソフト ④各学年で集める物 ・算数授業風景 ・工夫した教材 ・TT・教科担任制・児童の作品や学習の感想	◎アンケートの作成 教師用・児童用 ◎実施9月 集計・分析 ◎課題点の改善→時間割の作成（2学期中）

3 实践事例

(1) 川越市立川越小学校「学力向上フロンティア事業」研究の全体構想



(2) 指導方法、指導形態等の工夫改善

学級内

(1) 習熟の程度等に応じた指導

- 一斉指導・・・ T1 が全体の児童に対して一斉指導をする。
(T T) T2 はつまづきがちな児童に個別指導をする。

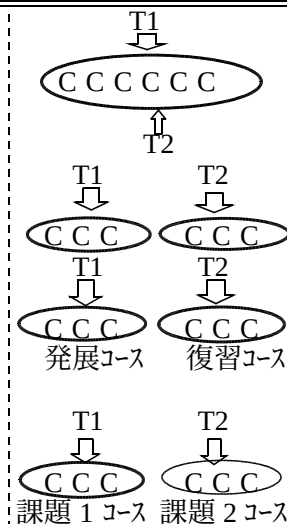
○少人数指導

- 均等割・・・ 学級を均等に二分して、それぞれを T1 と T2 が指導をする。
- 習熟度別・・・ 児童の習熟の程度に応じた学習集団を編成して、T1 と T2 が分担して指導をする。

(2) 興味・関心等に応じた指導

○少人数指導

- 課題別・・・ 児童の興味・関心に応じた課題や学習方法ごとに、学習集団を編成して、T1 と T2 が分担して指導をする。



学年内

(1) 習熟の程度等に応じた指導

○少人数指導

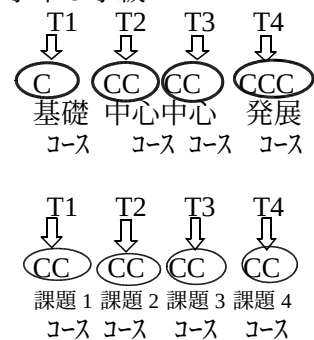
- 習熟度別・・・ 児童の習熟の程度に応じた学習集団を学級の枠をはずして編成して、T1 と T2 ～ T4 が分担して指導をする。

(2) 興味・関心等に応じた指導

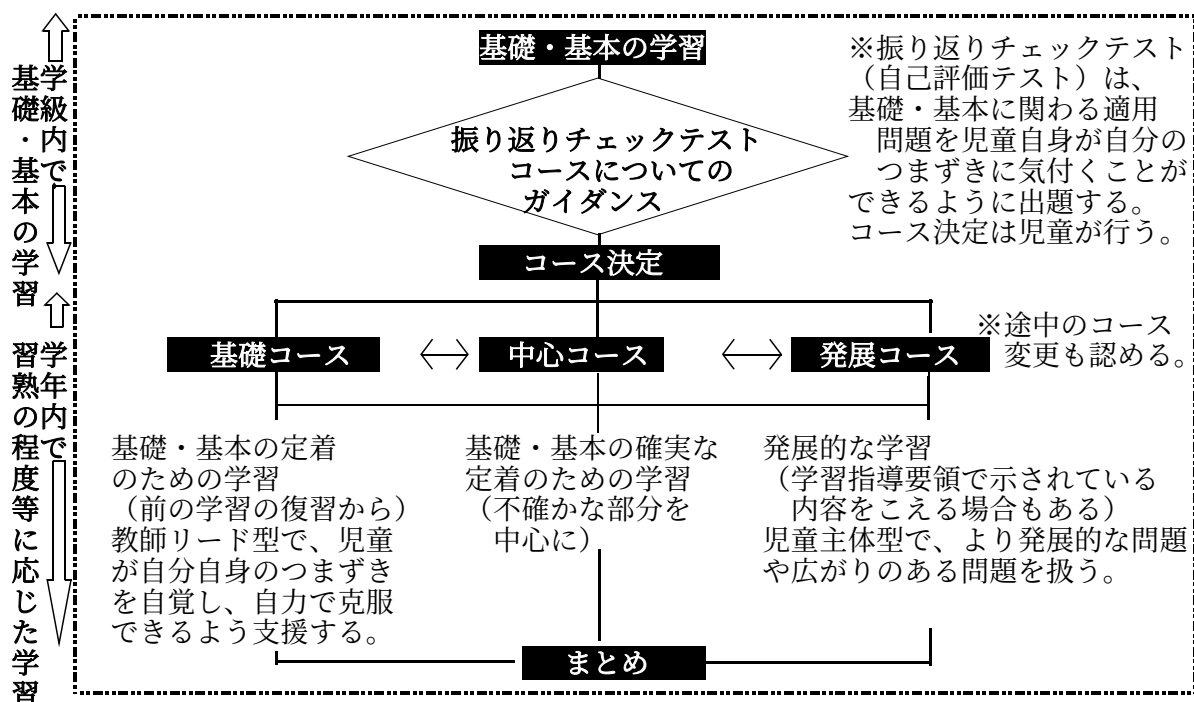
○少人数指導

- 課題別・・・ 児童の興味・関心に応じた課題や学習方法ごとに、学習集団を学級の枠をはずして編成して、T1 と T2 ～ T4 が分担して指導をする。

例・学年 3 学級

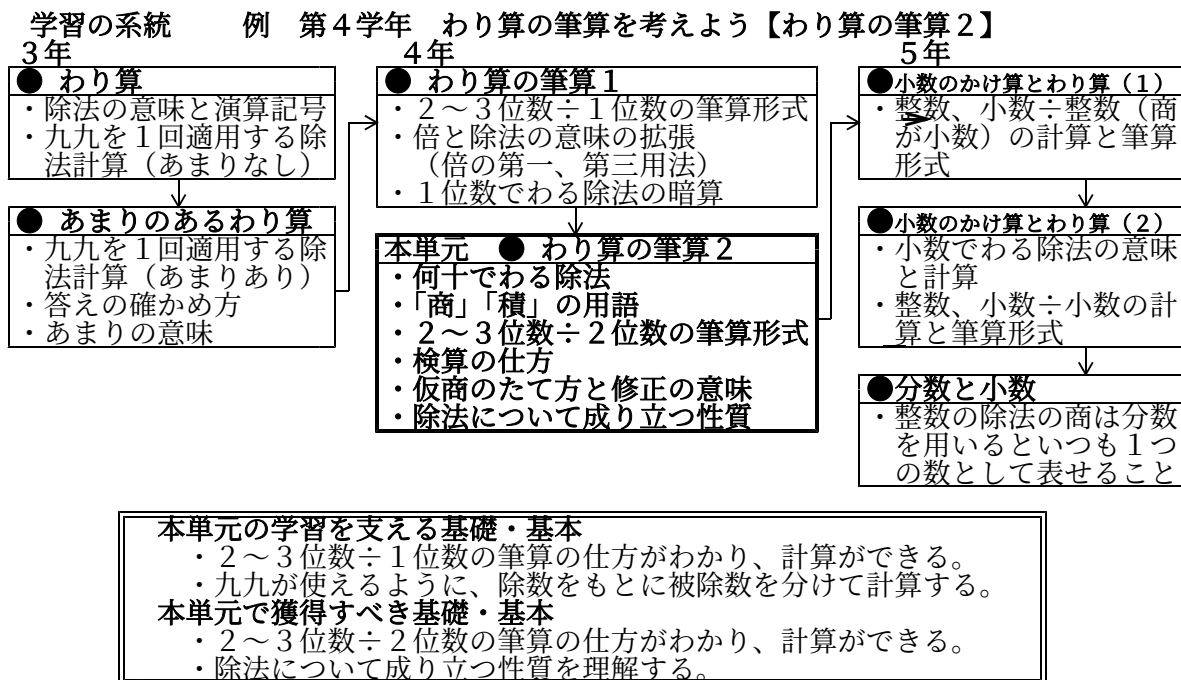


1 単元の学習の流れと指導方法、指導形態等の工夫例 習熟度別学習の場合



(3) 学習の基礎・基本の明確化

- 基礎的・基本的な学習内容を明確にするとともに、1単位時間の中の評価を重点化することで「指導に生かす評価の充実」を図る。
- 学習の系統を分析し、「本単元の学習を支える基礎・基本」と「本単元で獲得すべき基礎・基本」を明確にする。



(4) 1単位時間の中の評価の重点化

レディネステストや学力調査を分析し、児童の実態を把握する。次に1単位時間の中で評価の観点を1つに絞り重点化し、単元全体ではバランスよく4つの観点で評価できるように計画をする。また、1単位時間の学習過程における児童の反応を詳しく予想し、具体的な指導や支援の仕方を明確にする。

学習過程	指導や支援の手立て	評価
問題を知る	児童が興味・関心を持てるよう身近な事象を取り上げたり、具体物で示したりする。	※評価場面と評価規準、評価方法等を明確にする。
課題をつかむ	いままでの学習とはどこがちがうのか、どんなところが新しい学習なのかを発見できるようにする。	※評価に対する手立てを詳細にする。 その具体例
作戦・計画	意欲的に既習事項を活用して考えられるようにする。一人では考えがまとまらない児童には個別指導や小集団指導をする。	A 十分満足できる
見通しをもつ		次にどんな方向に学習を広げたり深めたりするのかを記入
実行する	自分の考えた方法で課題が解決できるよう児童が持っている算数カードにあるヒントを活用するよう助言したり、個別に支援したりする。	B おおむね満足できる さらに学習を確実なものにするにはどうするのかを記入
話し合いをする	それぞれの考え方のよさや共通点などに気付くことができるようにする。	C 努力を要する
まとめをする	本時を振り返って分かったことや考えたことを自己評価カードに自分の言葉でまとめることができるようにする。	何が目標達成の妨げになっているのか、どんな支援や指導をすることでおおむね満足できる状態になるのかを記入
練習をする	適用問題を解いたり、本時の課題を踏まえた問題を作ったりして学習を確かなものにする。	

※「自己評価カード」・・・低学年では主に、その時間の学習を振り返るために、高学年では単元の学習の見通しが持てるように、自己評価カードを単元ごとに作成した。自己評価カードは毎時間の最後に記入し、教師からのコメントを添えて返却している。

(5) 教科担任制の取組

◇各学年の取組 (1年生は3学級のため本年度は実施せず)

- 2年生 書写と図工、書写と音楽の交換授業
- 3年生 1組理科専任、2組音楽専任、3組社会専任の学年内教科担任制
- 4年生 1組社会専任、2組理科専任、3組音楽・図工専任の学年内教科担任制
- 5・6年生 1組体育・図工専任、2組音楽・家庭科専任、3組社会専任、4組理科専任の教科担任制

◇時間割の例 は予め決定している時間。残りの枠に担任は国語・道徳・学活を入れていく。

5-1 体育図工専任

	月	火	水	木	金
1	算数T	国語	体※ 5-2	算数 国語	体※ 5-3
2	体	算数T		道徳	国語 算数
3	図※ 5-2	図※ 5-3	体※ 5-3	体※ 5-2	体
4	図体※ 5-2	図体※ 5-3	国語	算数T	
5	国語	総	学活	図	総
6		総	クラブ 委員会	図体	

5-1 児童用時間割

	月	火	水	木	金
1	算数		理科※		社会※
2	体育	算数	理科※		
3	音・家 ※	理科※	社会※	書写※	体育
4	家庭 ※	社会※		算数	音楽
5		総合		図	総合
6		総合	クラブ 委員会	図・体	

※教師の時間割と児童の時間割は異なる。

は担任以外による授業。

◇時間割の組み方

I 全クラスに関わる体育の時間割の決定する。

- ① 週5日の内、3日間体育が続かないようにする。
- ② 週3時間の総合的な学習の時間の内、2時間が5・6校時になるようにする。
(その学年の体育はこの5・6校時には組まない。)
- ③ あるクラスの体育が同じ校時にならないようにする。
(いろいろな時間帯になるようにする。)
- ④ 体育専任教師が続けて3時間体育にならないようにする。
- ⑤ 1コマに低・中・高学年が入るようにする。
(同じブロック学年が重ならないようにする。)

II 体育専任教師のクラスの時間割の作成

- ① 図工・家庭・理科・総合的な学習の時間などの2時間続きの時間を確保する。
- ② できれば交換授業になるようにする。
(入ったクラスの教員になるべく出てもらえるようにする。)
- ③ 特別教室の時間割も一緒に作成していく。

III 他のクラスの時間割の作成

◇教師の工夫

- 週案にカラーマーカーで4クラスを色分けし、クラスの指導予定をわかりやすくする。
- 年間指導計画をよく読んで、図工などの準備が必要な教科は、早めの連絡を心がける。
- 担任間で連絡を密に取るよう心がける。
- 指導分担や支援の内容などをできるだけわかりやすく簡潔に話ができるようにする。
- 長い期間を見通せるように月案簿をつくった。

◇教科担任制での不都合なところ

- ・教科間の時数調整に、融通のきかない場面がある。
- ・次の授業準備のため、休み時間等に個別指導の時間の確保が難しい。
- ・自分の希望する教科を必ずしも担当するようになるとは限らない。
- ・児童の性格、能力などを把握するのに時間がかかり、細やかな配慮が不足しがちになることもある。

◇教科担任制の課題と成果

<成果>

- ・学年全体の児童の様子を知ることができ、児童理解の上で有効となっている。
- ・同じ授業を繰り返すため、毎回授業に工夫改善をすることができる。
- ・担当教科の教材研究に多くの時間が取れ、授業内容の充実につながっている。
- ・同じ内容で学年の指導ができるようになり、学力のばらつきがなくなる。
- ・多くの教師が児童に関わることで、生徒指導上でも、より多面的に児童を捉えられるようになった。
- ・各教科における基礎・基本の学習が学年として統一されている。

<課題>

- ・一年毎にクラス編制が行われ、毎年担任が変わる中、児童は、いろいろな教師に教えてもらうことに大変肯定的な見方をしている。しかし、その中で「分からないことがあっても質問しづらい」「学用品の

準備などが分からない」と答えている児童もいる。それぞれの担当者が授業時間の配分等を考えたり、児童からの情報の取り入れ方を工夫していく必要がある。

- ・教科担任制のプラス面が有効に機能するように、学習のルールや児童の見方・接し方など職員全体の共通理解が必要である。
- ・各教科で使用した資料を共有の財産としていくための保管の仕方を工夫する必要がある。
- ・職員や学級数により教科担任制の教科が年度によってかわってしまうことや、持てる教科がないことにより高学年の担任希望が少なくなってしまうことを克服する必要がある。

4 研究の成果と課題

【成果】

- ・児童のできるようになりたいという意欲を大切にし、その願いを実現する学習を展開することにより、確実に意欲の高揚、学力の向上を図ることができた。また、算数科における指導法の研究を進めることにより、他教科の指導法の工夫・改善につながり、他教科の学力の向上も図られている。
- ・児童は教科担任制を予想以上に受容し、教科毎に替わる教師との交流を楽しんでいる。教師も教科担任制にしたため、専任教科の教材研究を工夫改善することができ、指導の流れがより効果的になり、効率の良い、わかりやすい授業を展開することができた。
- ・習熟度別学習は、単元の中の、特に小単元のまとめの部分での、学習内容に習熟する場面において、大変効果が上がることがわかってきた。
- ・児童の実態に合った指導の工夫により、児童の学習意欲が高まった。理解が遅れ気味の児童には、少人数での細かい指導段階を踏むことにより理解の向上が見られた。また、理解の早い児童に対しては、より高度な問題や難しい課題などの発展的な問題に挑戦させることで意欲の継続を図ることができた。
- ・指導形態の工夫により、児童一人一人の活動場面や指導を受ける機会が増え、理解力が高まり学習意欲の高まりが見られた。また、評価カードの工夫により、児童自身が単元の見通しを持てるようになった。そして、指導案に「評価」だけでなくその「手立て」を明記することにより、より細かな指導ができるようになった。



【課題】

- ・授業研究での経験を生かしての平常授業における指導のより一層の工夫改善
- ・児童が自ら学んでみようという思いで学習に取り組める教材の更なる開発
- ・教師間の連携を深めるための時間の確保の工夫と教師の専門性、得意教科を生かした教育活動の推進
- ・職員の構成メンバー変遷による教科担任制の担任決定の困難さの克服

研究主題

「学力の基礎・基本となる力を 身に付けるための指導法の研究」

—— 一人一人がわかる喜びを味わえる授業をめざして ——

川越市立寺尾小学校

— 研究のポイント —

- 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善
 - ・少人数指導におけるコース別学習の進め方
 - ・効果的なチーム・ティーチング指導
 - ・観点別学習の状況が「努力を要する状況」の児童への支援の工夫
- 1時間の学習過程と学習形態の工夫
 - ・自主学習、協学習、解決学習の3つの場を設定して多様な考え方を深める
- 児童に学力の基礎・基本となる力を身に付けさせるための授業づくりを支援する評価のあり方
- 目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価)の客観性や信頼性を高める

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校では、算数科を中心として、「学力の基礎・基本となる力を身に付けるための指導法の研究」を実施した。全教職員が、学校課題を共有して、その課題解決と指導力の向上に努め、「児童一人一人がわかる喜びを味わえる授業」をめざした。

平成15年度より、少人数指導加配教員が配置され、算数科研究に取り組み効果的な少人数指導の研究を進めた。

(2) 研究主題設定の理由

平成15年度、学校長の学校経営方針の「学習指導に関する学校課題の解決に向けて」のプランの中で、学校課題として次の2点が提示された。

①新しい学力観に立つ学力の向上を図る。

(学力の基礎・基本となる力の向上)

②寺尾小学校の児童の実態に即した少人数指導の在り方と推進について具体的な手立てを明らかにする。

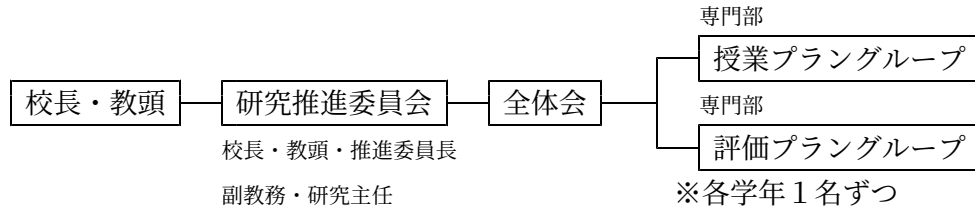
全教職員で話し合っ、研究主題を「学力の基礎・基本となる力を身に付けるための指導法の研究」と決定した。そして、「児童一人一人がわかる喜びを味わえる授業をめざして」を副題として研究に取り組んだ。

次に、基礎・基本とは何かを明確にし、研究を進めた。「算数の学力とは何か」を考え

様々な考察を進めた。寺尾小学校では、その学力を支える力のことを「基礎・基本となる力」と考えました。その中から本校として、「基礎・基本となる力」を次の2点に整理した。

- 数、量、図形にかかわる知識理解・表現処理
- 算数的活動を通して育てる数学的な考え方

(3) 研究組織



2 研究の内容

数、量、図形にかかわる知識理解・表現処理や数学的な考え方を児童に身に付けさせるためにはどうしたらよいかを考え、下記の研究仮説を設定した。

(1) 研究仮説

- ・習熟を図る時間、場、方法を工夫すれば、
知識理解・表現処理の力が身につくであろう。
- ・問題提示の工夫をし、解決過程での児童の算数的活動を豊かにすれば、
数学的な考え方が身につくであろう。

(2) 仮説立証のための視点

授業を見る視点を下記の4点にして、研究授業を繰り返した。

- ①単元の「基礎・基本となる力」をどのように押さえているか。
- ②習熟を図る時間、場、方法をどのように工夫しているか。
- ③問題提示の方法をどのように工夫しているか。
- ④解決過程での児童の算数的活動をどのように豊かにしているか。

(3) 研究経過の概要

- 7 / 8 (木) 2年生授業研究会
指導者 川越市立月越小学校長 五十嵐 京 先生
- 10 / 7 (木) 3年生授業研究会
指導者 川越市立教育研究所指導主事 山田 直樹 先生
指導者 川越市立泉小学校教諭 横山 敦子 先生
- 10 / 29 (金) 川越市教育委員会 委嘱
川越市教育研究会 委嘱
- 算数科研究発表会**
指導者 川越市立教育研究所指導主事 山田 直樹 先生
" 川越市立教育研究所指導主事 日出間 均 先生

指導者 川越市立月越小学校長 五十嵐 京 先生
 // 川越市立泉小学校教諭 横山 敦子 先生

11 / 11 (木) 6年生授業研究会

指導者 川越市立教育研究所指導主事 日出間 均 先生

(4)研究の内容

①1単位時間の学習過程の工夫

- 導 入→題意を理解し、解決への手がかりを見つける。
- 自主学习→自分なりの方法で見通しを持って解決する。
- 協力学習→多様な考え方を出し合い、そのよさを比較し合い練り上げる。
- 解決学習→本時の学習を振り返り、学習内容の定着を確認する。
- 終 末→次時の予告をし、意欲化を図る。

授業展開の中に、「自主、協力、解決学習」の3つの機能を持たせた。但し、いつも3つの学習があるのではなく、2つになる場合もある。

②児童の評価計画に基づき、学習への取組状況評価の工夫

- 重点評価項目チェック表の活用を進める。(4学年の実践事例)

○自己評価カードの活用を進める。(1学年の実践事例)

じこひょうか たんげんめい (たしざん)

ひにち	よくできた できた もうすこ し   	か ん そ う
-----	--	------------------

10／	😊	😐	😞	10にするとかんたんだったよ
10／	😊	😐	😞	くりあがりのあるたしざんのやりかたがわかったよ
10／	😊	😐	😞	いろいろなもんだいができてたのしかったよ
10／	😊	😐	😞	ちがうけいさんもあったよ

4 研究の成果と課題

(1)成果

- 自主学習の時間を十分に確保した結果、児童は既習事項を活用して学習の見通しを立てることができるようになった。
- 1時間の授業の中に自主学習、協力学習、解決学習の指導過程を設定したことで、問題解決型の授業を効果的に展開することができるようになった。
- 少人数指導、ティーム・ティーチング、習熟の程度に応じた学習の取組などにより、児童は多様な学習形態に慣れ意欲的に学習を進めることができるようになった。
- 協力学習の推進により、児童は自分の考え方と異なる様々な解決方法を知ったり自分の考え方と同じ解決方法を深めたり、多様な考え方に親しむことができるようになった。
- 自分の考え方をしっかり持ち発表したり、友だちの考え方を聞いたりする活動が楽しいと感じられる児童が増えてきた。
- 低学年の授業では、身近な具体物を使っての教材の工夫・きめ細かな支援により、意欲的な学習が進められた。

(2)課題

- 知識理解・表現処理の力、数学的な考え方が児童に身に付いたか、より厳密な評価方法の研究を進めたい。
- 習熟の程度に応じた個別学習の取組後のテストでは、児童の理解力は深まっている。より一層の向上をめざして、日課表・指導計画等の工夫・改善を進めていきたい。
- 基礎・基本の定着を図る活動として、毎週水曜日の朝学習で実施している「基礎学習の時間」を学校全体でより計画的に推進し、さらに研究を深めていきたい。
- より効果的に授業を進めるために、少人数指導担当者との話し合いを計画的にできるようにしていきたい。

研究主題

「『わかった！』喜びと学びがいのある算数学習」

～効果的な少人数指導の在り方を目指して～

川越市立霞ヶ関南小学校

研究のポイント

- 個に応じた指導の充実のための少人数指導の工夫
 - ・コース別学習（習熟度別，興味・関心別），T Tによる指導
- 全学年での問題解決学習の推進
- 教材の本質をとらえた一貫した指導の推進
- 児童の実態や興味関心に応じた教材開発
- 算数学習室や各教室の算数コーナー等の環境整備

1 研究の概要

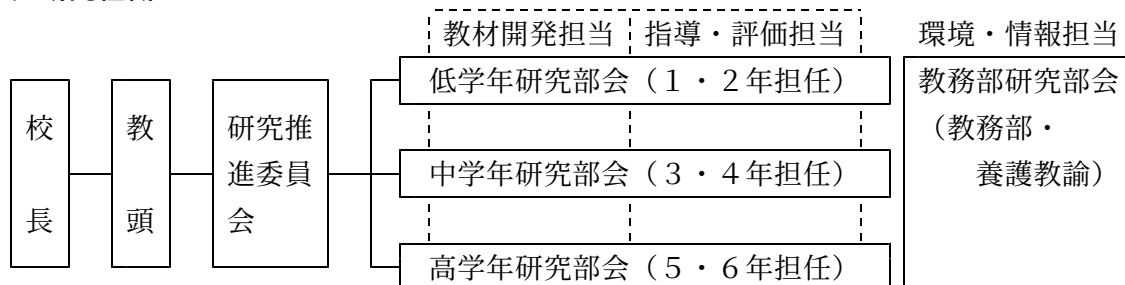
(1) 研究のねらい

- ① コース別学習やT Tによる指導などの少人数指導を算数科の授業に積極的に取り入れることで，個に応じた指導の一層の充実を図り，児童一人一人に学ぶ喜びを味わわせる。
- ② 問題解決学習を全学年で実施し，教材の本質をとらえた一貫した指導を推進することで生涯学習の基礎となる自力解決の力の育成を図る。
- ③ 算数学習室や各教室の算数コーナーの掲示などを工夫し，児童が自主的に学習できる環境を整備する。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童の実態として，計算はできるが意味がわかっていない児童が多いとか，基礎・基本の定着が不十分な児童も各学級にいる等という問題点があげられていた。これらの問題点を改善するために，問題解決に至る過程や方法を意識した算数の学習，基礎・基本となる内容についての確実な定着，表現力の育成の3点を中心的な課題として取り組んでいくこととした。そして，研究のあり方として，「確かな学力」を育てるためには，まず児童一人一人の学習意欲「やる気」を喚起することこそ重要であり，それには，単に計算が速くできるなどのスキル重視ではなく，「わかった」喜びや「学びがい」などの情意面を大切にしていくことが重要であると考えた。以上のことから，上記の様な研究主題を設定した。また，その具体的な指導方法として，少人数指導加配の制度の趣旨を生かし，個に応じたきめ細かな指導の一層の充実を図るため，上記の様な副主題を設定した。

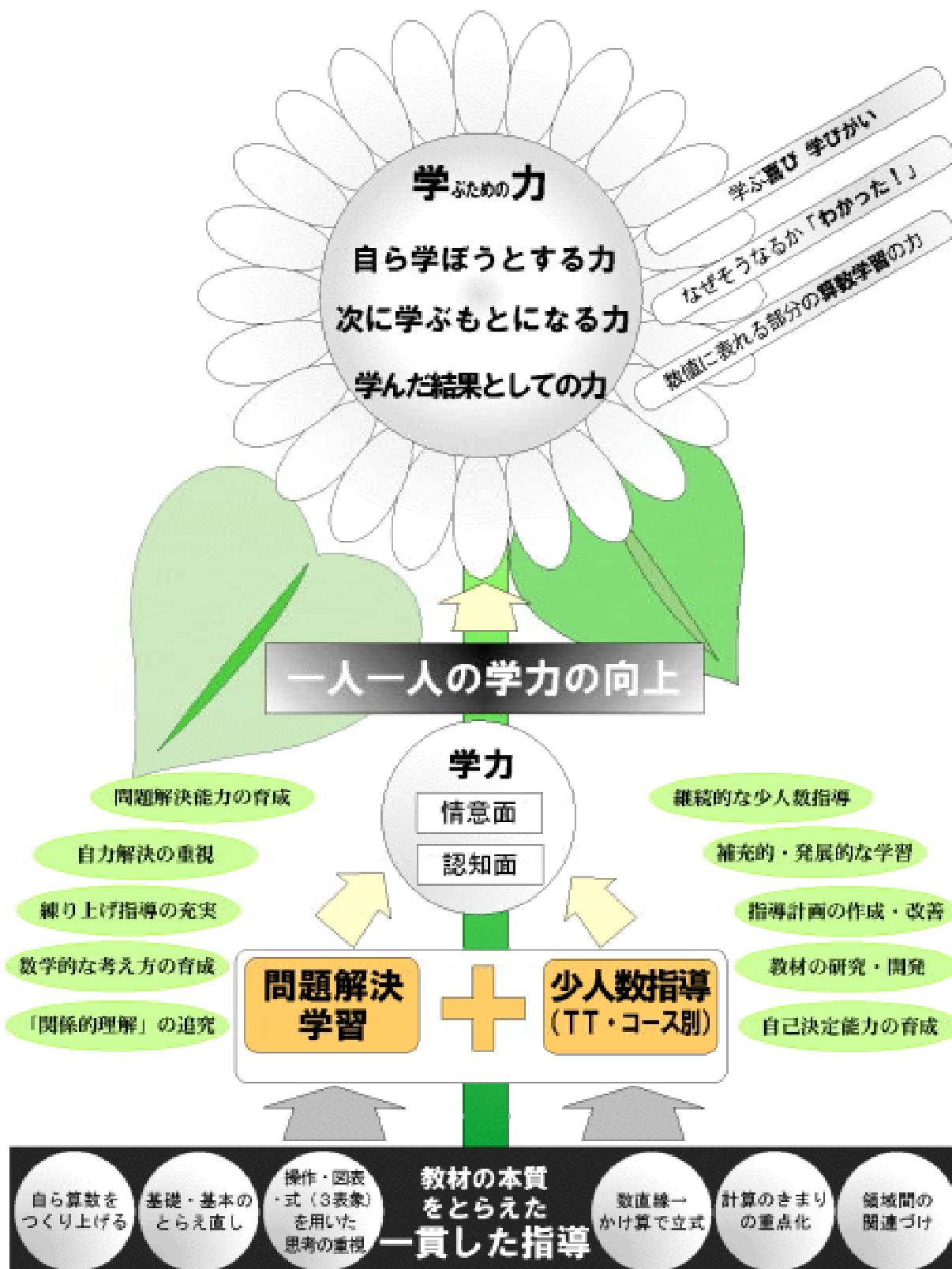
(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 本研究のイメージ図

「わかった！」喜びと学びがいのある算数学習



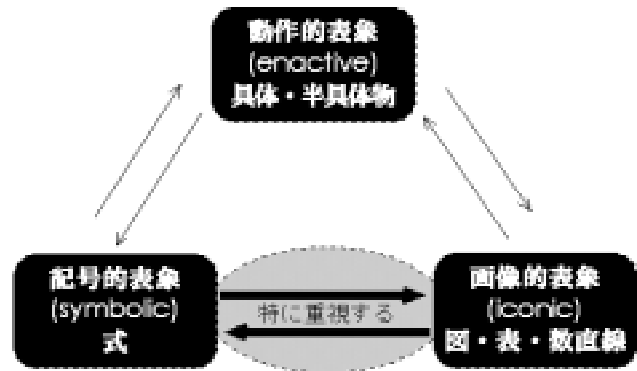
(2) 教材の本質をとらえた「一貫した指導」の中から

校内で重点化する学習内容として、前頁のイメージ図の下の部分にある 6 点を定め、各学年の指導に一貫性をもたせる。また、教師は次年度以降の児童の学習内容も見通した指導を心がける。これにより、児童は自然に無理なく、既習を活用しながら算数を学ぶことができる。



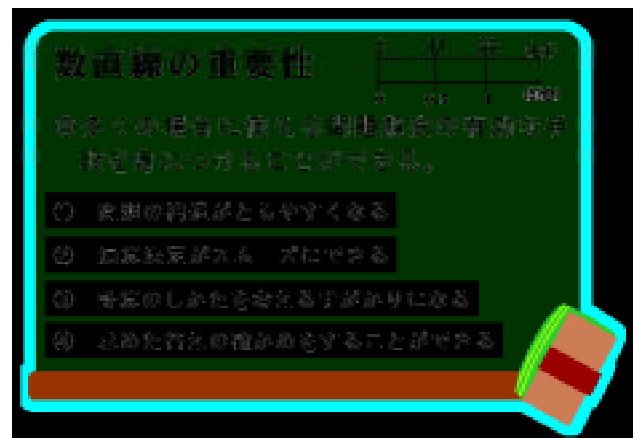
① 操作・図表・式を用いた思考の重視

問題に対面し、自力解決する場面では、1つの解決方法ではなく右図のように 3 つの表象を用いた思考が柔軟にできるようにする。既に自分の中に体系化されている数学的な知識と結び付けて、新しい学習内容を獲得できるようにすることが大切であり、これにより「関係的理解」に近づく。



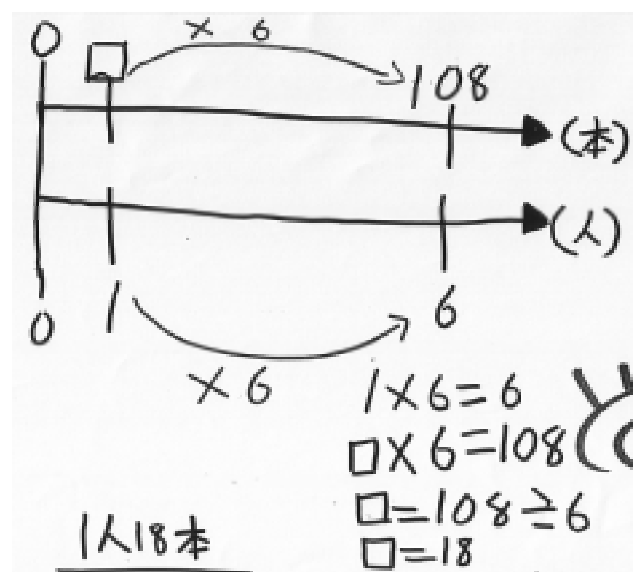
② 数直線対応図を全校で意図的・計画的に扱う

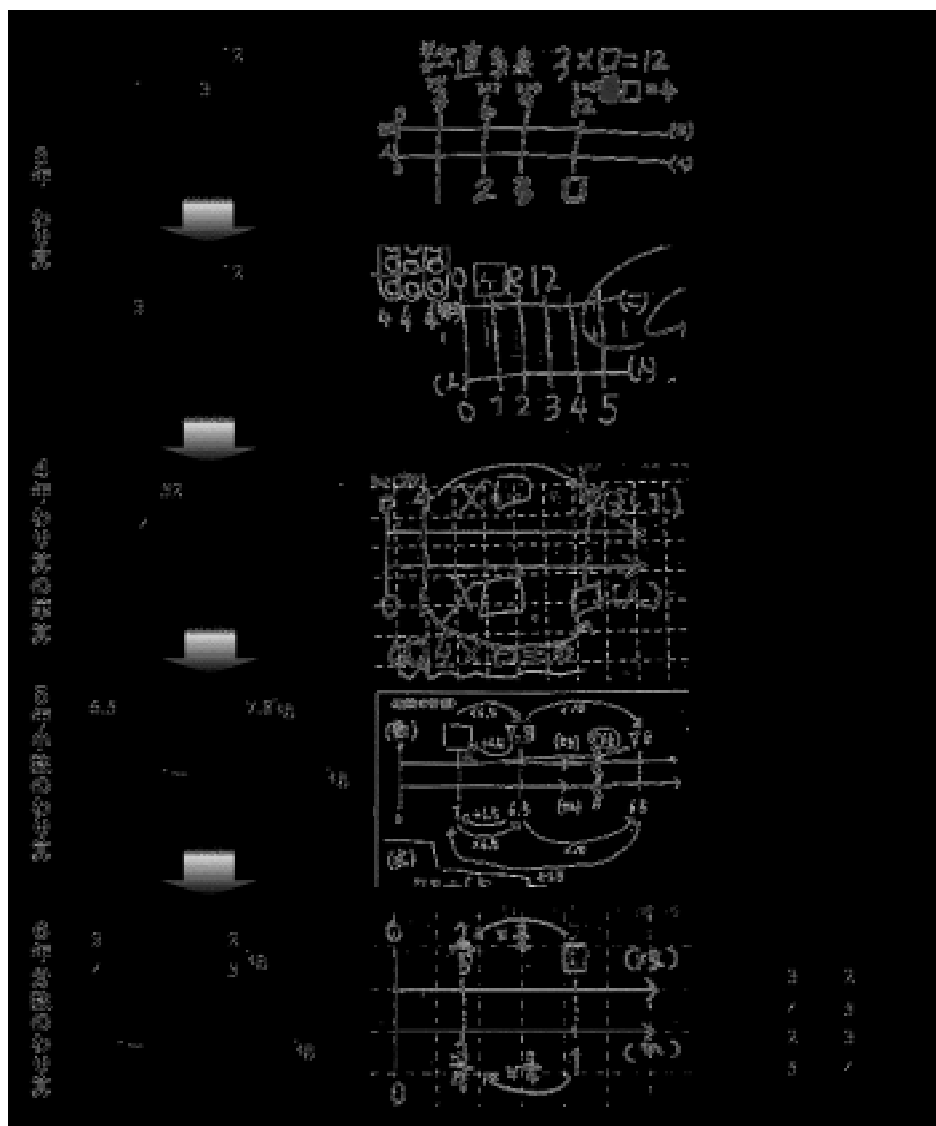
2 本の数直線の対応関係を使って表す「数直線対応図」は、児童にとって、有効な思考の道具となる。数直線対応図は「自分自身でいつでもかける」状態に引き上げることで、活用の機会が大幅に増える。本校ではできるだけ早い段階（3 年生 1 学期）から積極的に活用させ、最終的にはすべての児童が自分で数直線をかき、使いこなせるように計画的に指導する。



③ 比例関係があれば問題場面をいつもかけ算で表す

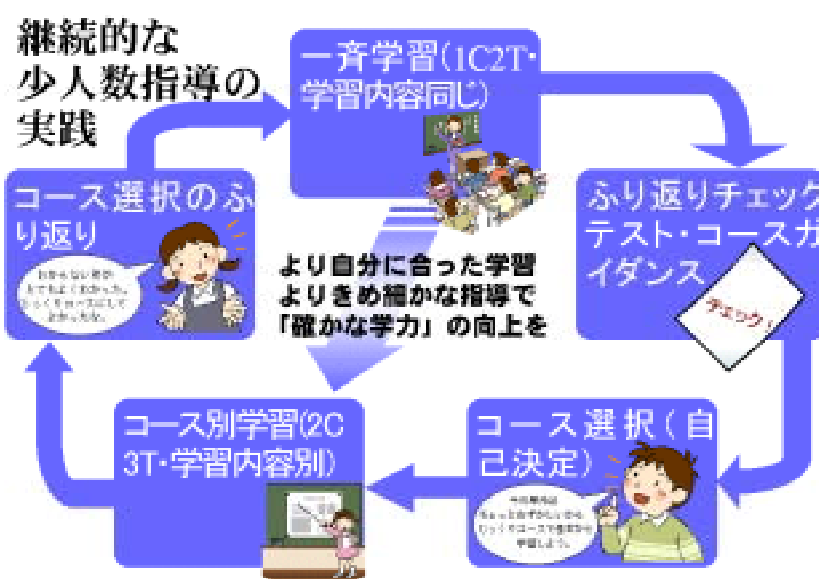
問題の構造を把握するため数直線を自分の力でかく次の段階（演算決定）として、対応の関係を示す矢印をつけさせる。そして「もとにする量（基準量）」と「比較量」が何倍の関係になっているのか、「 $\times 3$ 」「 $\times \square$ 」…のように数直線の中に記入する習慣を付ける。中学年の段階から、「もとにするもの」「1 とみられるもの」は何かということが意識できる。このようにして比例関係のある問題場面は、いつもかけ算の式を立て、必要に応じてわり算に直して計算する。





(3) 継続的な少人数指導の実践

各単元の指導を 1C2T と 2C3T (コース別学習) の 2 つを組み合わせで行う。低学年は、自己評価能力が十分に育っていないことから、1C2T が中心である。学年が進むにつれて、無理のない形でコース別学習の時間を増やす。コース別学習の最後には、次単元も見据えてコース選択についての振り返りを行う。



3 実践事例 第5学年「百分率とグラフ」(割合)

(1) 本単元の基礎・基本

- ・割合の意味とその求め方
- ・百分率の意味理解とその活用
- ・目的に応じた円グラフ・帯グラフへの活用

(2) 指導のポイント

- ① 学習の遅れがちな児童には、割合の導入を「比較」ではなく「同じ割合」から行う。
- ② 問題の構造を把握するため数直線をくり返し活用し、道具として使えるようにする。
- ③ 割合の問題場面をいつもかけ算の式で表せるようにする。

(3) 基礎・基本の確実な定着のためのポイント(補充的な学習・じっくりコース)

①「ちがう割合」よりも先に「同じ割合」について理解できるようにする【第3時】

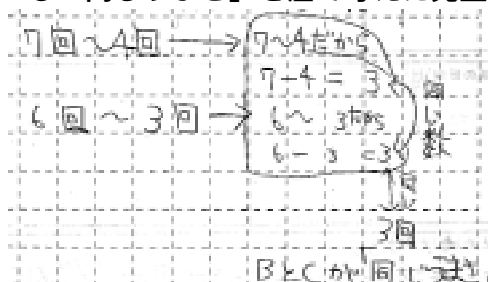
割合の学習の一般的な導入としては、2つの数量の比較のため割合を求める学習場面から行われる。割合を数値化することでいつでも比べられる考えのよさに触れられるようになっている。しかし、学習の遅れがちな児童は、比例的な見方をしない傾向がある。そこで、まず「同じ割合」とは何かをじっくりと考え、正しくとらえることから学習を始める。

3人の子どもがバスケットのシュートをしています。

	投げた数	入った数
Aさん	10	5
Bさん	7	4
Cさん	6	3

シュートが「同じうまさ」だといえるのは、だれとだれでしょう。

○「同じうまさ」を差で考えた児童



○「同じうまさ」を倍で考えた児童

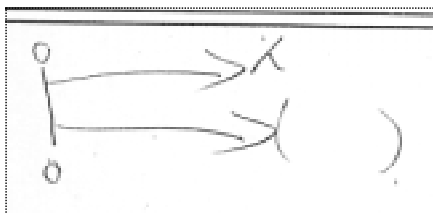


②「思考の道具」として数直線を活用できるようにする【第2時～第11時】

学習の遅れがちな児童が、問題の構造を的確にとらえ、演算を決定し、解決を進めるためには、その根拠となる「思考の道具」が必要である。また、自分の考えを他の友達に伝えたり、説明したりする時にも、共通の道具としての数直線になっていることが必要である。このような理由から、**第3学年の頃から数直線を継続的に一貫して指導**し、どの児童も使えるようになっていることが望ましい。

【第1時】レディネステスト

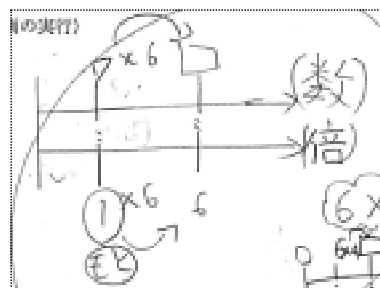
数直線がうまくかけない。



何を1とみるかが考えつかない。

【第2時】

苦手な7の段について補充するとともに、 7×6 を数直線で表してみる。もとにするものは何かや、もとにするものを数直線の1に対応する部分

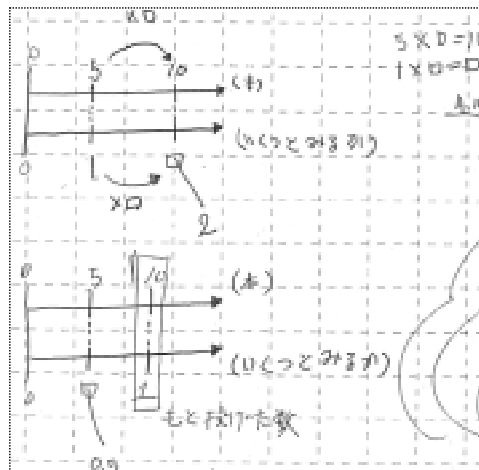


にかくことなど、数直線のかき方も補充する。

③ 問題場面をいつも「かけ算の式」で表せるようにする

【第4時】

「同じうまさ」を「同じ割合」と読み替える学習をする。すぐに「割合」という言葉は用いず、「いくつとみるか」という言葉でとらえさせる。何をもとにするかによって2通りの見方となることを把握させる。また、問題場面をかけ算の式に表すことにより、次時以降の指導との一貫性をもたせる。さらに、もとにするものを1としたとき、「いくつとみるか」の□にあたる数量が「割合」であることを数直線の上から確認する。

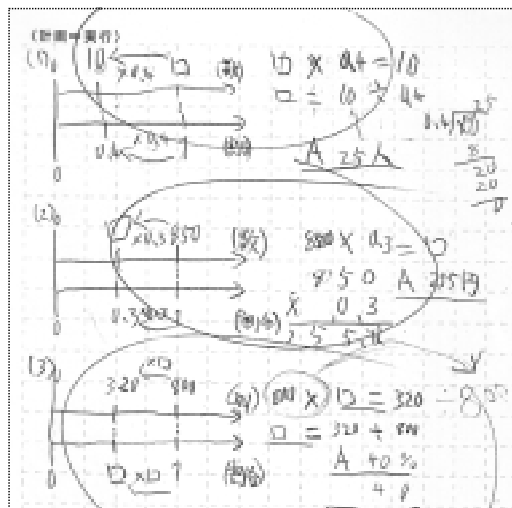


【第5時～第9時】

割合についての様々な問題解決の道具として数直線を使いこなせるようにする。いつも数直線に「矢印」をつけ、それをもとに「かけ算の式」で表すことを確実に身に付ける。必要に応じてわり算の式にするような形で学習を進める。

【第10時・第11時】

学習の遅れがちな児童にとっては、いくつもの公式を覚え、場面によって公式を使い分けることは難しく、演算決定できない主要因となっている。単元の後半には、3用法が混ざった問題を解決する時間を設け、問題の構造はどれも同じであり、聞かれている場所が3箇所であることをおさえる。これにより、いつもどこが□なのかを進んで見つけるようになるとともに、算数の乗除法の問題が3パターンしかないことを知り、安心して自力解決できるようになる。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・算数について「わかった!」という喜びや学びがいをを感じる児童が増え、その結果として一人一人の学力(情意面・認知面)が向上した。
- ・少人数指導を継続的に行うことで、児童の自己評価・自己決定する力が高まった。
- ・「わかる(理解する)」とは何か、そのために何をすべきかという課題を教師が共有し、一貫した指導を行うなど、一丸となって研究に取り組むことができた。
- ・1年目に少人数指導に対応した指導計画を作成し、2年目はその実践をもとに指導計画を改善することができた。
- ・児童の学ぶ姿を通して、保護者からも高い評価を得ることができた。

(2) 課題

- ・補充的な学習についての教材開発については、まだ不十分である。
- ・練り上げ指導のさらなる充実が必要である。
- ・児童一人一人の学習状況の把握をさらに細かく行うため、「算数学習個人カルテ」のよりよい活用のしかたについて検討する必要がある。
- ・教師にとって、指導方法もさることながら、指導の根本にある教材を見る視点が重要であり、追究し続ける必要がある。

研究主題

「自然に親しみ、自然の事象に主体的に働きかける児童の育成」

—— 日常生活とのかかわりを重視した取組を通して ——

川越市立川越西小学校

研究のポイント

「理科大好きスクール事業」の推進 ～地域とともに理科好きな児童を育てます～

- 自然事象に主体的に取り組む児童、自然を愛する心豊かな児童、学習の成果を日常生活に積極的に生かす児童の育成を図った視点を明確にした理科授業を展開する。
- 地域人材を活用した様々な取組を通して、理科に対する関心や意欲を高めるとともに科学的なものの見方、考え方の育成を図る。

1 研究の概要

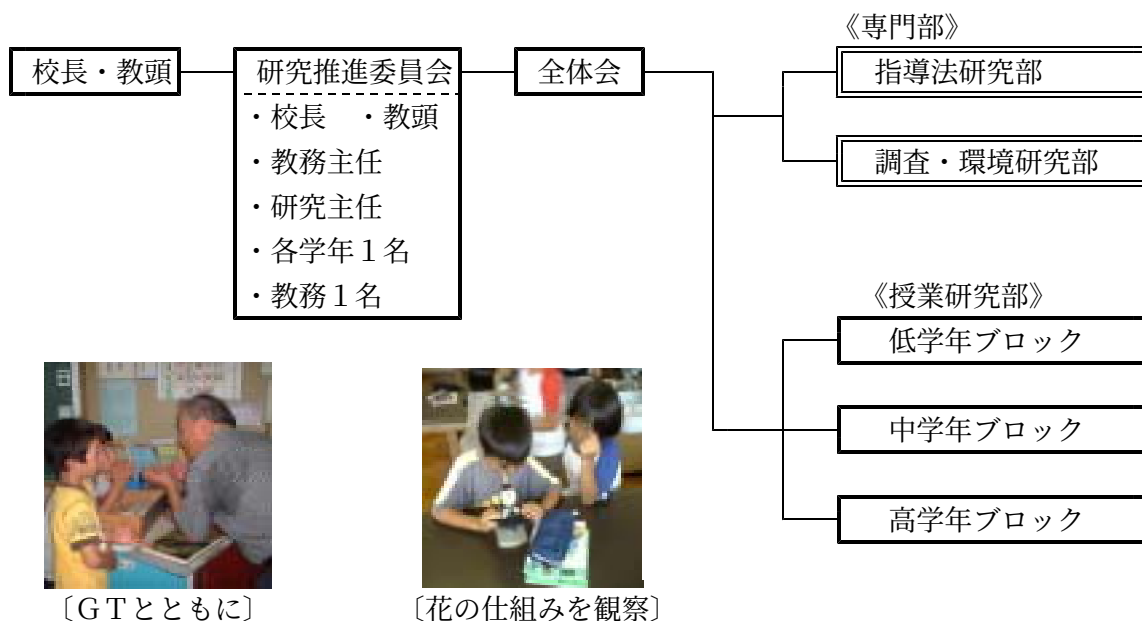
(1) 研究のねらい

自然の事象にかかわる問題解決の活動や日常生活との関わりを一層重視した様々な取組を通して、自然の事象に、主体的に働きかける理科好きな児童を育成する。

(2) 研究主題設定の理由

近年の科学技術の進歩に伴い、児童を取り巻く生活環境は大変便利になってきた。しかし、その反面で、日常生活の中で自然の事象との関わりが希薄になり、理科に対する関心が薄れてきている現状がある。そこで、日常生活とのかかわりを重視した様々な取組を工夫することにより、児童が自然の事象をより身近に感じ、自然の事象に目を向けるようになる、つまり、理科好きな子が育成できると考え、本主題を設定した。

(3) 研究組織



3 実践事例（５年・理科 「わたしたちの气象台」・本時の学習指導 ８／１０時）

（１）本時で重視する資質・能力

・天気の変化の規則性と台風の特徴について、比較しながらその相違点を導き出す力

（２）目標

【自然事象への関心・意欲・態度】

・友達の発表について関心をもち、その内容をしっかりと聞き取ろうとすることができる。

【科学的な思考】

・発表内容にもとづき、台風の特徴や影響について、一般の天気の変化の規則性と比較しながら考えることができる。

【観察・実験の技能・表現】

・台風の特徴や影響について、整理しながら聞き手にわかりやすく発表することができる。

【自然事象についての知識・理解】

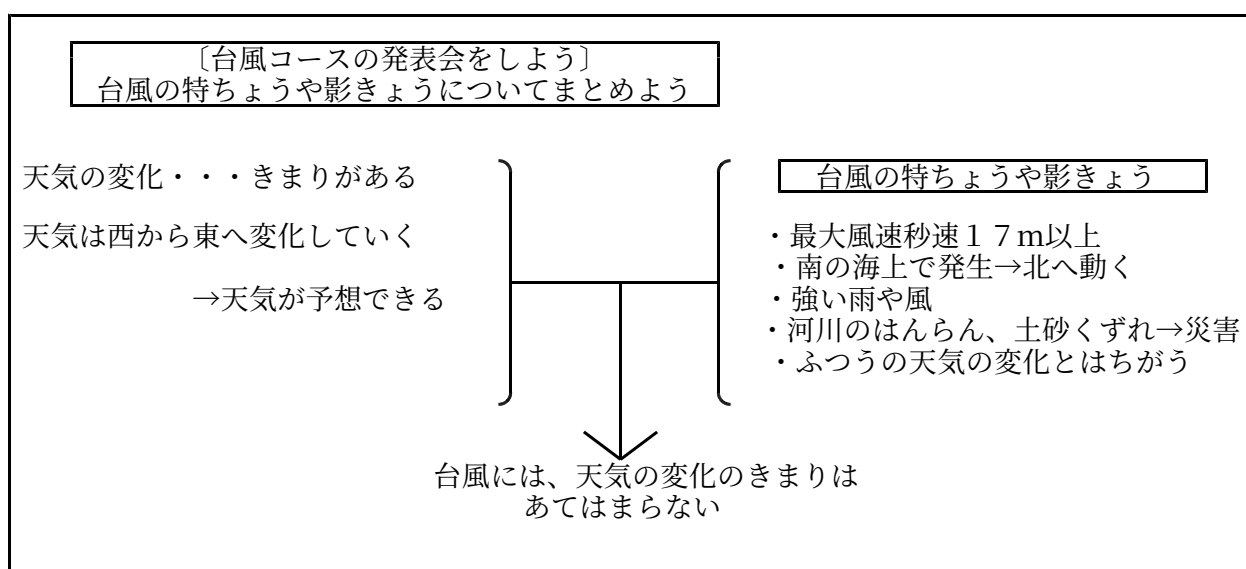
・台風の進路には、西から東へという規則性があてはまらず、強い雨や風をもたらすことを理解することができる。

（３）展開

学習活動	教師の働きかけと予想される児童の活動		◇留意点・◆評価（評価方法）	時
1 前時の学習を想起する。	《T1》	《T2》 「前の時間の学習を思い出してみよう。」 「天気の変化にはどんなきまりがありましたか。」	◇学習計画表等の掲示資料を活用しする。 ◇発問して考えさせることにより、前時の学習内容について想起させる。	5
2 本時の学習課題を確認する。	C1 「天気は西から東に変化していくよ」 ・映像資料を提示する。 ・板書を行う。 C2 「雲の様子などがわかれば、明日の天気が予想できるよ。」 ・板書を行う。	「天気の変化のきまりを知っていると、普段の生活でどのように役立ちますか。」 ・前時の学習が日常生活に役立つことをおさえる。	◇天気の変化には、西から東へ移り変わっていくという規則性があることを確認する。 ◇映像資料を活用して確認する。 ◇天気の変化の規則性を知っていると、今後の天気の予想ができることを押さえる。	2
3 発表会の手順や方法を確認する。	〔台風コースの発表会をしよう〕 台風の特徴や影響についてまとめよう		◇発表の手順や方法について、掲示資料などを活用して確認する。	3
4 発表会を行う。	「発表会の流れと方法を確認めます。」 「発表をする人も聞く人も、天気の変化のきまりと比べながら、発表内容について考えてみましょう。」 「それでは発表をお願いします。」	・発表会の手順について掲示する。 ・実物投影機を操作する。	◇「確認する内容」 ・グループの発表順 ・グループの全員が発表すること。 ・課題、調べた方法、調べた内容、わかったことについて、整理して発表すること。 ・聞き手に伝わるよう、ゆっくりと大きな声で発表すること。 ◇実物投影機を活用して、効率的に発表会を進行する。 ◇前々時に発表の練習を行わせ、助言を与えておく。 ◇聞き手には、ワークシートに発表内容のメモをさせる。重要な内容のみのメモとする。 ◇個々の発表ごとに、その発表内容を生かしながら、重要な内容を簡潔に板書に整理していく。 ◇個々の発表ごとに、その発表のよさについて取り上げ、称賛する。 ◆台風の特徴や影響について、整理しながら聞き手にわかりやすく発表す	20

7 次時の学習活動を確認する。	C1「新しいことを知ったね。」 C2「台風は天気のみまりには関係がないんだ。」 C3「台風は大きな災害につながることもあるんだ。」 「次の時間は、天気や台風について、もっと調べてみたいことを決めて調べていきましょう。」	◇知的な発見があった児童、学習成果についての喜びを体感している児童、本時の学習内容に即した感想を書いた児童らに発表させ、本時の学習に対する達成感や充実感を味わわせる。 ◇次時の予告を行い、次時の学習活動に対する意欲を持たせる。
-----------------	---	---

【板書計画】



4 研究の成果○と課題◇

- 学習環境を整えることにより、児童の自然事象に対する関心を高めることができた。
- 地域素材の教材化を図ることにより、身近な自然に触れながら、授業を展開することができ、理科を身近に感じることができるようになってきた。
- T T の導入、地域人材の活用、問題解決的な学習の展開、具体的な活動や日常生活とのかわりの重視など、学習指導法の工夫・改善により、意欲的に学習に取り組むようになってきた。
- 中学校や大学、関係諸機関、地域の方々との連携体制を確立することにより、児童の知的好奇心を喚起し、自然に対する興味・関心を高めることができた。

- ◇ 科学的なものの見方や考え方を育成することのできる学習指導の在り方の研究
- ◇ 年間指導計画や評価計画の見直し
- ◇ 自然に親しむことのできる更なる環境の整備
- ◇ 中学校や関係諸機関、地域人材との継続的な連携
- ◇ 地域素材の教材化や教職員の観察・実験技能の習得



〔職員の実技研修〕



〔ビオトープ〕

2 研究の内容

(1) 指導法研究部の活動

◎ ねらい 研究主題に迫るため、授業改善という視点から指導法や学習形態の在り方について検討し提案する。

① 授業づくりの視点を研究仮説として明確化した。

〔生活科〕	
・仮説1	児童の実態を把握し、児童自身の意識（思いや願い）を大切にした学習活動を展開すれば、自然事象に主体的に働きかける児童が育成できるであろう。
・仮説2	具体的な活動や体験を多く取り入れ、自然と直接関わる学習活動を展開すれば、自然に親しみ、自然を愛する心豊かな児童が育成できるであろう。
・仮説3	地域の自然環境や身近な人材を活用し、日常生活との関わりを重視した授業を展開していけば、身の回りの自然を使用しながら遊びや生活を工夫することのできる児童が育成できるであろう。
〔理科〕	
・仮説1	児童の実態を把握し、問題解決的な学習活動を展開すれば、自然の事象に主体的に働きかける児童が育成できるであろう。
・仮説2	観察・実験や具体的な活動を多く取り入れ、自然と関わる学習活動を展開すれば、自然に親しみ、自然を愛する心豊かな児童が育成できるであろう。
・仮説3	地域の自然環境や身近な人材を活用し、日常生活との関わりを重視した授業を展開していけば、自然の性質や規則性を積極的に生かすことができる児童が育成できるであろう。

② 理科の学習過程を明確化した（5段階）。

1	つかむ	→	2	見通す	→	3	確かめる	→	4	まとめる	→	5	深める
---	-----	---	---	-----	---	---	------	---	---	------	---	---	-----

③ 学習指導案の形式を明確化した。

ア 学習指導案の最初に、「研究主題」「目指す児童像」「研究の仮説と具体的な手立て」を記述し、授業づくりの視点を明確にした。

イ 指導計画の中に、研究仮説に対する具体的な手立ての実践場面を位置づけ、仮説検証のための具体化を図った。

ウ 「単元全体の構想」を図でまとめることにより、教師自身が単元全体を通しての問題解決の流れを把握するようにした。

オ 板書計画を明確にし、学習指導の流れや基礎・基本として押さえるべき点を明確にして指導に当たるようにした。

④ 「育成すべき資質・能力の一覧表」を作成した。

⑤ 「他教科・領域との関連一覧表」を作成した。

⑥ 「ノートや観察カードの書き方の手引き」（児童向き）を作成した。

⑦ 「地域人材リスト」を作成し、活用を図った。

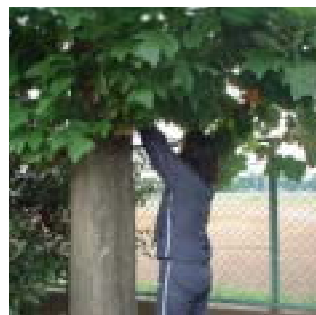
(2) 調査・環境研究部の活動

◎ ねらい 児童、保護者、教師を対象に理科や生活科に関する諸調査を行い、その実態等を明確にすることで、研究の具体的な方向性を見出す。また、継続的な調査により、研究の成果を検証していく。更に、理科・生活科に関する環境整備に努める。

- ① 児童への意識調査を行った。
- ② 教師対象の意識調査を行った。
- ③ 自然事象にたくさん触れることのできる環境整備に努めた。
(ビオトープの整備、樹木プレートの作成、理科室の掲示物、学校周辺の野草調査やマップ作り等)



〔理科室の掲示物〕



〔樹木プレートの取り付け〕

(3) 授業研究会の開催（日常生活とのかかわり重視、T TやG Tの導入、指導法の工夫）

〔平成15年度〕		4回
○1年	生活科	「冬から春への移り変わりを発見しよう」
○3年	理科	「おもちゃランドをひらこう」
○4年	理科	「空気や水の性質」
○6年	理科	「電流と電磁石」
〔平成16年度〕		12回
○1年	生活科	「いきものだいすき」
○1年	生活科	「わたしのおうち1－むかしのあそびをやりましょう」
○2年	生活科	「野菜を育てよう」
○2年	生活科	「大きくなったね、やさいさん」
○3年	理科	「植物のつくりとそだち」
○3年	理科	「電気であかりをつけよう」
○4年	理科	「夏のしぜん」
○4年	理科	「ものの温度とかさ」
○5年	理科	「花から実へ」
○5年	理科	「わたしたちの气象台」
○6年	理科	「ヒトと動物の体」
○6年	理科	「水よう液の性質」



〔獣医さんに質問〕

(4) 地域との連携体制づくり

- ① シンポジウム（平成15年12月）や地区連絡協議会（平成16年5月）の開催
- ② リーフレットの作成・配布
- ③ 城西大学教員による理科朝会（低・中・高学年別）の開催
- ④ 地域人材リストの作成・活用



〔シンポジウム〕



〔城西大学教員による理科朝会〕



〔高校生の協力を得たものづくり授業〕

(5) 中学校との連携を図った取組

- ① 中学校理科教員による「出前授業」の実施
- ② 中学校での「おもしろサイエンス教室」「ウィークエンド科学探検教室」への参加
- ③ ノーベル物理学賞受賞の小柴昌俊東京大学名誉教授に代表児童・生徒がインタビュー



〔中学校教員による出前授業〕



〔小柴先生へのインタビュー〕

研究主題

「自ら学び考え、主体的に取り組む生徒の育成」

～生徒一人一人の意欲を引き出す指導の研究を通して～

川越市立東中学校

研究のポイント

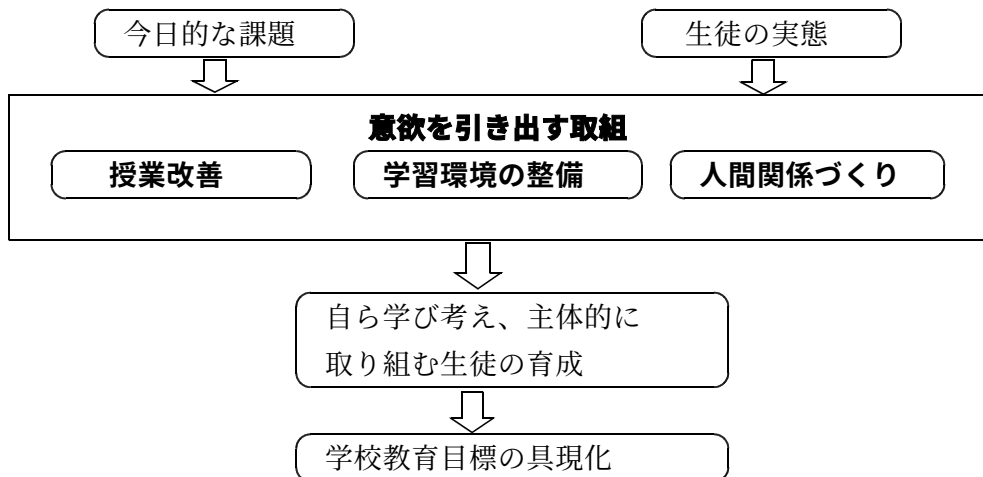
- 本校が抱えている課題や問題の客観的な把握・分析により、改善への具体策を考え実践することで、学校教育目標の具現化に迫る研究とする。
- 生徒の基礎学力の向上と、学習への意欲を引き出す指導法・評価法研究を通して、授業改善を図る。
- 東中学校の学習環境の現状を分析し、課題を把握し、その解決を図ることによって主体的に取り組む生徒の育成を図る。
- 生徒の社会性の状況分析の上に、生徒相互、生徒と教師、地域の人々との豊かな人間関係づくりを推進することで、意欲を持って主体的に取り組む生徒の育成を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

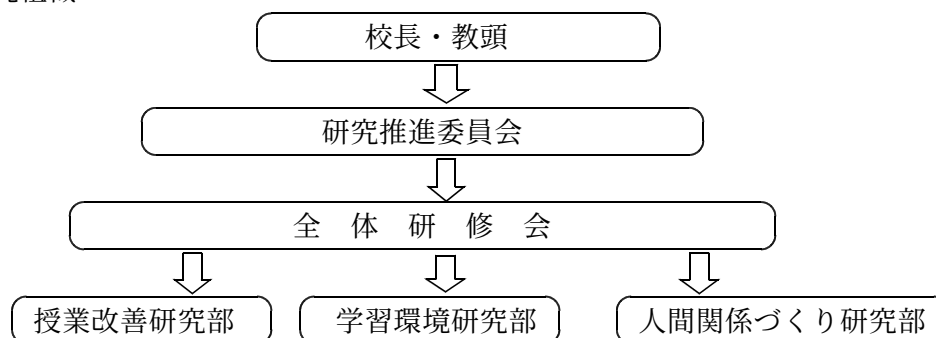
本校では、学校教育目標「自ら学び考え、主体的に行動する心豊かな生徒」の実現を目指し全校を挙げて努力している。しかし、数年来、解決すべき生徒指導上の課題も多く苦慮してきた。そこで課題解決に向け、さらに組織的・系統的に研究し、実践を続けることにより、本校の教育の質を高め、生徒の意欲を引き出し、「自ら学び考え、主体的に取り組む生徒の育成」を図ることをねらいとした。

(2) 研究主題設定の理由



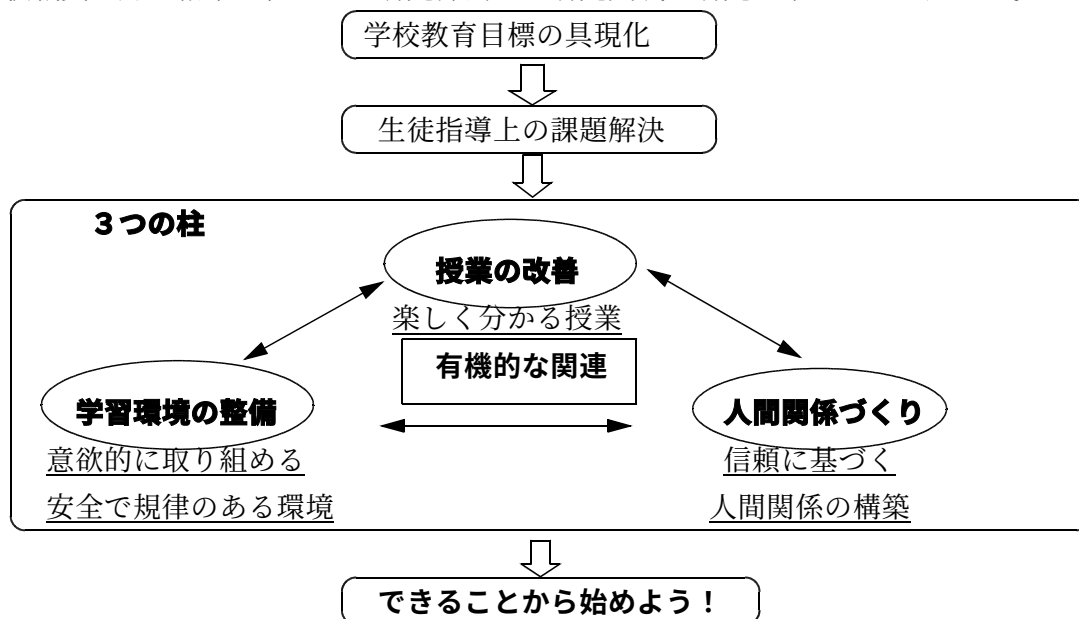
本校の生徒は全体として明るく素直で、行事や部活動を含め諸活動に積極的に取り組んでいる。地域社会の学校への支援も大変しっかりしている。しかしここ数年、学習や学校生活への意欲が持てず、非行・問題行動を起こす生徒集団への対応や指導に苦慮してきた。このような現状の中で、本校では学校教育目標として「自ら学び考え、主体的に行動する心豊かな生徒」を掲げ、目の前の具体的な生徒指導上の課題の解決も含め、その具現化に向け努力を続けてきた。その中で、授業の改善、学習環境の整備、人間関係づくりの推進を通して、生徒一人一人のやる気を引き出し、主体的にひたむきにがんばれる生徒を育成することが、学校教育目標の具現化につながるととらえ、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容（研究の5つの重点）

(1) 教職員の力を結集し、3つの研究部会での研究実践を研究の中心として進めた。



本校では、平成14年度から全教職員が3つの部会に分かれ、生徒指導上の課題解決をめざして研究実践を続けてきた。「授業改善研究部」「学習環境研究部」「人間関係づくり研究部」ではピースメソッド(社会性調査)や生徒による授業のアンケート、生徒の意識調査等による現状把握を行った。そして改善への具体的な手立ての策定、提案、教職員での共通理解、実践、評価といったサイクルにより改善を図ってきた。さらに今できること、年度途中でも準備して実行できること、長期的に次年度には改善すべきこと等に分けての実践を続けてきた。「できることから始めよう!」を合言葉に小さな一歩を大切に実践を続けてきた。

(2) 保護者、PTA、地域社会や校区内小学校との連携を深めた。

(3) 活用できる様々な県や市の事業、支援を得て教育活動の実を高めた。

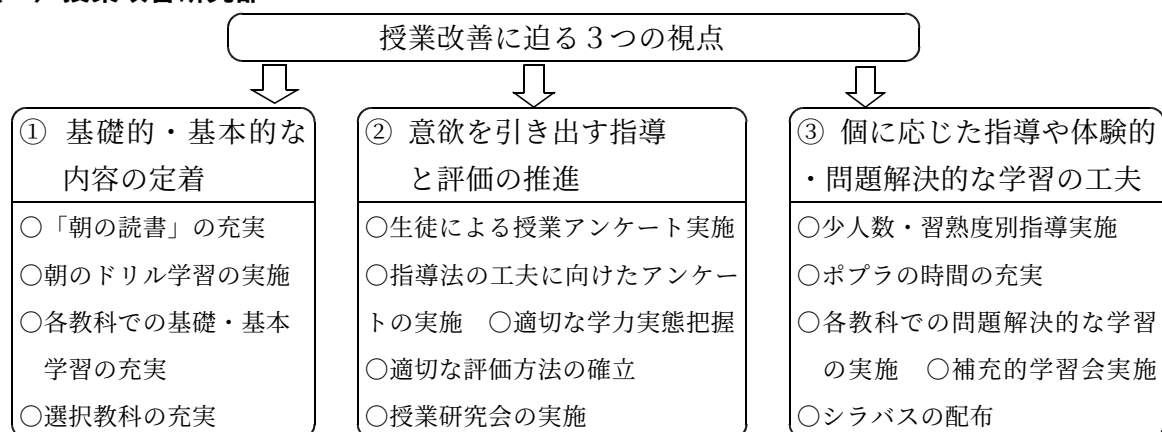
「スクールサポーター、カウンセラー、少人数指導法加配(数学、英語、社会)等」

(4) 県教委中高生奉仕・社会体験活動推進事業「なかなかやるな中学生」の委嘱を受け、体験活動、ボランティア活動を推進した。

(5) 保護者、地域の方々や様々な外部指導者を生かした教育の推進を図った。

3 研究の事例

(1) 授業改善研究部



① 基礎的・基本的な内容の定着

- ア 「朝の読書」を今年度4月から通年で実施した。
- イ 「朝の読書」の時間帯を利用して、漢字や計算のドリル学習を実施した。
- ウ 選択教科で1教科において複数コースを設定する場合、Aは補充的な学習とし、B・C・DEでは発展的な学習を行った。

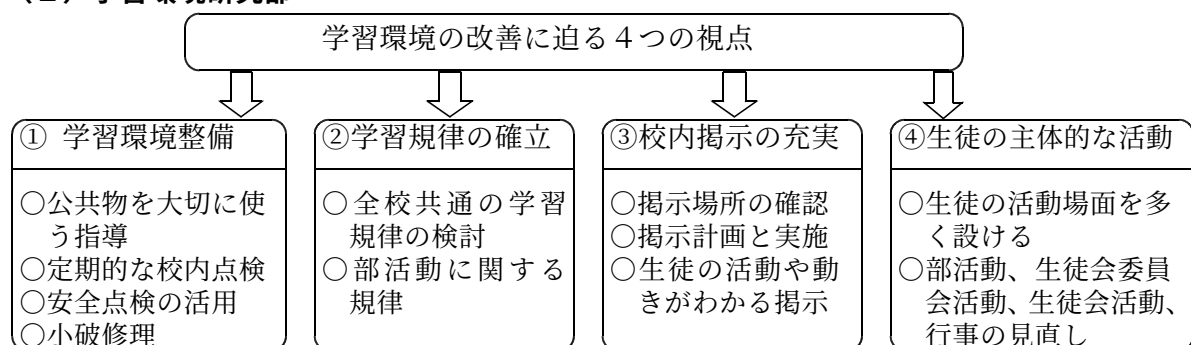
② 意欲を引き出す指導と評価の推進

- ア 全教科で生徒による授業アンケートを実施し、自己の授業を見直した。
- イ 教師による効果的な指導法アンケートを実施した。
- ウ 教研式標準学力検査の分析、活用を図った。
- エ 評価と評定についての研修を行い、教科間の統一を図った。
- オ 各教科、道徳、特別活動での授業研究会を実施した。

③ 個に応じた指導や体験的・問題解決的な学習の工夫

- ア 少人数指導（数学科、社会科）・習熟度別指導（英語科）を実施した。
- イ 体験的な活動（特に総合的な学習の時間「ポプラの時間」で）の充実を図った。
- ウ 理科、国語等の教科において問題解決的な学習の充実を図った。
- エ 定期テスト前毎と夏季休業中（学校と、古谷公民館）に個別学習会を実施した。
- オ 9教科の学習シラバスを配布し、学習・評価計画を年度当初に示すようにした。

(2) 学習環境研究部



① 学習環境整備に関する具体的な取組

- ア 毎月10日の全職員による安全点検を確実に実施し、環境整備に努めた。

イ 各学年に工具セットを配布し、利用した。管理は各学年で行った。

ウ 毎週金曜日の放課後に生徒と共に校内点検を行った。

② 学習規律の確立に関する具体的な取組

ア 全校共通の学習規律を決め、全校で実行した。

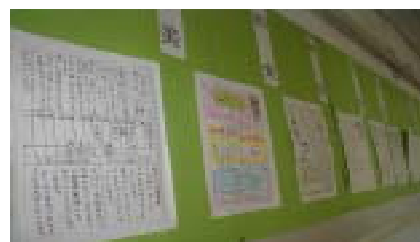
イ 全校一斉に朝の読書を開始した。図書委員・学級委員による着席の呼びかけの実施。

ウ 授業の開始・終了時の号令と挨拶、不在生徒の確認を徹底した。

③ 校内掲示の充実に関する具体的な取組

ア 校内の掲示場所を確認し、生徒の活動がわかるよう工夫して活用した。

職員室廊下側掲示板	学校、学年、進路、保健、相談室等諸たより
各学年の廊下の掲示板	学年目標、生徒向け連絡
北校舎1階の廊下掲示板	ポスター類
北校舎2階中央通路掲示板	生徒会本部・委員会の新聞等



【委員会新聞の掲示】

イ 各教室の掲示の充実を図る。

(ア) 生徒の所属感を高め、教室環境を豊かにする掲示の工夫を行った。

(イ) 各教科のレポートやポスター等の学習成果や遠足等の掲示物を充実した。

④ 生徒の主体的な活動に関する具体的な取組

ア 生徒会本部の活動のアピール

(ア) 生徒会本部が現在行っている活動を紹介するコーナーを設けた。

(イ) 昼の放送を利用し、タイムリーな話題にふれ、学校生活への意識づけを行った。

イ 部活動のアピール

(ア) 新入生オリエンテーションでの工夫や掲示物による新入生の勧誘を行った。

(イ) 大会目標等の掲示と発表を計画し行った。

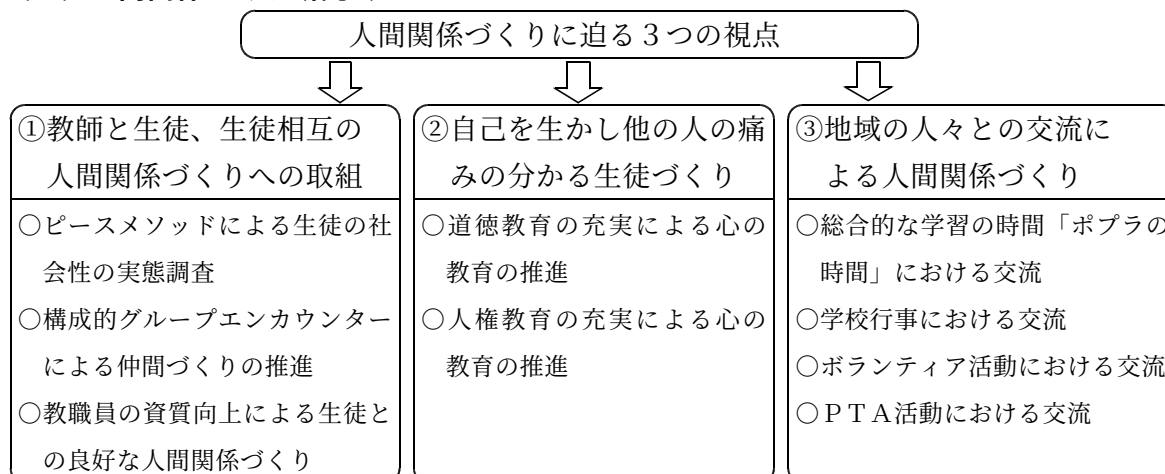
ウ 生徒主体の集会や行事の企画・運営

エ 生徒の主体的な活動を引き出す全校遠足の取組

(ア) 生徒自らが遠足のルールを決定し守ることにより、規範意識を高めた。

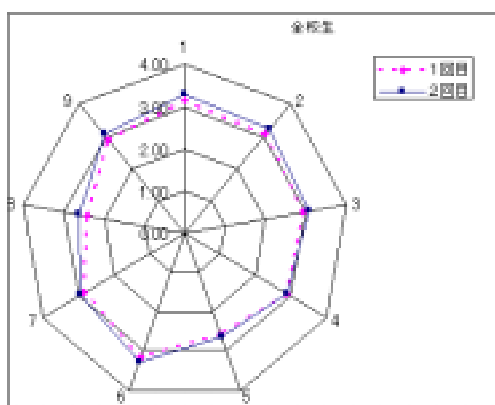
(イ) 自分たちの手で作った遠足を自分たちの手で成功させることにより、成就感や満足感を味わわせ、学校生活に対する意欲と主体性・自尊感情を高めた。

(3) 人間関係づくり研究会



① 教師と生徒、生徒相互の人間関係づくりへの取組

ア 第1回・第2回ピースメソッドによる生徒の社会性の実態調査結果



1 コミュニケーション、2 アサーション 3 共感性 4 将来展望 5 自尊感情
6 集団参加能力 7 実践力 8 規範意識 9 基本的な生活習慣

イ 結果((7)(イ)(ウ)) 及び変化((エ)(オ)) の考察

- (7) 各項目とも4段階で回答を求めているため、単純な平均値は「2.50」である。第1回調査の結果では、いずれの学年も各項目における数値が「3」前後であるため、生徒の社会性はおおむね良好な状態にある。
- (イ) 「自尊感情」および「規範意識」の数値が低くなっているが、全県的な中学生の傾向と考えられる。

- (ウ) 本校における取組は、全ての項目の数値を高めることが目標であり、特に「自尊感情」および「規範意識」を意識した研究の実践が大きな課題である。

- (エ) 全ての項目の中で「規範意識」の数値が「0.20」ポイントと最も高い伸び率であった。道徳教育を中心に「規範意識」についての取組を積極的に行った成果であると考えられる。

- (オ) 課題であった「自尊感情」の数値が「0.10」ポイントの伸びにとどまったのは、自己形成期で不安定な中学生にとって、「自尊感情」を高める指導は時間がかかるためと考えられる。

ウ 構成的グループエンカウターの実践

各学年ともに、各月毎に、他者理解「名刺交換」や「自己紹介ビンゴ」、自己理解エゴグラム「自分探し」、自己受容「私は私が好きです」等、構成的グループエンカウターを活用した授業を、継続して各クラスで実施した。

② 自己を生かし、他の人の痛みの分かる生徒づくり

ア 道徳の時間の実践

ピースメソッドによる結果から、規範意識や自尊感情を高めるために、4-(2)法やきまりを守る「人に迷惑をかけなければいいのか」、きまりの意義「つかの間の出来事」、社会秩序の向上「傘の下」、きまりを守る「元さんと二通の手紙」等を実践した。

イ 人権教育の実践

「いじめについて考えよう」、読み物資料「おまえ、すげー、チビだな!」、人権作文の取組、アンケート調査の実施、ビデオ視聴「みーつけた!」、アサーションプログラム「読書」、ビデオ視聴「明日への彩り」、視覚障害者の講演(講師 内藤夏子氏)、「車いす」「アイマスク歩行」「手話」「点字」の福祉体験等を実施した。

③ 地域の人々との交流による取組

ア 総合的な学習の時間での地元の郷土史家、地域で生活する外国人、「福祉体験」の学習でボランティアグループ等を講師として招聘した。

イ 学校行事、特に化体験学習会ではサークル活動をしている地域の人々約100名を講師に招聘した。

ウ ボランティア活動「なかなかやるな中学生」の実践として、生徒会の役員を中心に特別養護老人ホーム「すみれの里」でのボランティア活動を行った。

エ 年3回の資源回収や除草作業、さらに「ふれあいの会」としてミニコンサートや国体競技観戦をPTAが企画し、生徒、教師、保護者が一緒になって汗を流した。

4 研究の成果と課題

(1) 成 果

① 課題把握・分析・評価の充実

ピースメソッド（社会性調査）や生徒や保護者へのアンケート、さらに諸検査による具体的な達成状況を基に、具体策を考え実践していく姿勢が定着した。

② 生徒指導上の課題解決に向けた、組織的な取組の充実

課題解決に向け、具体的な行動計画を策定し、職員全員での共通理解の下、できることからすぐに実行するという意識が浸透した。

③ 授業における個に応じた指導の充実

少人数指導や習熟度別指導等の指導方法や各教科における個に応じた指導方法での工夫が進んだ。標準学力検査の結果も、前年度と比較して向上した。

④ 人間関係づくりの取組による社会性の向上

構造的グループエンカウンター等の取組により、社会性において向上が見られた。

⑤ 落ち着いた学校生活の実現

外部からの様々な支援、教職員の一致団結した努力により、生徒に集団としてののけじめや基本的な生活習慣が身に付き、主体的・意欲的な活動が多く見られるようになった。

(2) 課 題

① 意欲を引き出す授業へのさらなる研鑽

少人数指導や習熟度別指導における指導法の研究、指導に生きる評価法の研究、補充的な学習や発展的な学習の推進、問題解決的な学習や体験的な学習の充実、教科への外部指導者の活用等の視点から、学習指導の具体的な改善を進めていく必要がある。

② 生徒による主体的な活動の一層の推進

委員会活動、行事や学年での生徒の主体的な活動を育てる場面や手立てを具体的に進め、自分たちの手でよりよい学校生活を築くという意識を高める必要がある。

③ 教職員と生徒、生徒相互の豊かな人間関係づくりの継続と改善

教育の基盤は信頼である。今後さらに人と人との豊かな関係を築く努力をすることが大切である。ボランティア活動の積極的な推進を図ることで、心を耕す体験的な活動や実践をさらに充実していく必要がある。

④ 学校教育目標の具現化をめざした組織的な実践の継続

より高い目標を掲げ、組織的に、具体的な実践を着実に継続することが肝要である。

「小中連携による生徒指導のあり方」 —彩の国スクーリング・ジョイントモデル校の実践—

川越市立大東中学校

研究のポイント

小・中学校がジョイントして、一貫した指導支援体制をつくることにより、中学１年で急増する不登校生徒の解消を図る。さらに、小中の連携から発展させ、家庭・地域・関係機関・保育園・高校等とジョイントすることにより、学校教育の充実を図る。

○児童・生徒がジョイントして、温かい人間関係を育てる。

○教職員がジョイントして、小・中学校で一貫した指導体制の推進に努める。

○情報によるジョイントを通して、個を生かす指導を推進する。

○家庭・地域・専門家・関係機関とジョイントし、子どもの健全育成を図る。

1 研究の概要（ねらい・研究主題の設定）

（１）研究のねらい（目指す子ども像）

- ・真心のこもった明るく、気持ちよいあいさつができる生徒
- ・希望と意欲をもって積極的に活動する生徒
- ・相手の意見や気持ちを大切にし、豊かで実りある生活を送る生徒
- ・様々な活動を通して、互いに励まし協力し合える生徒

（２）研究主題設定の理由（小・中学校の連携が求められる背景）

（平成１５年８月 国立教育政策研究所生徒指導研究センター
「中１不登校生徒調査（中間報告）」より）

平成１３年度不登校児童生徒数の実態

- ・不登校児童生徒数は学年が上がるにつれて増加している。
- ・中学１年時において、小学６年時と比較して、約３倍になる。
- ・中学１年で不登校になっている生徒の半数（５１％）は、小学校時に不登校の経験があった。さらに、１７％の生徒は、小学校時に不登校傾向が見られた。

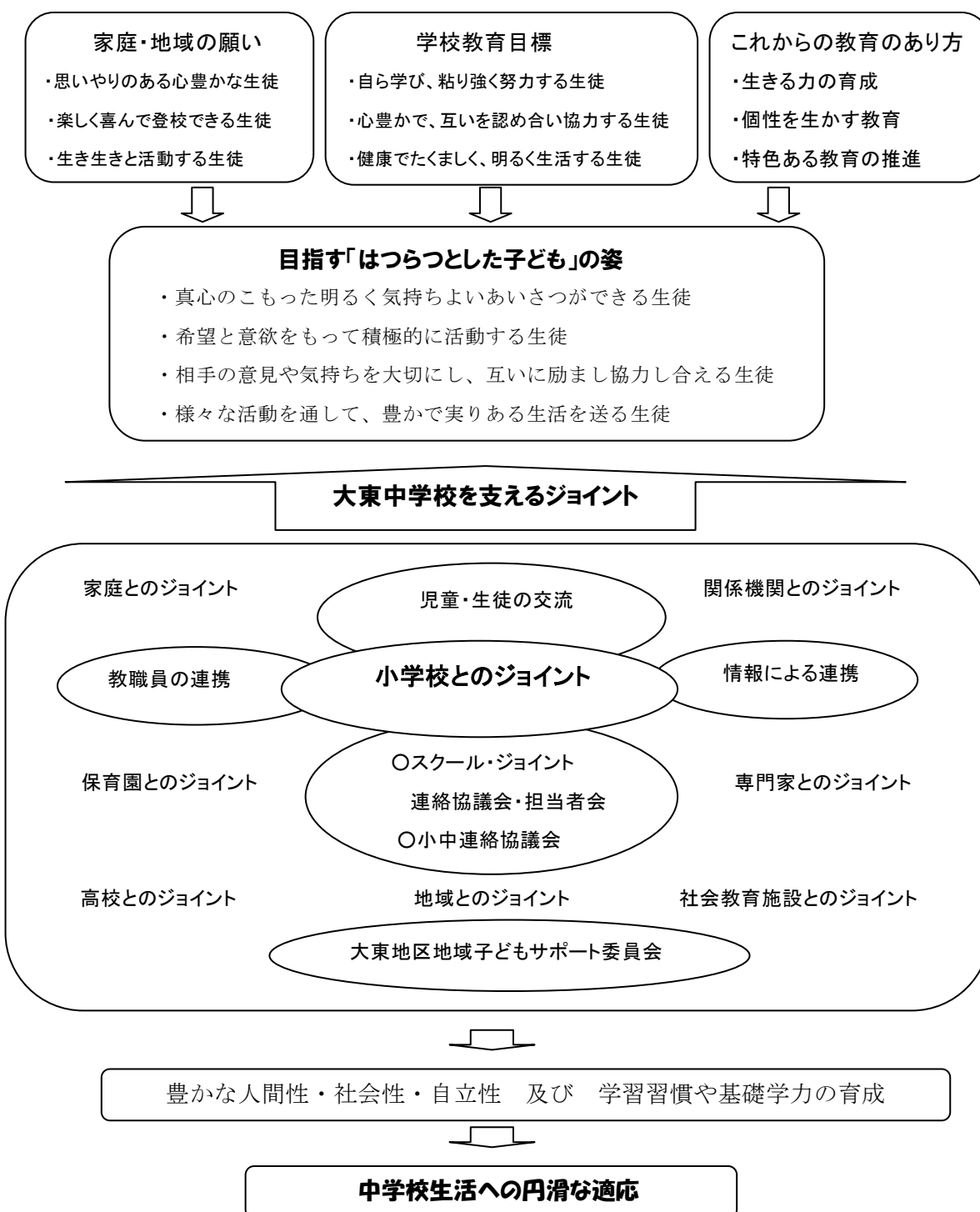


- ・中学１年時の不登校生徒の約３分の２は、小学校までさかのぼって原因を考える必要がある。
- ・不登校は中学校で急増するというだけではなく、小学校での潜在的な問題が、中学校になって不登校という形で顕在化すると考えられる。



*学区内の小学校と中学校が緊密に連携して取り組むことが必要である。

(3) 研究の構想



(4) 研究の視点

- 視点1：教職員が連携し、一貫した指導を目指す。
- 視点2：児童・生徒が交流し、温かい人間関係の醸成を目指す。
- 視点3：情報による連携を通して、個を生かす指導を目指す。
- 視点4：家庭・地域・専門家・関係機関と連携・協力し、子どもの健全育成を図る。

(5) 彩の国スクーリング・ジョイントモデル校

小・中学校がジョイント（交流・連携・協力）して、9年間を見通した教育のあり方について研究し、子どもの豊かな人間性をはぐくむことを目的としている。大東中学校区4校（大東中学校・武蔵野小学校・大塚小学校・大東東小学校）は、平成15年度よりモデル校に指定され、協力して研究に取り組んできた。

2 研究の内容（主な実践とそのねらい・成果）

(1) 児童・生徒がジョイントして、温かい人間関係を育てる。

① ねらい

- 中学生が小学生や園児との交流を深め、優しさ、思いやりの心を育てるとともに、中学生としての自主性、自立性を養う。
- 小学生が大東中学校について親しみをもち、中学校生活に対する夢・希望・憧れを育てる。
- 子どもの母校や地域に対する関心・愛着を育てる。

② 主な実践例

- ・部活動交流会・大東中学校見学会
- ・母校訪問
- ・ジョイント音楽祭
（大東中学校合唱コンクール）
- ・生徒会による新入生説明会
- ・ふれあいコンサート
- ・園児とのいもほり体験
- ・保育実習



母校訪問

③ 成果

- ・生徒が行事に前向きに取り組み、活動に対する自覚や意欲が高まる。
- ・児童に対して優しく、ていねいに教えるなど、思いやりの心や社会性が育っている。
- ・「中学生が一生けんめいに部活動をやっているのでおどろいた。中学校に行くことが楽しみになった。」（部活動交流会のアンケート）
- ・「歌声も聞いている態度も立派だった。……来年、ぼくも、こんな歌が歌えると思ったら、わくわくします。」（ジョイント音楽祭のアンケート）

(2) 教職員がジョイントして、小・中学校で一貫した指導の推進に努める。

① ねらい

- 小・中学校の教職員が校種を超えた学校理解と小中の連携を図る。
- 生徒指導や学習指導において、9年間を見通した指導の手がかりを得る。
- 小中学校の教員が合同で研修し、教職員の意識に変革を図る。

② 主な実践例

- ・Jプラン（小・中学校教員人事交流）
- ・スクーリング・ジョイント連絡協議会（関係小・中学校長会・担当者会）

- ・小中学校合同研修会・講演会
- ・小中連絡協議会
- ・小中学校教員によるT T授業
- ・中高等学校教員によるT T授業
- ・さわやか相談員の定期的な小学校訪問
- ・積極的な授業公開

③ 成 果

- ・研修内容、形態が工夫でき、教員の校種を越えた子ども理解と教育活動に対する関心が深まっている。
- ・小中学校合同研修会をとして、異校種間の学校理解や協働関係の必要性について認識できた。
- ・Jプラン教員が小中学校での勤務経験を生かして小中連携の架け橋となり、生徒指導や学習指導の実態についての情報の発信ができた。
- ・「小学校で教わって顔を知っている先生（Jプラン教員・小中合同授業の教員）がいたので、リラックスできた。」（入学後の中学1年生のアンケート）



小・中学校教員によるT T授業

（3）情報によるジョイントを通して、個を生かす指導を推進する。

① ねらい

- 児童・生徒に関する積極的な情報交換を図り、個に応じた指導・支援に努める。
- 不登校児童・生徒についての個票を作成し、情報を基に様々な視点から子どもがどのような状態にあり、どのような支援を必要としているか見極めを行い、不登校問題の削減に努める。
- 共通の課題意識をもった研修、学校だよりや学校案内冊子を通して、学校間の理解と連携を図る。

② 主な実践例

- ・学校だよりの交換
- ・小中合同の事例研修会
- ・中学校生活についてのアンケート
- ・不登校児童生徒に関する個票の交換
- ・中学校生活の紹介冊子の配布
- ・標準化された諸検査の活用と情報の共有化（生徒指導検査、標準学力検査等）

③ 成 果

- ・小学生が「大東中だより」を通して学校行事や部活動の様子を知ることができ、中学校生活に対する興味・関心が育っている。
- ・小中学校間のきめ細かな情報交換が図れ、生徒一人一人に応じた生徒指導、学習指導の推進が図れる。
- ・不登校傾向の児童生徒に関する早い段階での実態把握と対応策の検討の必要性を認識できた。
- ・生徒指導の情報交換から発展して、小中連携による学力の育成を目指して、学力に係る情報の交換と共有化が図れた。

(4) 家庭・地域・専門家・関係機関とジョイントして、子どもの健全育成を図る。

① ねらい

- 保護者、地域と連携・協力し、学校内外の連携を基盤とした学校教育の推進を図る。
- 専門家や関係機関との連携を図り、適切な指導・支援を受け、指導の効果を高める。
- 配慮を要する生徒に対して多様な視点をもって指導・支援にあたり、生徒一人一人のよりよい成長を図る。
- 地域との交流を図り、豊かな人間性や社会性の育成を図る。

② 主な実践例

- ・合唱コンクールの小学校保護者への公開
- ・PTA 家庭教育学級のジョイント講座
- ・生徒・保護者・地域の方々による資源回収
- ・大東地区地域子どもサポート事業
(公民館との連携・子どもフェスティバル)
- ・川越市中学生社会体験事業 (3 days チャレンジ)
- ・餅つき踊りの体験、福祉体験
- ・大東地区「動く子ども110番」
(大東地区地域安全推進連絡会)
- ・スクールカウンセラーとの連携
- ・リバーラ・少年サポートセンターとの連携



子どもフェスティバル(おまんじゅうづくり)

③ 成果

- ・保護者との人間関係づくり、地域との交流が図れ、学校に対する信頼が得られている。
- ・関係機関との連携を生徒指導・教育相談体制の中に位置づけ、組織的な生徒指導の推進が図れている。
- ・生徒が多様な体験的な活動を通して、社会性が育ち、地域への関心が高まっている。

(5) 資料：中学校生活についてのアンケート結果

調査時期 平成16年4月

調査対象 大東中学校1年生

出身小学校生徒数 (大東東小75、武蔵野小68、大塚小19)

【質問】入学して、小学校との違いで、とまどうことは何かありますか。

(事実の記入による回答・複数回答可)

(Jプラン教員は平成15年度、大塚小に在職した。)

【結果】	大東東小	武蔵野小	大塚小
教科毎に先生が変わる	13	6	1
教科が増えた・新しい教科が入った	4	1	
校内が広い・教室の位置がわからない	17	11	3
教室の移動・授業の移動を自主的に行う	7	4	
中学校は忙しい		1	1
日課表の違い(授業や休み時間の長さ)	3	3	
給食の時間の長さ	1	2	
掃除の時間が最後にある	2	4	2

休み時間に思い切り遊ばなくなった	2		
クラスの友達	3		1
上級生との関係・先輩との関係		4	2
最上級生から下級生になった	1		
部活動	2		
家から遠い	1	3	2
登下校の時間が違う	1	1	1
きまり（髪の毛など）	2		
雰囲気が小学校と違う		1	1
詰め襟の学生服		1	
授業の進め方			1
宿題の量			1
ない・特にない	2 1	1 9	7

3 研究の成果と課題

(1) 成 果

- ① 交流事業において生徒が児童や園児を優しく面倒を見るなど、子ども同士の温かな人間関係や思いやりの心が育っている。さらに、生徒の入学時の過度の緊張感が緩和され、中学校生活への円滑な適応が図れている。
- ② 小学生及びその保護者がジョイント事業に参加することにより、中学校についての理解が図れた。
さらに、中学校生活への期待や憧れを強くした児童が多く、保護者や地域住民の本校に対する信頼も得られている。
- ③ 小・中学校間のジョイント事業の積極的な取組と合わせて、家庭・関係機関等との連携・協力の重要性が再認識されている。そして、不登校生徒及び保護者に対して、様々な視点からの適切な指導・支援が行われ、不登校の解消に効果を上げている。
- ④ 児童生徒に関わる情報を積極的に活用するとともに、小学校の指導を引き継ぎ、小学校から中学校にかけての発達段階に応じた一貫した指導、支援の手立てが見えてきた。
- ⑤ 関係小学校と協力することにより、多様な研修（形態・内容）が実施できた。また、複数の学校の教職員が合同で行うことで、研修の活性化が図れた。
- ⑥ 交流事業や合同研修会を通して、小学校の教育活動に対する関心・理解が深まった。さらに、小中学校の連携から発展して、地域や関係機関等との協力が進み、本校と係わるジョイントの重要性・必要性を再認識する契機となっている。

(2) 課 題

- ① 子どもたちの発達段階の変化に伴って小・中学校の連携が重要になっている。子どもたちの豊かな個性を伸ばすうえで、教員の異校種理解及び小中の教職員と児童生徒の交流を一層推進するとともに、生徒指導を中心とした連携から発展させ教育課程全般に関わる連携が必要である。
- ② 不登校の要因・背景は非常に多様であり、その解決にあたって学校だけでは対応しきれないケースもある。学校・家庭・関係機関等の連携した取組が必要である。特に、小・中学校間での情報の共有化とその活用、継続性・一貫性のある指導・支援が必要である。

「基礎・基本の定着と学習意欲の向上を目指す学習指導」

川越市立霞ヶ関西中学校

研究のポイント

各教科毎に評価の観点に基づいて基礎・基本を再確認し、評価規準表を見直す。
各教科で授業研究会を実施し、学習指導における基礎・基本の定着の手立てを講じる。
A A I、アンケート等から生徒の実態把握・分析を行い、実態を踏まえた指導を行う。
教研式学力検査の結果を分析し、指導の手立てを講じる。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 各教科において、生徒に身に付けさせたい基礎・基本を明確にするとともに、それを身に付けさせるための指導法（支援や評価）を明らかにする。
- ② 生徒の実態に基づいた学習指導を通して、基礎・基本の定着と学習意欲の向上を目指す。

(2) 研究主題設定理由

① 学校教育目標具現化の視点から

学校教育目標「思いやりのある生徒になろう、自ら学ぶ生徒になろう、心身ともに健康な生徒になろう」の具現化に向け、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成を目指すとともに「落ち着いた学校・きれいな学校・元気な学校」を教職員が生徒と一体になって推進しているところである。

そのあるべき学校の姿を目指し、学習指導では基礎・基本の定着に重点を置き、その指導方法を明らかにしていく。

② 今日的な課題から

学校では、完全学校週5日制の下、子どもたちに基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育むことが求められている。特に「生きる力」を「知」の側面からとらえた「確かな学力」については、変化の激しいこれからの社会を担う子どもたちが、新しい時代を主体的、創造的に生きていくために必要不可欠なものである。学校においては授業改善を図り、きめ細かな指導等により、基礎・基本の確実な定着や自ら学び自ら考える力の育成を図ることが求められている。

そこで、本校の生徒の実態を把握し、各教科ごとに授業改善を図り、その指導方法を明らかにしていく。

③ 地域および生徒の実態から

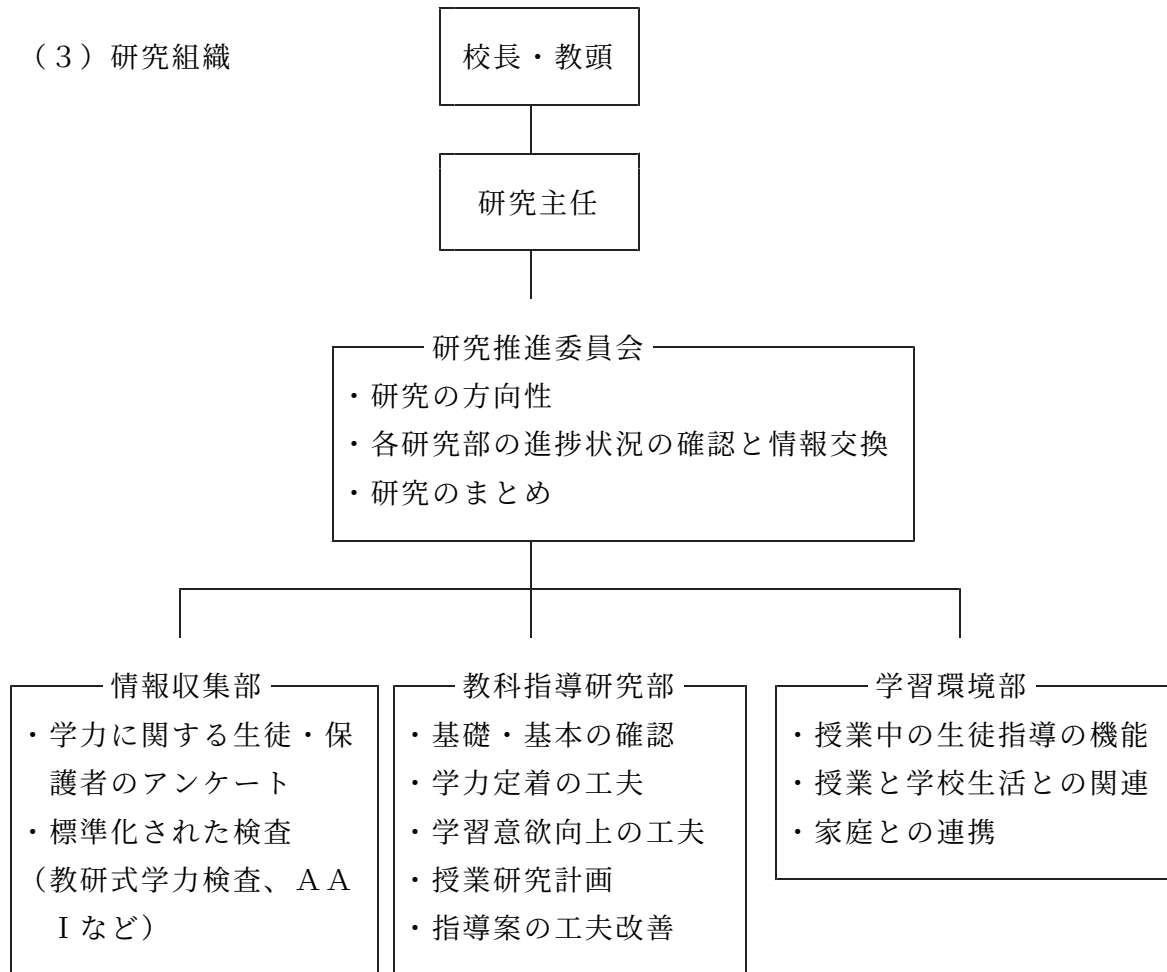
生徒アンケート（平成16年6月15日実施）では、全学年とも90%以上の生徒が意欲的に授業に取り組んでおり、また学年が上がるにつれ、家庭学習の時間が増えていることがわかる。

保護者アンケートによると、学校に対して「学力向上」を強く要望している。家庭学習の時間は30分～1時間程度が全体の70%を占めており、また半数近くが計画的に

家庭学習に取り組んでいない。自ら学び自ら考える生徒の育成を図る点からも家庭での学習習慣の確立は重要である。

これらのことから、学力向上の手立てを学校研究の中で明らかにしていくことが、今後の学習指導では大変重要であるとする。

(3) 研究組織

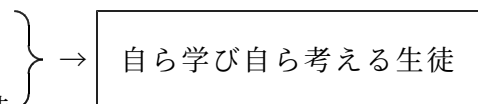


2 研究の内容

(1) 目指す生徒像

(学校教育目標、指導の重点から)

- ・ 自主・自律的行動ができる生徒
- ・ 自ら学び、正しい判断力をもつ生徒
- ・ 基本的生活習慣を身に付けることができる生徒



(2) 研究仮説と手だて

本校の今回の研究では「自ら学び、正しい判断力をもつ生徒」を具現化するために「学習意欲の向上」を目指し、基礎・基本の確実な定着が必要であると考えた。基礎的・基本的な内容の確実な定着を実現するために「一人一人が、自分のものの見方や考え方を持って判断し、行動することができるようにすること」や「一人一人がじっくり学習に取り組み、学ぶことの楽しさや成就感を味わわせ、自ら学ぶ意欲を育てることができるようにすること」である。そのためには、知識・技能にとどまらず、資質や能力も含めた基礎・基本の定着を目指した学習内容や指導方法を工夫する必要がある。

1 各教科において、生徒の実態を踏まえ、学習指導要領における目標・内容をもとに、学習目標及び4観点の評価規準を明確にすれば、身に付けさせる「基礎・基本」がとらえられるであろう。

- 各教科の授業において、学習目標を達成することが「基礎・基本」が定着したと考えられる。これは、各教科毎の評価の観点（①関心・意欲・態度②見方・考え方③技能・表現④知識・理解など）と密接に結びついたものである。
- 「基礎・基本」は単元全体を通して定着が図られるものである。そのため、単元の評価規準、学習活動における具体的評価規準を明確にし、それに基づいて指導と評価を実施する。
- 1時間あるいは1単元を通して、「基礎・基本」を意識して学習指導にあたり、基礎・基本の定着を図る。

2 基礎的・基本的な学習内容を精選し、指導方法を工夫すれば「基礎・基本」を定着させることができるであろう。

- 観察・実験、調査・研究、発表・討論などの体験的な学習、問題解決的な学習により思考力、判断力、表現力などの「基礎・基本」を育成する。
- 1時間あるいは1単元の中で、評価場面を設定することで生徒のつまづきを把握し、理解や習熟の程度に応じた指導、個別指導や繰り返し指導により、個に応じたきめ細かな授業を実践し、「基礎・基本」の定着を図る。
- 「自己評価カード」等により、自己の成長を見いだす工夫をする。
- 個別学習、グループ学習などの学習形態などを取り入れるとともに、学校図書館やコンピュータ室等の活用も図る。

3 学習規律を確立し、学習環境を整えていけば、学習意欲の向上を図ることができるであろう。

- 掲示教育を充実させるなど、教室整備を進める。
- 始業、終業、あいさつ、発表の仕方等を確認し、全校的に実施する。
- 学級活動を充実する。（自主的な学級活動の運営、自己存在感の感じられる学級）

3 実践事例

（1）情報収集部

情報収集部では、以下の2点に重点を置き研究を行った。

- ① 学力に関する生徒・保護者のアンケートを実施し、基礎・基本の定着と学習意欲の向上の状況を分析・考察し、今後の取組に生かす。
- ② 標準化された検査（教研式学力検査）を実施し、その結果により昨年からの取組の成果について分析・考察し、さらなる基礎・基本の定着と学習意欲の向上を目指す。

(例) 教研式学力検査からの考察〈英語〉

内容	全国比（H15）	全国比（H16）
聞くこと	100	100
話すこと	99	105
読むこと	100	101
書くこと	90	100

※国語科では「話す・聞く」「書くこと」「言語事項」の4項目で考察を行った。

※数学科では「数と式」「図形」「数量関係」の3項目で考察を行った。

平成15年度の分析結果を踏まえ、「話すこと」の指導に重点を置いてコミュニケーション能力の向上を図った。ALTの活用、ペア学習、グループ学習などを通し、楽しく学習するうちに「話すこと」の力が身に付いてきた。今後は「書くこと」では自己表現力向上の観点から必要単語、語句の習得を充実させ、作文練習に自己表現の部分を加えるなどの工夫をし、「読むこと」では1単位時間内に位置付け、量と質を確保していきながら総合的な学力を身に付けさせていく必要がある。

(2) 学習環境部

学習環境部会では「授業中の生徒指導の機能」「授業と学校生活との関連」「家庭との連携」の3点について研究を進めた。具体的に研究を進める方策として、今日に至るまで本校の教職員が取り組んできた生徒指導と研究テーマとの関わりについてと、AAIによる調査内容の中から学習環境に関する項目をピックアップし、2年間のデータからその結果を分析し考察した。

(例) AAIの調査から：家庭での学習に関するもの

家で勉強する時、何時から何時まで何を勉強するかを決めていますか。（数字は％）

	決めている		決めることもある		決めていない	
	H15	H16	H15	H16	H15	H16
1年	16	26	36	35	48	39
2年	17	22	28	44	54	34
3年	14	24	26	27	60	49

研究主題を踏まえた継続的な生徒指導とAAIによる2年間の追跡データの結果から考察すると、学習面や生活面でプラスの方向へ生徒の変容が見られた。具体的には真剣な清掃活動への取組や明るいあいさつがあげられる。今後はマイナス部分の分析を行い、自ら学び自ら考える生徒の育成のためのデータの一部として有効に活用していきたい。

(3) 教科指導研究部

教科指導研究部では各教科の特性に配慮しつつ、以下の点について全教科が統一して研究が進められるように提案した。

① 研究テーマに基づいた仮説と検証

- ア それぞれの教科における「基礎・基本のとらえ方」の確認
- イ 基礎・基本を定着させるための具体的な指導方法の追究と検証
- ウ 学習意欲の向上につながる評価の在り方についての研究
 - ・生徒の学習状況を適切にとらえる評価規準と評価方法
 - ・学習意欲の向上につながる評価方法
 - ・指導の改善につながる評価方法
 - ・具体性と客観性のある評価方法（学習指導の過程における評価のしやすさも考慮）

② 授業の中での具現化＝研究テーマの意図が反映された授業の創造をめざして

- ア 仮説→実践→検証の反復の中からの具現化
- イ 研究テーマに基づいた「学習指導案」の作成
- ウ 「学習指導案」作成上の留意点や項目の原則的な統一
 - ・単元名
 - ・生徒の思いや願いと本単元の意図
 - ・本単元の学習指導要領の内容
 - ・学習指導の目標
 - ・研究テーマについて
 - ・評価規準を明確にした「学習指導計画」
 - ・本時の学習
 - ・「指導の実際」での主体的な学びに結びつく評価場面の設定（評価場面の絞り込み）
 - ・評価場面の中での「具体の評価規準」「評価方法」「手立て」の明確化

(4) 指導の実際〈社会科〉

学習内容・学習活動	指導・援助と評価の創意工夫
ー略ー 元との戦いの様子や幕府の対応などを調べ、元寇が国内の政治に及ぼした影響について考える。 ・元との戦いの様子について、資料を活用して調べる。 ・鎌倉幕府が元寇に対して、どのような対応をしたのか、資料を活用して調べる。 ・元寇後、御家人が鎌倉幕府に対して不満を持ったのはなぜか考える。	ー略ー ――評価場面 1―― ・ 具体の評価規準 元寇が日本国内の政治に及ぼした影響について考えることができる。 ・ 評価方法 ワークシート 観察及び発表 ・ 手立て 個々の生徒の状況に応じた指導・助

・この当時の社会はどのような状況であったのか調べる。 元寇がその後の国内の政治に及ぼした影響についてノートにまとめる。 ・自分の言葉でノートにまとめる。	言を行う。 —— 評価場面 2 —— ・ 具体の評価規準 元寇が日本国内の政治に及ぼした影響についてノートにまとめ、説明することができる。 ・ 評価方法 観察及び発表 ワークシート ・ 手立て 個々の生徒の状況に応じた指導・助言を行う。
---	--

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・全教科で生徒の実態を踏まえつつ、学習指導要領における目標・内容をもとに学習目標及び4観点の評価規準を明確にした。また、基礎的・基本的な学習内容を精選し、指導方法を工夫したことにより、生徒に身に付けさせる「基礎・基本」の定着を図るための一助とすることができた。
- ・学習規律を確立し、学習環境を整えたことにより、学習に対する意欲の向上につなげることができた。
- ・本校で2年間の委嘱研究に取り組んだことにより、研究主題「基礎・基本の定着と学習意欲の向上を目指す学習指導」に対する本校教職員の意識の高揚と、今まで以上の協力体制を確立することができた。

(2) 課題

- ・本校の研究主題である「基礎・基本の定着と学習意欲の向上を目指す学習指導」に関しては、一応の成果は得ることができたと思われるが、各教科で基礎・基本が定着したかどうかは、2年間の研究で判断できるものではなく、継続して取り組んでいく必要があり、各教科で今後も指導方法の工夫・改善を行い、基礎・基本の定着を図ることが重要である。
- ・2年間、研究主題「基礎・基本の定着と学習意欲の向上を目指す学習指導」に関して研究に取り組んだが、残念ながら標準学力検査には研究の成果が明確に出ておらず、継続的な研究と、データ収集及びデータ分析が必要である。

研究主題

「ふしぎはっけん！」楽しみを味わえる授業の創造

川越市立川越西中学校

科学技術・理科教育推進モデル事業（「理科大好きスクール事業」）

科学技術・理科教育を重点的、一体的に実施する地域及びその地域内の小中学校を「理科大好きスクール」に指定し、観察・実験等を重視した取組みを推進し、知的好奇心や探究心を高め、理科好きな生徒を増やし、科学的な見方や考え方を養う事業。

平成15～16年度2年間全国19地域・167校対象で実施。

◇はじめに

本校では、教科の知識を学ぶだけでなく、社会に出て生きて働く生活の知恵を自ら獲得し、自分の生き方を創っていくことを支援するために、学校研究テーマを「生きる力を育てる教育活動の推進」として取り組んでいる。

理科部では、授業を通して調和のとれた人間性や科学的な見方・考え方を培い、日常生活においても自然との調和を図った科学的な考えに基づく意志決定をしていく生徒の姿を捉え、その実現を支えていくことが大切であると考えた。

本事業においては、体験的な学習・問題解決的な学習に取り組む「授業づくり」とともに、「学習環境づくり」「地域との連携」を推進することで、知的好奇心を高め「科学する心」理科好きな生徒の育成に努めた。

1 研究のねらい

科学技術の振興により、豊かな国民生活や社会経済の発展及び産業競争力の強化を実現してきた。さらに今後も発展していくためには、次世代を担う青少年が、科学技術に関心と理解を深めるとともに、科学技術に夢と希望を傾け、科学に対する志向を高めていくことが重要である。しかしながら、青少年をはじめとする「科学技術離れ」「理科離れ」が指摘されている現状である。これに対し、理科教育の一層の充実を図り、科学に興味を持ち、基礎・基本を確実に習得させ、理科好きな生徒を育成することが重要である。

本校は、文部科学省「理科大好きスクール事業」の指定を受け、体験的な学習・問題解決的な学習に取り組む、科学的な見方や考え方・論理的に考える力を育てることで、科学に対する知的好奇心・探究心の育成（＝理科好きな生徒の育成）を目指した。

（研究構想図は、表1参照）

2 研究の視点

（1）授業づくり

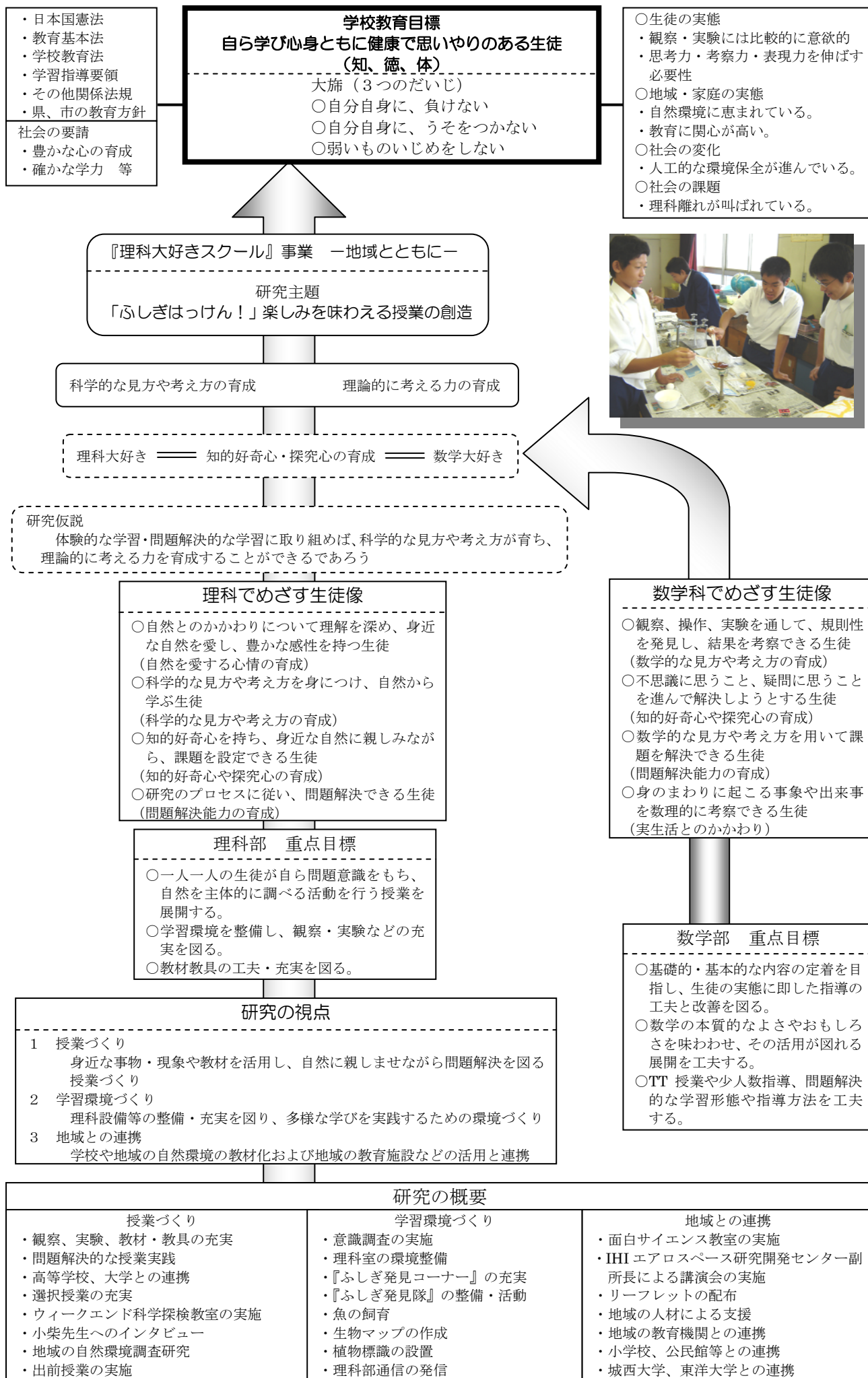
身近な事物・現象や教材を活用し、自然に親しませながら問題解決を図る授業づくり

（2）学習環境づくり

理科設備等の整備・充実を図り、多様な学びを実践するための学習環境づくり

（3）地域との連携

表1 平成16年度 川越市立川越西中学校 研究全体構想図



学校や地域の自然環境の教材化及び地域の教育施設などの活用と連携

(4) 小学校との連携

隣接小学校との交流・連携を図り、校種間を超えた理科好きなこどもの育成

3 研究の概要

(1) 授業づくり

確かな学びを育み、基礎・基本を徹底するために、まず、一単位時間において評価する観点を明確にした授業と身につけさせるべき基本ワードや基本技能等がわかる評価計画づくりに取り組んだ。さらに、生徒の興味関心を高め、知的好奇心を育成するために教材教具の工夫や外部講師による授業を実施した。

①単位時間における評価計画の作成・・・(表2参照)

年間指導計画の評価規準から毎時間の授業においてその1時間に一番重要視して評価する観点を1時間あたり1観点到絞った。

この評価計画の活用方法や評価としては

- ア 毎時間の授業の目標を意識して授業展開を図れる。
- イ ワークシート等の作成にあたって、授業の目標が整理しやすい。
- ウ 努力を要する生徒への手だてが事前にわかり、授業に工夫がしやすく、わかりやすい授業につながる。

また、基本ワード、観察・実験の基本技能、関心意欲を高める工夫を示したことで

- エ 定着を図るべき重要ワード
- オ 生徒実験の内容
- カ 演示実験をはじめとして興味・関心・意欲を引き出す方法・事柄が一目でわかるようになった。

②授業展開パターンの統一

- | | | | |
|----------|---------|------|--------------|
| ア 学習前評価 | イ 問題の提起 | ウ 導入 | エ 観察・実験の計画作成 |
| オ 観察・実験 | カ 発見・記録 | キ 考察 | ク 発表 |
| コ 次時への課題 | ケ 学習後評価 | | |

学習前・学習後評価については、コンセプトマップの研究を進めている。また、学習過程でアドバイスカード(ヒントや発展課題を記入)を活用している。

③選択授業の充実

- ア 計画の見直しと課題学習の確立

問題解決する学習計画をし、日常生活で使用しているものの教材化、ものづくり等を中心にした授業展開に努めた。

教材例・・・アルミ缶、砂糖、みそ、醤油、ソース、ジュース、手鏡、ペットボトル、CD、画用紙、公園・学校の植物等

ものづくり・・・ペーパープレーン、分光器、ブーメラン、花火、果物電池、点描写、ストロー笛等

- イ ティーム・ティーチングの実践

子どもたちの多様な学びや観察・実験方法等に対応するために選択授業をティーム・

ティーチングで取り組んだ。このことにより、生徒それぞれの課題にあった場で、解決に取り組むことができ、多様なアドバイスを与えることができた。

④高等学校・大学との連携

ア 川越女子高等学校・城西大学理学部・

東洋大学工学部の先生方による出前授業の実施。

授業例・・・光の進み方、光の性質、遺伝子実験
危険を避ける能力（反射）等

イ 理科授業において授業助手としての

城西大学生の支援。

城西大学のご協力により、理学部内の教員を志望する学生を紹介して頂き実践した。



⑤県教育委員会との連携

科学ボランティアによるウィークエンド科学探検教室を実施した。

多彩な講座が設定されており、生徒が興味・関心を持った講座を自ら選択し、取り組んだ。

⑥地域の自然環境調査研究

ア 小畔川生物調査、地域の身近な植物調査、大気の汚染状況調査等

（２）学習環境づくり

①「ふしぎ発見コーナー」の充実

体験できる・ふれることができる展示

具体的な例・・・回転動画、万華鏡、ペットボトルと水、ベンハムごま、目の錯角（スリーディー）、震源分布、科学本等、

②掲示の工夫

生徒の学習・研究成果を生かした掲示

例・・・科学展出品作品、授業まとめプリント、自主学習課題研究、選択授業作品等

③ふしぎ発見隊の活動

小畔川生物の飼育・小畔川流域の生態調査・サケの卵の飼育と放流等

④理科部通信・リーフレットの配布

地域向けに１５００部作成・配布

⑤植物栽培

サツマイモ・ヤーコン等の栽培

地域に住む方にご協力をいただき、学校園を耕す。



（３）地域との連携

①地域人材による授業支援

地域に在住する大学生を助手に招いた授業の実施

②科学実験（サイエンス）教室への参加

城西大学・東洋大学主催による科学実験教室へ親子で参加

③校外学習における探究心の育成

ア 日本科学未来館・国立科学博物館における学習

イ 宿泊学習における植物スケッチ・星空観察

④地域の科学者による講演

I H I エアロスペース研究開発センター副所長による講演（ロケットエンジン開発）

⑤地域の方企業の方にご支援いただいた授業

電力会社・ガス会社の協力による授業の実施

（環境学習とエネルギー資源）

⑥リーフレット・P T A 広報等における広報活動

⑦公民館との連携

公民館活動への参加（地域の自然散策講座）

⑧「理科大好きスクール」研究協議会の実施



（４）隣接小学校との交流・連携

理科好きな生徒を育成するためには、小学校と行動連携が不可欠である。そのために、検討会や担当者会での企画をもとに、小・中学校が協力した実践・取組を行ってきた。

①合同検討会の実施

②定期的な担当者会の実施

③小柴先生インタビューの実施

「東京大学名誉教授ノーベル物理学賞受賞者」小柴昌俊先生に川越西小中学校合同インタビューを実施

④小学校において中学校教師による理科授業の実施

小学校５・６年生対象にクラスごとに実施。

題材・・・色の合成、大気圧等

⑤科学シンポジウムの実施

大学教授・高等学校長・地域代表者・保護者・教職員代表者・児童・生徒が参加

⑥児童・生徒交流実践

地域自然科学探検教室・ウィークエンド科学探検教室

４ 研究の成果・今後の課題

生徒自らが直接体験したり、見たり、聴いたり、手で触れたり、高等学校・大学・専門の方・地域の方等から直接ご指導をいただいたり、お話を聞く機会に恵まれ、理科に対する関心や意欲を高めることができた。

今後の課題としては、科学する心の育成には、学校の中だけではなく、家庭や地域とともに育てる必要がある。さらに、この取り組みを継続していくことで中学生という発達段階における科学的探究心や問題解決能力が育成され、「生きる力」の育成が図られている。

表2 *「単位時間における評価計画」の見方

その時間の学習内容				評価の観点					
《 》：観察・実験の基本技能 ●：関心・意欲・態度を高めるための				それぞれの評価規準が4つのう					
時間	学 習 内 容	評 価 規 準 【評価方法】	関心	思考	技能	知理	A 十分満足できる	B おおむね満足 できる	C 努力を要する 生徒への手だ て
1	1 物体を物質 で区別するに は 《話し合い》 ●身のまわりの物質について話し合う。 ＊物体と物質	日常経験を元に、 ゴミの区別や、身のまわりの物質の区別をどのようにしているか知ろうとする。 【発表】	○				ゴミの分別や、アルミ缶とスチール缶の違いについていくつか発表し、物質の区別について知ろうとしている。	ゴミの分別や、アルミ缶とスチール缶の違いについて知ろうとしている。	川越市のゴミの分別資料や、アルミ缶・スチール缶を用意し、実物を見ることで考えるように支援する。
			その時間の評価規準				観点ごとの評価基準		
			年間指導計画の評価規準から 1時間あたり一項目を選び出した。				A（十分満足できる） B（おおむね満足できる） C（努力を要する生徒への手だ		
基本ワード			観察・実験の基本技能				関心・意欲・態度を高める工夫		
授業で重要語句として 定着を図る必要のある 語句。			教科書にある観察や実験。 確実に行われることが望ましい。				演示実験や”やってみよう”、 身近な題材など、生徒の意欲 や興味を引き出す事柄。		
基本ワード (押さえさせたいことがら)			観察・実験の基本技能				関心・意欲・態度を高める工夫		
＊物体と物質 ＊密度とは ＊有機物と無機物			《実験1》金属と非金属の区別 《基礎操作》○質量のはかり方 《基礎操作》○マッチのすり方とガスバーナーの使い方				●身近な物質について話し合う。 ●白い粉末を区別する方法を考える。 ●CO ₂ とペットボトル		

「子ども自らが、進んで伝え合おうとする力の育成」

川越市立中央小学校

研究のポイント

- 発達段階に応じた系統性を明らかにし、それに基づいた授業実践を行うことにより、年間指導計画の改善、充実を図る。
- 授業の中に、歌、チャンツ、ゲーム等を積極的に取り入れ、その在り方を明らかにすることにより、英語活動の指導過程を共通理解する。
- 学年内、AET 等との関わり方や教材教具、施設設備の見直しを行うことで、英語活動にふさわしい環境を整備する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校では、「心豊かな児童の育成」を目指して地域と一体となって教育活動を進めている。「豊かな心は様々な人やものとの関わり（コミュニケーション）の中で育まれるもの」という信念のもと、本年度は英語活動を窓口に、伝え合おうとする力の育成を目指す。

特に、次の3点をねらいとして設定する。

- ①発達段階に応じた学習内容を明確にし、年間指導計画の改善を図る。
- ②仮説に基づいた授業実践を通して、英語活動の授業の在り方を明らかにする。
- ③英語活動という視点から、指導体制、学習環境、教育課程等の見直しを図る。

(2) 研究主題設定理由

① 社会的背景から

「小学校学習指導要領解説 総則編」より（平成11年5月）

- ・国際理解に関する学習の一環としての外国語会話
- ・小学校段階にふさわしい体験的な活動

「英語指導法等改善の推進に関する懇談会」最終報告より（平成13年1月）

- ・英語によるコミュニケーション能力の育成
- ・小学校段階にふさわしい体験的な学習を通じての英語の面白さが強調

② 学校教育目標から

「心豊かな児童の育成 なかよく かしこく たくましく」

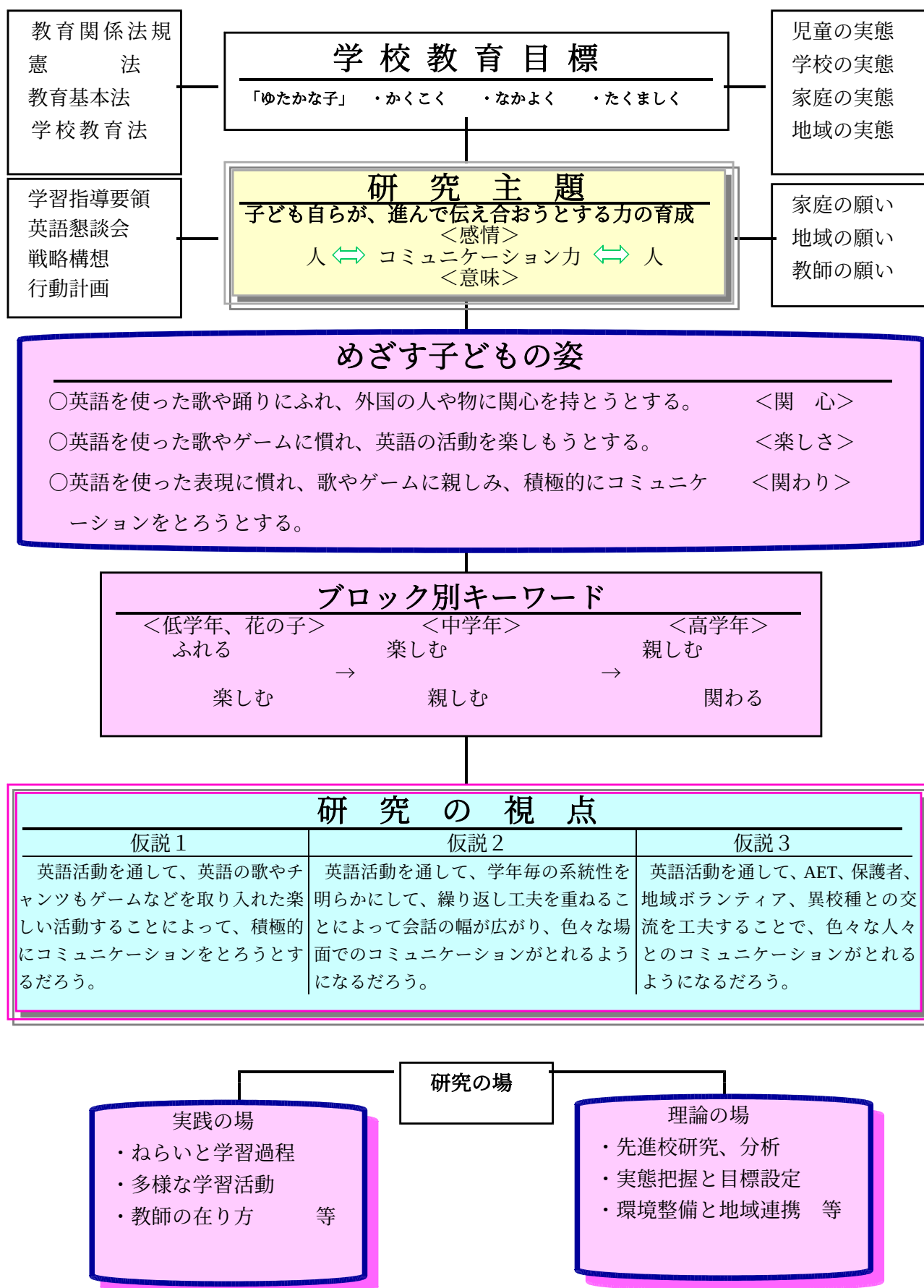
本校では「豊かな心」の育成を目指して様々な交流活動を進めている。特に、英語活動を窓口に、友達、教師、AET、外国人、地域の人等との多様なコミュニケーションを通して、学力はもとより人間としてバランスのとれた児童の育成を目指している。

③ 児童の実態から

本校の児童は、読み書き、計算等の基礎的な学力は高い。しかし、多くの友達と進んで関わろうとしたり、外国人・高齢者・障害者等と関わろうとすることが課題である。様々な人との関わりを自ら深めようとする児童の育成を図りたい。

2 研究内容

(1) 研究全体構想



(2) 専門部活動

① 学習指導部

1 ねらい

- 児童の発達段階に応じた指導計画を作成する。
- 児童が、英語活動を楽しむ指導過程の在り方を研究をする。

2 研究内容

学習指導部は、指導計画班と授業研究班に分かれて以下のような活動を行った。

ア 指導計画班

指導計画班は、昨年までの指導計画を見直し、本校の指導に適したものに作りかえた。
本年度使用した指導計画は、以下のものである。(高学年の4月分)

平成16年度 英語活動年間計画 表現集

高学年

月	回数	学 習 内 容	表 現・言 葉
4	2	・自己紹介	・Where are you from? I'm from Canada. Nice to meet you.

平成16年度 英語活動年間計画 歌・ゲーム集

高学年

月	回数	学 習 内 容	歌	ゲ ー ム
4	2	・自己紹介	・アイディア集P. 14 「マフィンマン」	・アイディア集P. 112 「友だち紹介ごっこ」

このほかに、授業の展開例を各学年2例ずつ載せている。

イ 学習指導班

どのように指導過程を作り、授業を行うかを中心に研究を進めた。

指導過程のモデルをつくり、以下のように進めた。

学習活動	指導者の関わり		備 考
	T 1	T 2(AET など)	
○始めのあいさつ ○歌又はチャンツ ○表現の練習 ○ゲーム ○終わりのあいさつ	☆今日の授業やゲーム の説明をする。	☆表現の練習をしたり、児 童のサポートをする。	●C D ●絵カード ●ゲーム使う道具

3 成果と課題

先進校の例をもとに指導計画を作成して授業を行ってきたが、研究を進めるに伴い、昨年までの展開例を示した指導計画を見直す必要があるなど、色々な問題が生じてきた。これは、研究が深まるにつれて、指導過程の基本的な形が我々教師に見えてきたことが大きな要因である。

また、評価については、英語活動のねらいと合わせて、見取りの場や方法をどう進めていくかが大きな課題である。

② 学習環境部

1 ねらい

- 児童の英語活動に対する意識を調査する。
- 児童が英語に慣れ、親しめる環境を整備する。

2 研究内容

学習環境部は、児童がより英語活動に慣れ、親しめるように、以下の活動を行った。

ア 音楽(英語の歌)CDの作成

英語活動の中で歌いやすい曲を選曲して、音楽CDを全学年分作成した。

イ 「英語で言ってみよう」ボードの作成、あいさつボードの作成

テーマ別の簡単な英単語(色の名前、動物の名前、文房具など)を集めて、イラストとスペル入りのボードを作成し、学年毎に掲示した。ボードは定期的に校内でローテーションして掲示することにした。また、子どもたちが登下校で必ず通る昇降口に、「Good morning」「See You」と書いたイラスト入りのボードを作成し、天井から下げ、日常的に目にふれられるようにした。

ウ 英語活動・英語に対する意識調査

児童の英語活動に対する意識、英語そのものに対する意識を調査・考察し、実態調査を行った。

エ 英語資料コーナーの作成

英語活動に使用するものだけの保管場所を作成し、教材等をまとめて常時活用できるようにした。

3 成果と課題

実態調査を行ったことにより、英語活動は何を中心に行っていけばよいか、どのような内容を取り入れればよいかなどを明らかにすることができた。また、環境を整えることにより、児童が日常的に英語に親しめるようになった。今後は、さらに環境整備に力を入れ、加えて児童がいきいきと取り組める教材の作成などを行いたい。また、本校での英語活動を校外に発信したり、異校種や外部からのゲストティーチャーを招いたりしながらますますの充実を図っていききたい。

3 実践事例（6年生の事例より H16.11/19実践）

(1) 題材名 Let's Enjoy Olympic (what's my point? Your point are ○○)

(2) 検証の目的

◎子どもたちが、積極的にコミュニケーションをとれるようにするにはどんな手だてが必要なのかを明らかにする。

仮説①

○子どもに関心のあるテーマで、歌、ゲームを工夫し、学習意欲を高める。

○ゲームの中に、訪ねる、答える場面を取り入れ、積極的な関わりを持たせる。

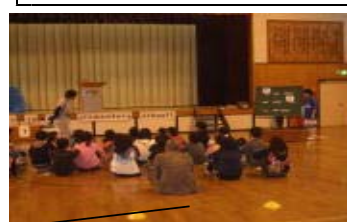
仮説②

○表現する言葉を限定し、繰り返すことによって定着を図る。

○高学年の中心フレーズである「What's～」を取り入れ、意味も理解して使えるようにする。

仮説③

○学年内 TT を組むことにより、より多くの児童との関わりがもてるようにする。



英語を使った表現になれ、歌やゲームに親しみ、積極的にコミュニケーションをとろうとする。

(3) 本時の学習指導

学 習 活 動	T1 指導者の関わり	T2
1 はじめのあいさつをする。 2 アテネオリンピックを思い出し、浮かんだものを発表する。 3 歌を歌う。 「Hello to all the children of the world」 4 チャンツをする。 5 ゲームの説明を聞く。 「What's my point ?」 「Your point are two.」 「Good job.」 6 オリンピックゲームをする。	・オリンピックに関わる競技名、国名等を自由に出させる。 ・歌を教える。 ・ゲームのやり方を説明する。 ・プレーヤーを支援する。	・板書する。 ・国旗と挨拶を指す。 ・チャンツを行い、相手を褒める言葉になれさせる。 ・ゼスチャーで示す。 ・審判を支援する。

	○種目毎に協力してゲームを行わせる。 ○お互いにたくさん褒めあえるようにする。 ○教師が率先して励ましての言葉をかける。 ○上手に声かけしている児童を称賛する。 ○場の安全を確かめて活動させる。				
◎どの種目も10名程度がエントリーし、前半後半で「選手」と「審判」を交代する。時間内は何度チャレンジしてもよく、一番よかった点をポイントとする。	ステジ	ハンマー投げ	やり投げ	水泳	短距離走
7 学習のまとめをする。 8 終わりの挨拶をする。	・結果を発表し、表彰する。 ・感想を聞く。		・メダルを贈呈する。 ・学習の講評をする。		

(4)結果の考察（複数の実践を通して明らかになってきたこと）

①教材について

- ・児童の身近な生活の中のものを扱うようにする。（色、くだもの、動物など）
- ・児童の発達段階と過去の経験等を考慮して選択する。

②活動について

- ア 歌
- ・心をリラックスさせ、英語を耳慣れさせるのに効果的である。
 - ・授業のはじめや終わりに位置づけると効果的である。
- イ チャンツ
- ・英語のリズムになれさせるのに効果的である。
 - ・リズム良く活動させるのに効果的なので、どの学年でも利用できる。
- ウ ゲーム
- ・たくさんの友達と交流が持てるものがよい。
 - ・本時のフレーズが繰り返し使える方法を工夫する。
- エ その他
- ・テープ、紙芝居、絵本などの活用も図る。

③教師について

- ・教師自身が活動を楽しみ、授業を盛り上げ、活動が楽しくなるようにする。
- ・ねらいを明確にして、ねらいに沿った活動（歌、チャンツ、ゲーム等）を工夫する。

④評価について

- ・一人一人のよさを讃え、関心・意欲・態度を高める。
- ・自己評価の場を設定し、自らの関わりについて振り返ることができるようにする。

⑤その他

- ・文字は基本的には入れないものとする。
- ・保護者、地域の人々、異校種の人々と協同の活動を進める。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 英語に関心を持ち、体全体で表現しようとする児童が増えてきた。
- 英語の歌、チャンツ、ゲームなどを通して、友達と関わる楽しさを感じている児童が増えてきた。
- 英語の今日的な動向や在り方について、教職員の共通理解が図られてきた。
- ワークショップやクラスルームイングリッシュ等の教職員演習を取り入れたことにより、教職員の意識改革が図られてきた。
- 児童の意欲を高める英語活動の基本的な進め方が教職員に理解されてきた。
- 児童が相互に関わり合う場の工夫の大切さが教職員に理解されてきた。
- 様々な教材作りを進めたことにより、活動の幅が広がってきた。

(2) 課題

- 児童の活動の見取り方（意欲、表現力等）を明らかにする。
- 教材における文字の在り方、可能性について明らかにする。
- 題材の見直し、学年間の系統性を明確にし、児童の発達段階に合った年間指導計画の改善を図る。
- 中学校、高等学校との連携を進め、小学校英語活動の在り方を明らかにする。
- 児童相互の関わりを一層深める人的、物的環境整備を推進する。

「仲間と豊かに関わりながら 主体的に活動する児童の育成」

川越市立芳野小学校

研究のポイント

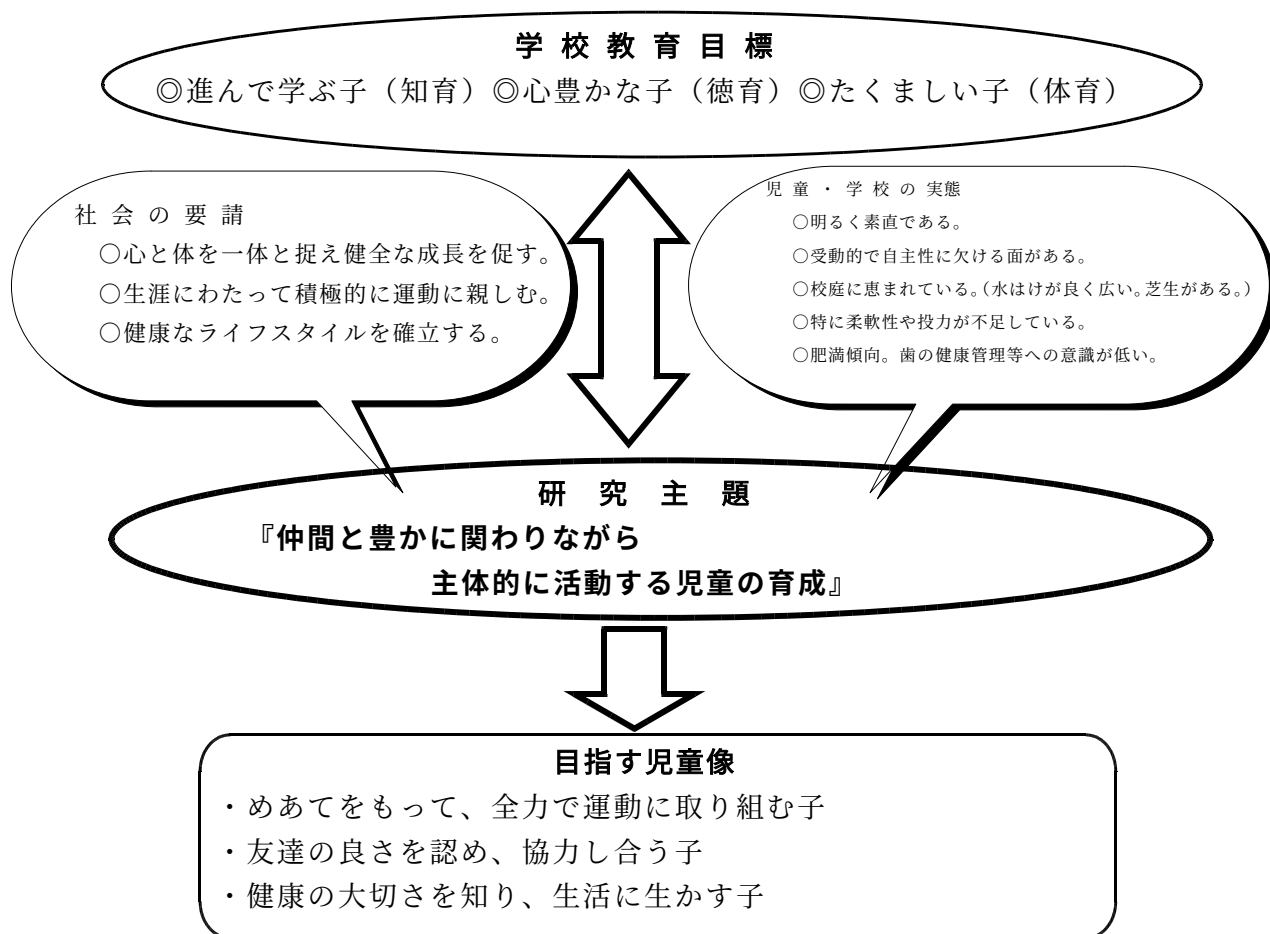
- 心と体を一体としてとらえ、児童一人一人を伸ばしながら、豊かな関わり合いが持てる指導法を工夫する。
- 児童の願いや思いを生かしつつ、仲間と豊かに関わり合える活動を計画的、継続的に実施するとともに、児童が活動したくなるような環境整備を進めていく。
- 児童が自ら生活行動を見直すような保健指導・保健学習を工夫する。

1 研究の概要

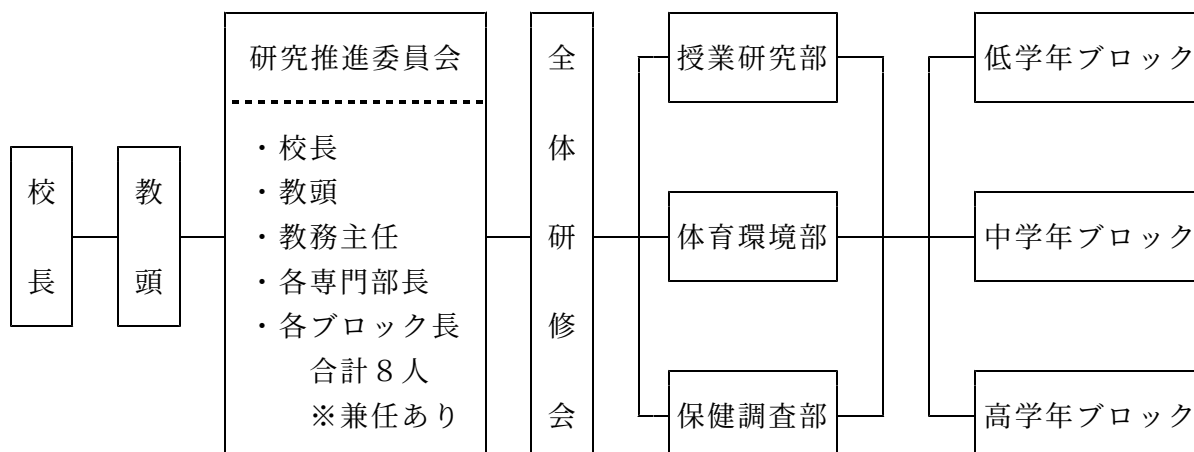
(1) 研究のねらい

- ①進んで運動や遊びに取り組む児童を育てる。
- ②進んで健康の保持増進に取り組む児童を育てる。

(2) 研究主題と主題設定の理由



(3) 研究組織

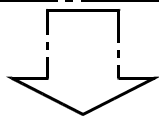


2 研究の内容

(1) 授業研究部の取り組み

■研究の仮説

心と体を一体としてとらえ、児童一人一人を伸ばしながら、豊かな関わりが持てる指導法を工夫すれば、進んで運動に取り組む児童が育つであろう。



① 単元別年間指導計画の作成

単元のねらいや評価規準を明確にし、絵や図を多く取り入れた活用しやすい年間指導計画を作成した。

絵やイラストを多く入れて、授業のイメージをもちやすくした。

ねらい①とねらい②に分けて、指導例を載せた。

『十分満足』と『おおむね満足』の二つの評価規準を設定した。



② 重点教材と跳び箱運動の系統表の作成

「跳び箱運動」や基本の運動の「跳び箱遊び」を重点教材として、発達段階に応じた系統表を作成した。



③ 学習指導案の作成

研究主題に迫るための支援を明確にし、図を工夫して見やすい指導案を作成した。

④ 体育授業研究会の実施

友達への関わりと自主的な運動への取り組みを重視した授業を実施した。
県の推奨する「すくすくプログラム」を参考に、慣れの運動を行った。



⑤ 「芳野小体育授業の進め方」の作成

職員の共通理解・共通行動を図るため、いつでも持ち歩けるリーフレット形式で作成した。



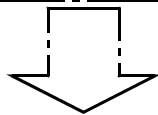
⑥ 職員による体育実技研修の実施

跳び箱・鉄棒・体ほぐし等

(2) 体育環境部の取り組み

■研究の仮説

児童の願いや思いを生かしつつ、仲間と豊かに関わり合える活動を計画的、継続的に実施するとともに、児童が活動したくなるような環境整備を進めていけば、進んで運動や遊びに取り組む児童が育つであろう。



①朝行事の見直し・昼休みの拡大

ア スポーツタイムの新設（毎週金曜日 8：20～8：35）



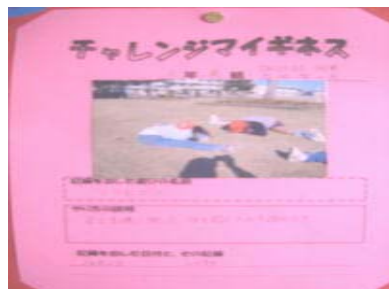
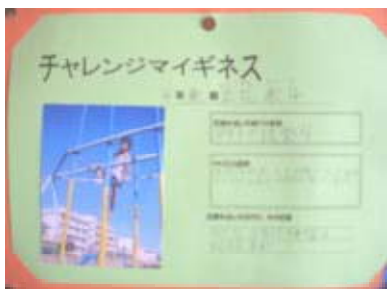
・縄跳び ・ボール投げ ・幅跳び
・鬼ごっこ ・鉄棒 ・ドッジボール

の運動遊びを、教師と共に行う。学年単位で2週間ごとにローテーションで行う。

イ ウキウキタイムの実施（毎週木曜日 13：10～13：45）



運動嫌いや外に出たがらない児童にも十分外遊びのできるよう、昼休みを35分に拡大した。遊びを通して体力の保持増進をねらう。また、その休み時間の遊びを活性化する工夫として、自分の特技や、考えた運動遊びを披露する「チャレンジ マイ ギネス」への取り組みも行っている。



②体育的環境の整備

- ア 体育小屋と備品の整理
- イ 指導計画に沿った校庭ライン
- ウ 跳び箱運搬台の補修
- エ 跳び箱やマットの目印ライン
- オ 使いやすい体育備品の収納



③ 体力づくりカードの作成

- ア 夏期・冬期の休みに家庭でできる「体育の宿題カード」の作成
- イ 朝マラソン頑張りカードの作成

④ 手作り遊具の製作

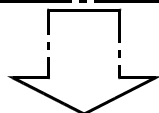
二重跳び練習器具



(3) 保健調査部の取り組み

■研究の仮説

健康・安全についての理解・実践を通して、自らの生活行動を見直し＜保健指導・保健学習＞を工夫すれば、進んで健康の保持増進に取り組む児童が育つであろう。



① 健康診断結果の活用と健康への意識化

- ア 虫歯治療について
- イ 肥満対策について

② 生活に関するアンケート調査の実施

③ 学校・学級における保健指導の充実

- ア 学校一日公開日を利用し、多くの保護者に参観していただく「食の指導」の授業を展開した。



< 1年生授業風景 >



< 5年生授業風景 >

イ 歯磨き励行のための環境整備

- ・歯の磨き方（写真入り）解説パネルを取り付けた。
- ・流しにミニ鏡を取り付け、磨き残しがないか、自分で確認できるようにした。



④ 学校保健委員会の実施による保護者への啓発

テーマ：『児童の健康を生活習慣からさぐる』

- ・スポーツテスト・生活アンケートの結果と考察
- ・食に関する指導

⑤ 保健だよりの定期発行



4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- ① 運動の特性に触れる授業を展開し、一人一人にめあてを持たせ、友達との関わりを重視した結果、児童の授業に対する意識が高まった。
- ② 今年度は、跳び箱運動に絞っての授業研究であったが、授業の組み立て方や教材研究について、教師の意識が高まった。
- ③ スポーツタイムやウキウキタイムの実施により、外で体を動かす機会が増えたり、多様な運動を経験したりして、スポーツテストの結果に向上が見られた。
- ④ 体育備品の整理、教具や遊具の自主製作などにより、体育環境の整備が進み、授業や外遊びの中で活用できた。

(2) 今後の課題

- ① 多様な教材にわたる授業研究会を行い、児童と教師のための研究を充実させたい。
- ② 体育授業や外遊びの中で活用できる用具の製作や環境整備の更なる充実を図りたい。
- ③ 芝生の特性を活用した効果的な授業展開を工夫したい。
- ④ 家庭や地域との更なる融合を図り、健康なライフスタイルの確率を目指したい。

「『生きる力』を育てる算数の学習指導」

— 「確かな学力の向上」を目指した指導法の工夫改善を通して—

川越市立武蔵野小学校

研究のポイント

- 学年間の系統性をおさえた基礎・基本の重視
- 基礎・基本を基にした応用力や自力解決能力を育てる問題解決学習の推進
- 個に応じたきめ細かな指導の充実のための少人数指導の工夫
 - ・コース別学習(習熟度別、興味・関心別) ・T Tによる指導
- 問題解決能力の明確化のための「むさしの6つの力」の設定
- 教材・教具の工夫と活用

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ①『生きる力』を「確かな学力」という知の側面からとらえ、特に算数における基礎・基本を身に付け、数理的に考えていく能力、それらを進んで生活に生かしていこうとする実践的な態度を児童に育てる。
- ② 問題解決学習を通して基礎・基本の応用力や自力解決能力を児童に育てると共に、算数的コミュニケーションによって、表現力を高め、人との関わりを深める。
- ③ 少人数指導の工夫によって個に応じたきめ細かな指導を充実し、一人一人の児童に確かな学力を育てる。
- ④ 問題解決能力を算数の視点から分析し「むさしの6つの力」として明確化することによって、単元および1単位時間のねらいを焦点化して指導にあたる。

(2) 研究主題設定の理由

① 学校教育目標から

本校の学校教育目標は「豊かな心を持ち、たくましい児童の育成(なかよく・かしこく・たくましく)」である。この具現化のためには、一人一人の児童が、「生きる力」の知の側面である確かな学力を身に付け、自ら学び考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力を伸ばしていくことが必要である。

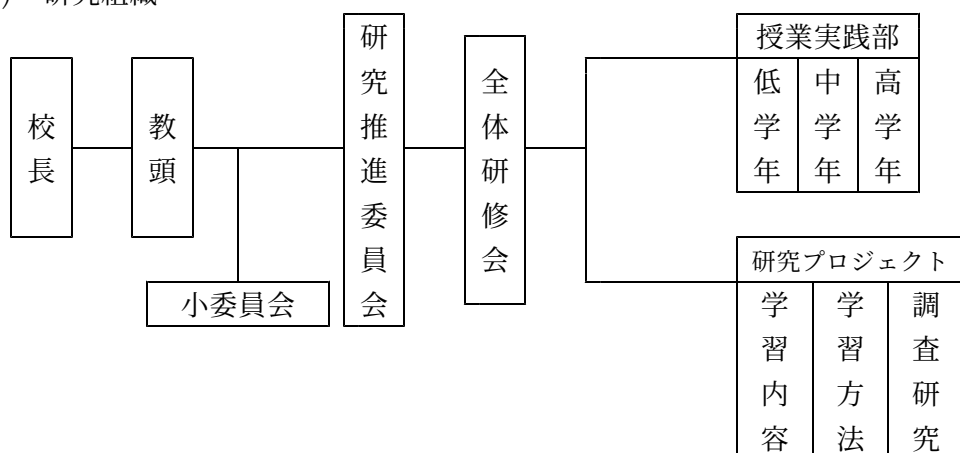
② 児童の実態から

本校の児童は、挨拶がよくでき、様々な活動にも進んで取り組むことができる。しかし、人間関係をより豊かにしていく力、自己統制をしていく力がやや弱い。また、入間地区算数学力調査および標準学力検査によれば、ある程度の基礎・基本は身に付いているが、それを応用する力を伸ばす必要がある。さらに算数に対する自信がない子が多い。これらの課題を解決するためにも、算数的コミュニケーション能力を伸ばすと共に、楽しく算数を学びながら問題を解く力を付けていくことが求められる。

③ 今日的・社会的な課題から

基礎・基本の着実な定着およびその応用力、すなわち「確かな学力」育成は、変化の激しい現代社会において不可欠の能力である。しかも、一人一人の個性を生かし、それに応じたきめの細かい指導法の工夫・改善は、今教育改革の最重要課題である。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究テーマ

「生きる力」を育てる算数学習指導

— 「確かな学力」の向上をめざした指導法の工夫改善を通して—

(2) 年次ごとの研究内容

第1年次 ○基礎・基本の定着。・基礎基本のとらえ方（系統を追って）

第2年次 ○基礎基本の応用。・考える力を養う・・・平成16年度

第3年次 ○主体的実践的な態度の育成。

(3) 学校教育目標と目指す児童像

なかよく	かしこく	たくましく
ともに創り学び合える子	自ら課題をみつけ、意欲的に取り組む子 筋道立てて考え、正しく判断できる子	*試行錯誤しながら、ねばり強く取り組む子

*試行錯誤・・・過去の経験を土台としながら、関係しそうなこと・使えそうなことを見いだす行為

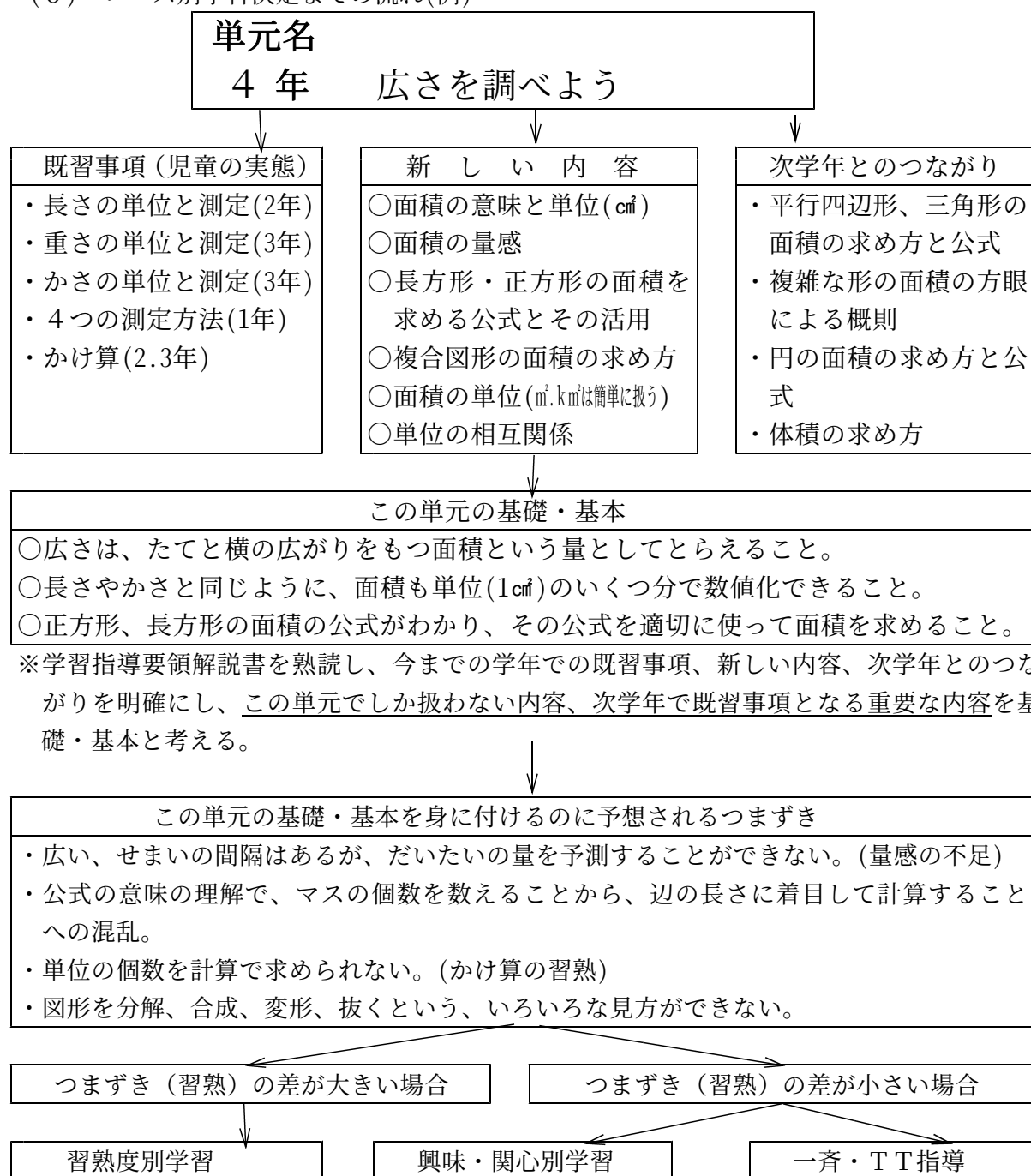
(4) 研究仮説 ＜平成16年度＞

1. 単元ごとに目標や「つけたい力」を明確にし、算数的活動を通し、様々な解決方法を認め、よりよいものを追究していくようにすれば、児童の数学的な考え方を高めることができるであろう。
 - ・ むさしの6つの力の定着 ・教材教具の工夫と活用
 - ・数学的コミュニケーションの追究
2. 学習内容によって学習方法や形態を工夫し、問題解決の場を意図的に設定していけば、児童に基礎・基本の応用力をつけることができるであろう。
 - ・効果的な少人数指導、TT指導 ・問題解決学習の推進
 - ・日常の児童の学習の様子をみとった、「きめ細かな指導」の展開

(5) 「むさしの6つの力」

			低学年	中学年	高学年
1	論理力	○既習事項やこれまでの体験を元に新しいことを見いだしたり、一般的なことを導いたり、筋道を立てて考えたり、確かめたりする能力	・分かっていることや分からないことを見分ける力 ・自分の考えの根拠を明らかにして、話し合ったり確かめ合ったりする力	・問題を分析して捉える力 ・自分の考えの根拠を明らかにして、筋道を立てて話し合う力	・問題を構造的に捉える力 ・他者との意見交換をもとに、合理的な方法と考えを見いだす力
2	判断力	○多面的に見て正誤の判断をしたり、論理的に考えたりする力	・様々な解決方法の類似点や相違点を明確にする力	・様々な解決方法の類似点や相違点を明確にして課題に対する適切な方法を考える力	・様々な解決方法の類似点や相違点を明確にして課題に対し、よりよい方法やより分かりやすい方法を考える力
3	表現力	○自分の考えを他者に分かるように表現する力	・自分の考えを、絵や図や言葉を用いて、分かりやすく説明する力	・自分の考えを、図や言葉を用いて、分かりやすく説明し、他者の考えも取り入れようとする力	・自分の思考過程を分かりやすく説明するとともに、他者のよい考えを取り入れ、さらに広い考えで説明できる力
4	自己評価力	○友達の考えを参考に、自分の解決を見直そうとする力	・友達の考えを聞きそれぞれの考えのよさに気付く力	・それぞれの考えのよさを認め、自分の解決方法に取り入れようとする力	・それぞれの考えのよさを認め、積極的に取り入れ、よりよい解決方法を見いだそうとする力
5	関連付け発展的に考える力	○まとめたことを次に生かそうとする力	・身に付けた知識や技能を生かして、問題を解決しようとする力	・身に付けた知識や技能を生かして、問題を解決しようとする力やさらに難しい問題にも挑戦しようとする力	・身に付けた知識や技能を生かして、問題を解決しようとする力やさらに難しい問題にも積極的に挑戦しようとする力
6	感動する力	○算数のよさ、おもしろさ、美しさに感動する力	・課題解決できた喜びを味わうとともに、具体物を用いた活動を通して感覚を豊かにする力	・課題解決できた喜びを味わうとともに、知識や技能を適切に用い、それらの有用性に気付く力	・課題解決できた喜びを味わうとともに、数学的な考え方や数理的な処理のよさに気付くことや進んで生活に生かそうとする力

(6) コース別学習決定までの流れ(例)



※コース別学習は、習熟度別学習の他に、身に付けさせたい力を明確にし、興味・関心別学習が考えられる。児童にとっては、興味関心別だが、根底には教師による習熟度をふまえたコース設定がある。こうすると、児童の意欲を大切にしながら、教師の「この児童にはこういう力を身に付けてほしい」という願いも達成できると考える。

そのためには、つまずきの分析が大切である。これを明確にすることによって、どんなコースを設定したらよいのか、コースでの指導内容、ふり返りチェックテストの内容がおのずと明らかになってくる。

3 実践事例(4年生 「広さを調べよう」)

- (1) 指導計画 ① 広さの表し方 ----- 3時間
 ② 長方形と正方形の ----- 2時間
 ③ 大きな面積の単位 ----- 4時間
 ④ 習熟度別コース学習 ----- 4時間(含:ふり返りチェックテスト)

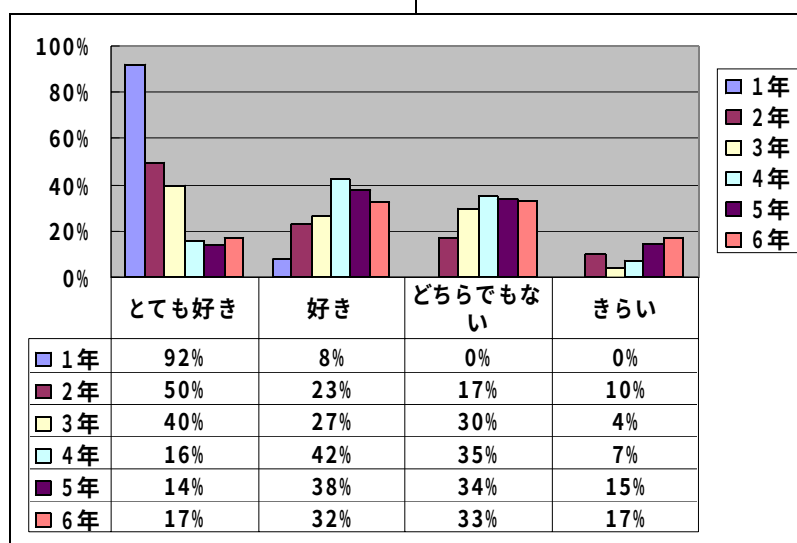
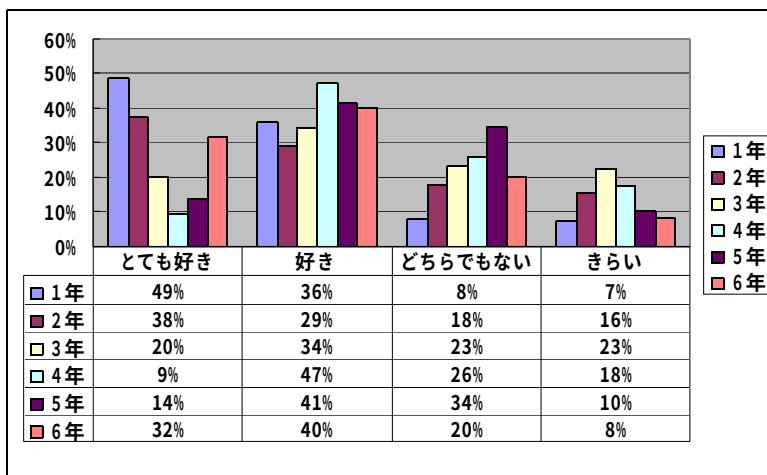
(2) コース学習指導計画

コース名		公式名人コース	面積作りコース	複雑な図形コース
児童の実態		- 面積について、概ねとらえられているが、公式の意味について、もっと確かな物にしたい。 - 単位面積 1cm^2 のいくつ分と個数を数えることと、辺の長さに着目して考えることのつながりの理解が不十分。 - 計算の習熟が十分でなく、単位面積の個数をかけ算で求めたり公式を使って計算を積み重ねて面積を求めたりすることが正確にできず、苦手意識を持っている。	- おおよその見当をつけることはできるが、単位面積 1cm^2 や様々な面積の感覚を深めたいという意欲がある。 - 単位面積 1cm^2 の大きさをイメージすることが苦手である。 - 同じ面積でもいろいろな形があること、周りの長さが同じでも面積が違うなど、面積についての理解が十分でない。 - 適切な見当をつけることが十分でない。	- 公式を使って面積を求めることは、概ね理解できているが、さらに、複雑な図形の面積を求めてみたいという意欲がある。 - 計算力のある児童は、必要な辺の長さを自分で求めたり、わかっている面積から逆に辺の長さを求めることもできる。 - 複合図形を「分けて、たす」「ぬく」「変形する」などして、既習の長方形や正方形をもとにすることが思いつかない児童もいると思われる。
基礎基本		面積の単位、公式の意味の理解	見当をつけ、面積を求める面積についての感覚	公式の適切な活用 発展的に面積を求める力
少人数指導		- 一斉指導を行う。 - つまずきに応じ、手立てを工夫し、つまずき別に支援していく。 - 透明の方眼シートを用意し、基本の「1cm^2」を数える活動に戻れるようにする。 - 計算の抵抗を少なくするために、九九表・電卓を用意する。	- 一斉指導を行う。 - つまずきに応じて、一斉指導の中に少人数指導を取り入れる。 - 筋道を立てて考えたり、計算を積み重ねて求めたりする算数的活動を多く取り入れ、論理的な考え方を育てる。	- 問題解決学習型で進める - 自力解決をしていく中でつまずきに応じて、支援していく。 - 話合うの過程では、自分の考えを相手にわかるように伝えたり、わかろうとしたりする表現力を高めたい。そのため、児童同士のコミュニケーションの場を充実させたい
指導計画	1	- 長方形、正方形の面積を 1cm^2 のいくつ分か数えて求める。 - 公式の意味を理解して計算で面積を求める。 - プリントで習熟を図る。	- 同じ面積の図形の方眼に書く。 - 面積あてクイズをする。	L字型の図形の面積をいろいろな方法で求める。 (式からやり方を考える)式を読む
	コースチェンジあり			
	2	公式を使って、面積を求める練習問題に取り組む。	見当をつけて、L字型の図形の面積を求める。 (多様な考え方を伸ばす)	区切られていたり、図の中が抜けていたりする図形の面積をいろいろな方法で求める。
	③	L字型の図形の面積を求める。 (マス目を数えることを基本にする)	周りの長さが同じで、一番面積が大きい図形を探す。	重なりがいくつもある図形の面積をいろいろな方法で求める。

4 研究の成果と課題

右のグラフは、平成15年度の研究開始当時にとった意識調査である。そして、下のグラフが1年後の調査である。

算数に苦手意識をもち「きらい」と答えた児童は、前1年7%から現2年10%へ。(1年生から2年生への移行期でこの数値は低く



抑えられたと評価する)前2年16%から現3年4%へ。前3年23%から現4年7%へ。前4年18%から現5年15%へと減少している。残念ながら、現6年は前年10%から17%へと増加してしまっただが、標準学力検査の結果をみると、1段階評価の児童が減り、4・5段階評

価の児童の割合が増加している。

今年度は、特に問題解決学習を軸として、より児童の実態に沿った「少人数指導の在り方」に焦点を置いて研究に取り組んできた。その結果、前掲した「コース別学習決定までの流れ」という教師にとって最も大切な教材研究の方法が確立されてきた。また、「むさしの6つの力」という児童に育てるべき力を整理した拠り所も生まれた。昨年度は、恐る恐る取り組んでいたコース別学習に、チャレンジ精神をもって意欲的に取り組む職員の姿、放課後職員室で、授業の結果について前向きに話し合う職員の姿が、研究の着実な歩みを感じさせる。

しかし、この成果を自己満足に終わらせてはならない。私たちの最終目標は、あくまでも一人一人の児童に「確かな学力」を付け、もって「生きる力」を育てることである。しかも、生涯学習につながるよう、学ぶことの楽しさ・喜びを知る児童を育てなければならない。

そのためには、さらに実践的研究を重ね、一人一人の学習状況および学習成果を的確に把握するための評価方法の研究をすること。また、個に応じた指導方法の一層の工夫改善に努めること。さらに、コース別学習等の少人数指導がより実施しやすいシステムづくりに取り組んでいきたい。

「互いに認め合い、よりよい人間関係を築く子の育成」

～おりあいをつける話し合い活動を通して～

川越市立新宿小学校

研究のポイント

- 話し合い活動の充実を図るための様々な手立てや、環境作りについて研究する。
- 人間関係を深めるための活動の工夫や、場作りについて研究する。
- 自主的・実践的な態度を育成するためには、どんな手立てが有効なのかを研究する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学級活動の活動内容（１）に重点をおき、**おりあいをつける話し合い活動** を目指していく。友達の意見を認めながら、自分の考えもきちんと言える児童に育てたい。よりよい解決方法に向けて、おりあいをつけながらみんなで決め、実践する。また、実践を通して、「みんなで活動すると楽しい」「集団の一員としての自覚を高める」経験をたくさん積ませたい。そうすれば、よりよい人間関係も育っていくだろう。

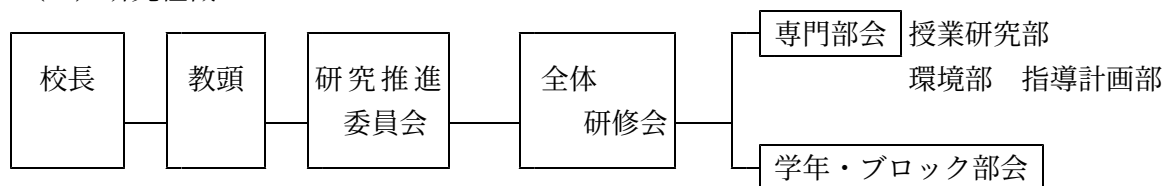
(2) 研究主題設定理由

本校は、明るく素直な児童が多い。学習への意欲はあり、自分の課題の解決に向かって、努力している。全体的に知識としての学習内容はよく理解され、表現力も高まってきている。保護者も、学習に対する関心が高い。しかし、遊ぶ空間（場所）・時間・仲間（友達）が限られており、人と関わる体験が不足している。そのためか、自己中心的な行動が見られたり、友達とうまく関われないことからの問題行動も起こっている。

そこで、本年度は「よりよい人間関係を築くことのできる児童」「思いやりのある、心豊かな児童」の育成を目指し、学校研究の課題を『互いに認め合いながら、よりよい人間関係を築く子の育成』と考え、特別活動（話し合い活動を中心にした取組）を通して、目指す児童像の達成に迫ることとした。

特別活動は、豊かな人間性、特に社会性の育成に大きな役割を持つ。みんなが納得できるように話し合い、よりよい学校生活を目指して実践することにより、お互いを認め合う心、協力し合う態度が醸成され、よりよい人間関係がつくられていくだろう。又、望ましい集団活動を通して、みんなでやって楽しい経験、自分がみんなに認められ、役に立ったという自己有用感を味わわせることで、「互いのよさを認め合い、自分らしく生きようとする児童の育成」という学校教育目標の達成を図ることができると考え、テーマを設定した。

(3) 研究組織



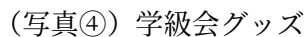
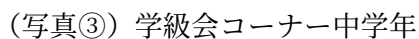
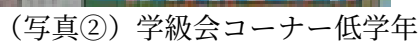
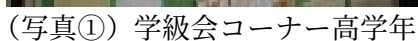
①授業研究部

イ 学年別評価規準の作成（資料②）

エ 本校としての学習指導案の形式作り

[illegible][illegible]

- ア 学級会コーナー、掲示物の工夫や提案（写真①～④）
- イ 学年別の「話し合いの進め方」作成（資料③）
- ウ 学年別の「学級会ノート」作成



話し合いの活	進め方(司会の言葉)	
1. はじめの言葉 2. 歌 3. 司会グループの紹介 4. 議題の確かめ 5. 提案理由の説明 6. 話し合いのめあての確かめ	・これから、第()回学級会を始めます。れい。 ・はじめに()の歌を歌います。 ・今日の司会グループを紹介します。 ・司会は()、副司会は()、 黒板記録は()、ノート記録は()です。 ・よろしく願います。 ・今日の議題は()です。 ・()さん、提案理由を説明してください。()です。 ・今日の提案について、質問はありますか。 ・今日の話し合いのめあては() みんなで読みましょう。	()です。
7. 話し合いの順序の確かめ ・話し合い	・では、話し合いに入ります。 ・話し合いの順序は、はじめに(柱1)、次に(柱2)最後に(柱3)についてです。 ・では、(柱1)について意見を出してください。 ・意見が出ついたら ・質問はありますか。 ・賛成(反対)の意見を出してください。	《賛成も反対もなし》 ・()について賛成意見がありません ・()について賛成意見はありますが、賛成意見はありますか。 ・()は、賛成意見がないので、は ずしていいですか。 ・()賛成意見がないのでは ずしていいですか。
8. 決まったことの発表 9. 振り返り 10. 先生のお話 11. 終わりの言葉	・(柱1)は、()に決まりました。 ・次に(柱2)について話し合います。 ※このあと 同じように進める。 ・これで、話し合いを終わりにします。 ・今日決まったことを、ノート記録の() もらいます。 ・学級活動ノートで、今日の話し合いを振り返りましょう。 ・今日の話し合いでよかったことを発表してください。 ・次は、先生のお話です。先生、お願いします。 ・これで学級会を終わりにします。れい。	()さんに、発表して

話し合いの進め方(3～6年)

進め方（司会の言葉）

ウ 学級活動の年間指導計画の見直し

第 5 学年 学級活動 実践報告

- 77 -

3 学年 学級活動 実践報告

1 めざす話し合い活動……折り合いをつける話し合いとは

- 自分の意見と友達の意見の違いが分かる。
- 友達の意見を認めることができる。

2 指導の手立て

- 自分の意見が持て、友達の意見との違いが分かる児童にするために
 - ・自分の意見が持てるように、学級会ノートの記入をさせる。また、ノートに書いた意見を学級会で発表できるように支援する。
 - 先日行ったアンケートで、「学級会が好きです」の質問に『いいえ』と答えた児童の理由に、「自分の意見が言えない」「意見が思いつかない」「何を言えばよいかわからない」「恥ずかしい」等があげられていた。このように自分に、自信が持てない児童に対し、学級会ノートに励ましの言葉を書いたり、発表の意欲づけにつながるような支援を送ったりする必要がある。
 - ・議題の柱を分かりやすいものにする。
 - 議題の柱を分かりやすいものにするにより、誰もが、自分の考えや意見が持ちやすくなると考える。自分の意見がしっかりとて、発表の意欲や姿勢が高まれば、自ずから友達の意見と自分の意見の違いに気づくであろう。
 - 友達の意見を認めることができるようにするために
 - ・魅力ある議題を設定する。
 - 自分がやってみたいことや一緒に考えたいことを考えることにより、お互いの意見を聞きあうことができ、折り合いをつける第一歩となると考える。
 - ・友達を大切にする姿勢を身に付ける。
 - 話し合いを通して、お互いに相手のことを大切に、分かり合える間柄を築いていく。
 - ・理由を大切にすること。
- お互いの意見を認め合う中では、考えの基となる理由を大切に話し合いを心がけるようにさせる。

3 実践例Ⅰ

議題 「社会科見学のバスレクを考えよう」

- (1) 話し合いの柱
- ①どんなレクをやりたいか
 - ②どんな係りがいるか

話し合いの様子

- ・4クラスが3台に分かれるので、各クラス工夫したレクを考えた。簡単に短時間に盛り上がるレクを考えた。いつもクラスでやっている楽しい物を他のクラスに広めていきたいという思いが伝わる話し合いであった。

事後の活動の様子

- ・1号車から3号車まで、係りを中心にレクで盛り上がる事ができた。その後、他のクラスのレクを学級でも取り上げて楽しむ姿が見られるようになった。
- また、2組の『紙しばいなかよし集会』に他のクラスが参加したり、お互いのクラスで、集会に招待しあったりなど、交流も行われるようになった。
- 話し合いの中でも、○組でこういう係りがあって良かったので入れてみたらよいと思う。等、他のクラスの活動も参考になった。
- 意見が出せるようになってきて、少しずつではあるが、成果が見え始めている。課題としては、実践する上でなかなか活動場所や活動時間が確保できないことがあげられる。

4 話し合った議題例

「係りの仕事を考えよう」「ドッチボール大会をしよう」「クラスを見直そう」「リレー大会をしよう」「友達とおわかれする会の内容を考えよう」「学級会のこれからの計画を立てよう」「下校の様子を話し合おう」「○○先生とのおわかれ会を考えよう」「楽しいイベントを考えよう」「クリスマス会で盛り上がりよう」など…

4 成果と課題

(1) 成果

- ①自分の考えを持ち、進んで発言できる児童が増え、話し合いが活発になってきた。
- ②話し合いの進め方が理解できるようになり、自分たちで課題を解決しようとする力がついてきた。クラス全体のことを考えた発言など、建設的な発言が出るようになった。
- ③実践を通して、「みんなで活動する楽しさ」を味わっている。友達との関わりが増え、交友関係が広がりつつある。児童の生き生きした姿がみられるようになった。

(2) 課題

- ①深まりのある話し合いにするための、教師の支援と評価について、研究を深める必要がある。様々な決定の仕方を児童に経験させると共に、児童への言葉掛けを工夫したい。
- ②保護者への啓発が必要である。授業公開、広報活動、話し合いなどを通して、特別活動の果たす役割について理解を深めてもらうことが大切である。

研究主題

「一人一人を大切にする授業の創造」

生徒指導を中心に 「算数科」の授業を通して

川越市立南古谷小学校

研究のポイント

- 児童の学力向上を図るために、
 - ・指導内容の工夫改善
 - ・指導方法の工夫改善
 - ・指導形態の工夫改善を行い、検証する。
- 児童の自己指導能力を高めるために、
 - ・自己決定の場の用意
 - ・存在感を大切にする授業の展開
 - ・人間的ふれ合いを基盤とする授業を実施し、検証する。
- 授業の「指導の基盤」を全職員で確立する。
- 教師の指導力向上を図る。
 - ・授業研究会の運営の工夫
 - ・要約力を高める研修と模擬授業の実施
 - ・指導者を招聘しての講義の聴講
 - ・先進校への全職員の実地研修と研修報告会

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 児童の学力向上を図るために、一人一人ができるようになり、分かるようになる授業を実現する。
- ② 児童の自己指導能力を高めるために、一人一人が大切にされていることを実感できる授業を実現する。

(2) 研究主題設定の理由

本校の児童は、明るく、素直であり、生活面では誠実さを、授業面では真面目さを感じる。一方、挨拶や返事の声は小さく、授業中の話し合い活動も不活発であり、覇気や学習意欲に欠ける傾向も見られる。また、学力面では、教研式学力テストや入間地区学力テストの考察の結果、市の平均よりも低く、下位層の児童数の割合が多い。全体的に表現力に乏しい傾向にある。

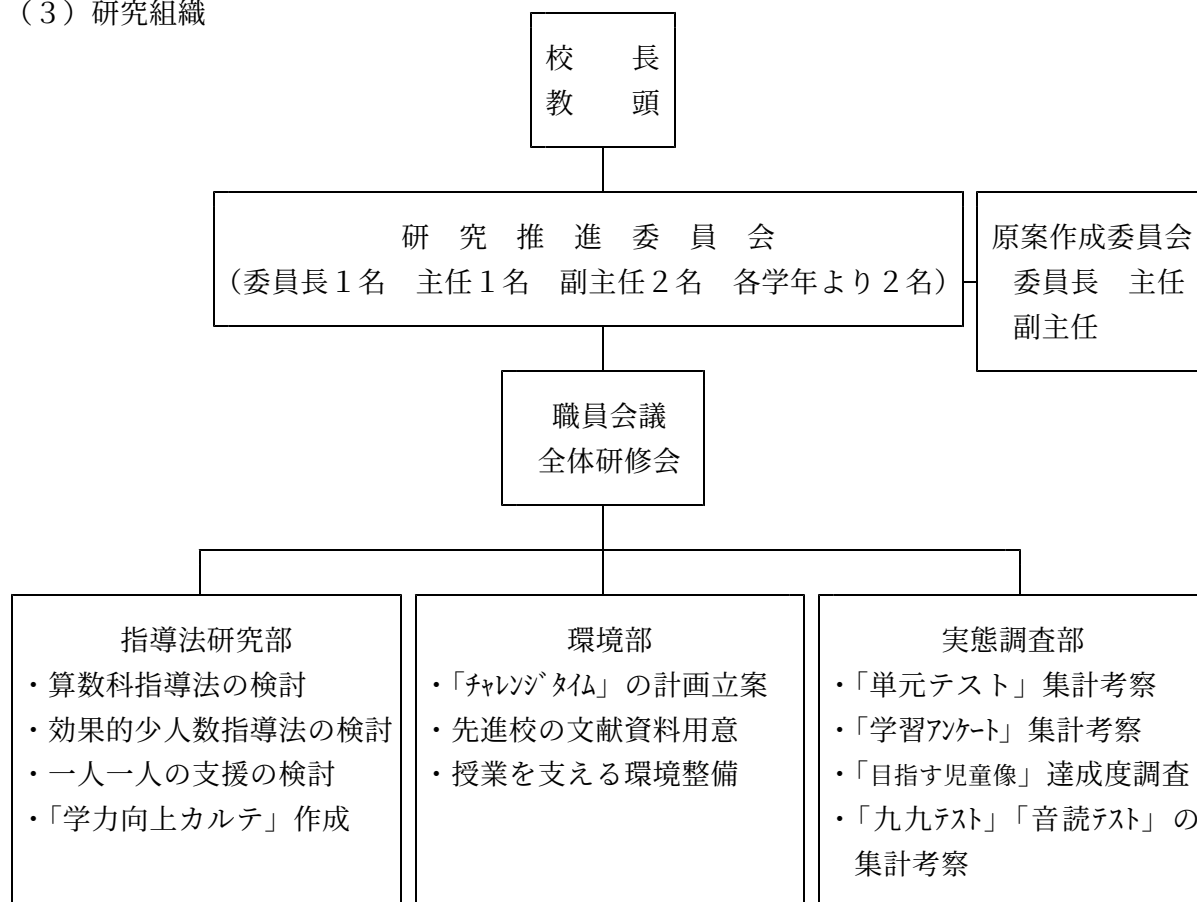
そこで、「目指す児童像」を

「自分に自信をもち、生き生きと学校生活をおくる南古谷の子ども」

- 意欲的に学校生活に臨む子ども
- はっきり自分の意見が言える子ども
- できる喜び、分かる楽しさを味わえるまで、ねばり強く取り組む子ども
- 基礎学力を身に付けた子ども

とし、2年間の研究の成果となって表れる具体的な児童像として掲げた。その実現のために、研究主題を「一人一人を大切にする授業の創造」とし、生徒指導を中心に、「算数科」の授業を通して研究を試み、児童の学力向上と自己指導力の育成を図ることにした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 全体研修計画

1 学 期	・第6学年授業研究会 単元名「比べ方を考えよう」 ・要約力を高める研修会 模擬授業 ・1学期実施した少人数指導実践報告会 ・講演会「特別支援教育が投げかける教師の技量」 「一人一人への児童への支援」
2 学 期	・第3学年授業研究会 単元名「長い長さをはかろう」 ・第5学年授業研究会 単元名「小数のかけ算とわり算を考えよう」 ・第2学年授業研究会 単元名「九九を作ろう かけ算(2)」 ・第4学年示範授業研究会 単元名「計算のやくそくをしらべよう」 ・来年度の少人数指導についての検討会
3 学 期	・第1学年授業研究会 単元名「たしざんとひきざん」 ・第4学年授業研究会 単元名「面積のはかり方と表し方」 ・実態調査部調査結果に見る本年度の研究の成果と課題の検討会

(2) 学校研究全体構想図

3 実践事例

(1) 本年度の学校研究のまとめ

(2) 研究仮説に迫る手立て

① 児童の学力向上を図る、一人一人ができるようになり、分かるようになる授業の創造

ア 本校の「算数科」指導過程を問題解決的な学習過程とする。

- 1 つかむ ・児童の興味関心を高める。・学習の課題をつかむ。
- 2 見通す ・課題解決の方法を考える。・課題解決の見通しを持つ。
- 3 解く ・自分で考えた方法で解く。・支援を受けながら解く。
- 4 話し合う ・考えを説明する。・考え方の共通点、相違点を見出す。
・友達の考えと比べながら、よりよい方法を求める。
- 5 まとめる ・適用問題を解く。・問題作りをする。・学習したことをまとめる。
・学習したことを振り返る。

※コース別授業では、コースにより、5段階の比重のかけ方等工夫を要する場合もある。

イ 効果的な少人数指導を目指し、第3学年以上の「算数科」に少人数指導加配授業を実施する。

第 4,5,6 学年	2 学級を 3 コースに分けてのコース別授業を実施する。	1 学級週 4 時間
第 3 学年	1 学級を 2 コースに分けてのコース別授業を実施する。	1 学級週 4 時間

※本年度、効果的であった少人数指導の形態を、単元毎に年間指導計画に明記する。

ウ 「学力向上カルテ」を作成し、一人一人の児童の学力の伸びを累積検証する。

知能テスト (ISS)		入間地区学力テスト (正答数)					教研式学力テスト (評定) (SS)				
数と計算	単元名	関意	思考	技表	知理	図形	単元名	関意	思考	技表	知理

※下欄「特記事項」に、つまずきや優れている点、できるようになったことを記述する。

エ 指導案に、教師の発問や指示を明記し、児童に分かりやすい表現方法を身に付ける。

教師の指導力向上のために、「通知文」を要約したり、教師同士で模擬授業を実施したりし、児童に分かりやすい発問の仕方、指示の仕方を身に付けるようにしている。

オ 授業を支える「指導の基盤」を洗い出し、全学級で確立する。

各学級「受容的な学級風土」をつくりだし、「学習の規律」を確立する。児童に「話す力」「聞く力」の表現力を育成するように努める。環境部がまとめた「ノート指導」に添い、思考の場となり、学習のまとめとなるノートの書き方指導を徹底する。

② 児童の自己指導能力を高める、一人一人が大切にされていることを実感できる授業の創造

ア 「指導上の留意点」に、自己指導能力育成の手立てとなる「自己決定」「存在感」「人間関係」を配慮した事項を明記する。

イ 座席表に抽出児童を明記し、「一人一人を大切にする」上記の3つの手立てが有効であったかを観察し、研究協議会で抽出児童毎に検証する。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・研究仮説Ⅰ「児童の学力向上を図る算数科の指導法」については、授業研究会を重ねながら、検討が進められ、本校としての統一した指導過程を共通理解できた。
- ・効果的な少人数指導の実践報告会実施により、来年度の少人数指導加配の配置、形態について、全職員で検討し、本校の児童に合った方法を決定することができた。
- ・コース別授業を実施するにあたり、各コースの「目標」「学習活動」「主な評価規準」を「児童に身に付けさせたい力」によってそれぞれ工夫改善することができ、そのコースの特色を、児童へガイダンスできるようになった。
- ・一人一人の児童学力の伸びを「学力向上カルテ」で累積検証することができるようになった。児童の実態をよりよく理解し、児童に合った学習方法を検討し、着実な学力向上を図りたい。

(2) 課題

- ・研究仮説Ⅱ「児童の自己指導能力を高める生徒指導法的手法」については、研究仮説Ⅰの仮説に見通しが立てられるまでは、なかなか研究協議の視点となり得なかった。抽出児童を観察しながら、その児童の学習の様子や変容の契機を、「教師と児童」「児童相互」との関係の中で、検証を始めたところである。来年度の研究でもぜひ、深めたい。
- ・実態調査部の各種アンケートやテスト結果が、2月中旬まとめられる。「目指す児童像」に、本校の児童がどれだけ達成したのかを検討し、来年度への課題を明確にしたい。

「学びのよさを味わえる子どもの育成」

－ 指導方法の工夫・改善を目指して－

川越市立霞ヶ関北小学校

研究のポイント

- 国語科・算数科を通して、基礎・基本の確実な定着を図り、学び方を学び、学んだことを生かして学習できる子どもを育成できる学習指導の展開をする。
- 子ども一人一人に応じた指導のための指導方法、指導体制の工夫・改善をする。
- オープンスペース等、本校の特色ある施設・設備を生かした新しい授業を展開する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は、公民館と図書館を併設し、移転開校し3年目となる。また、教室にはオープンスペース、さらには、情報機器の充実など他にはない施設、設備を有している。これらを生かした教育活動を実践するために昨年度までの2年間は、5科目（国語科、社会科、算数科、生活科、総合的な学習の時間）についての実践研究をしてきた。習熟度別学習、少人数指導、コース別学習等様々な形態や方法を試行錯誤しながら進めてきた。子ども達もいろいろな学習を経験し、コース選択する力などを身に付けてきた。本校ならではの教育活動が充実してきている。

しかし、昨今新聞報道などによっても学力低下が懸念されており、そのことは否めない状況にあるといえる。そこで、今年度は、今までの学習活動を基礎としてさらに、基礎・基本の充実を図り、学ぶ過程及び結果における喜びを味わわせ、学習意欲を向上させていきたいと考え、「学びのよさを味わえる子どもの育成」とした。学んだことを生かし、発展させていく子、学習を通して自己の成長を自覚できる子を育成し、意欲的、主体的に学ぶ姿を育むことをねらいとした。

(2) 研究主題設定の理由

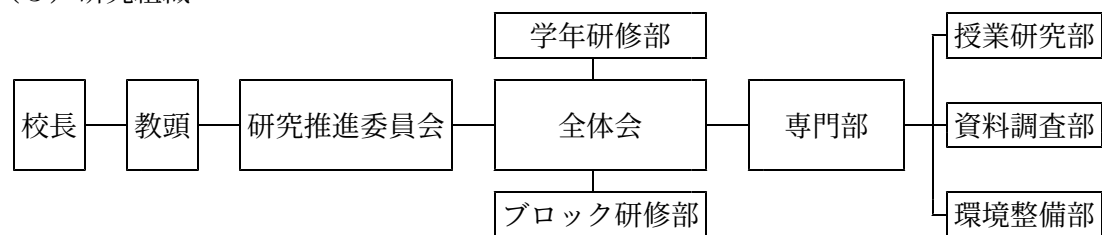
これからの多様化する社会に対応するための「生きる力」を育むためには、子ども達に「豊かな人間性」と「自ら学ぶ力」を付けていかななくてはならない。「自ら学ぶ力」とは、基礎・基本の確実な定着により、学ぶ意欲が向上していくことと考える。つまり、子ども一人一人が、自分が学習を通して力が付いたことを自覚でき、その力が次の学習に生きていくことを実感したとき、学びのよさを味わうことができ、次への意欲へとつながっていくのである。

本校では、「学びのよさ」を

- 子ども達が、「課題解決できた」「新たな知識の獲得ができた」「新しい考えをもつことができた」という自己の高まりや成長に気づくことができること。
- 子ども達が、「既習事項を解決の手段にできる」「学んだことを発展的に活用する」「多様な学び方を体験する」「教え合い、高め合う」という主体的な学びができる。

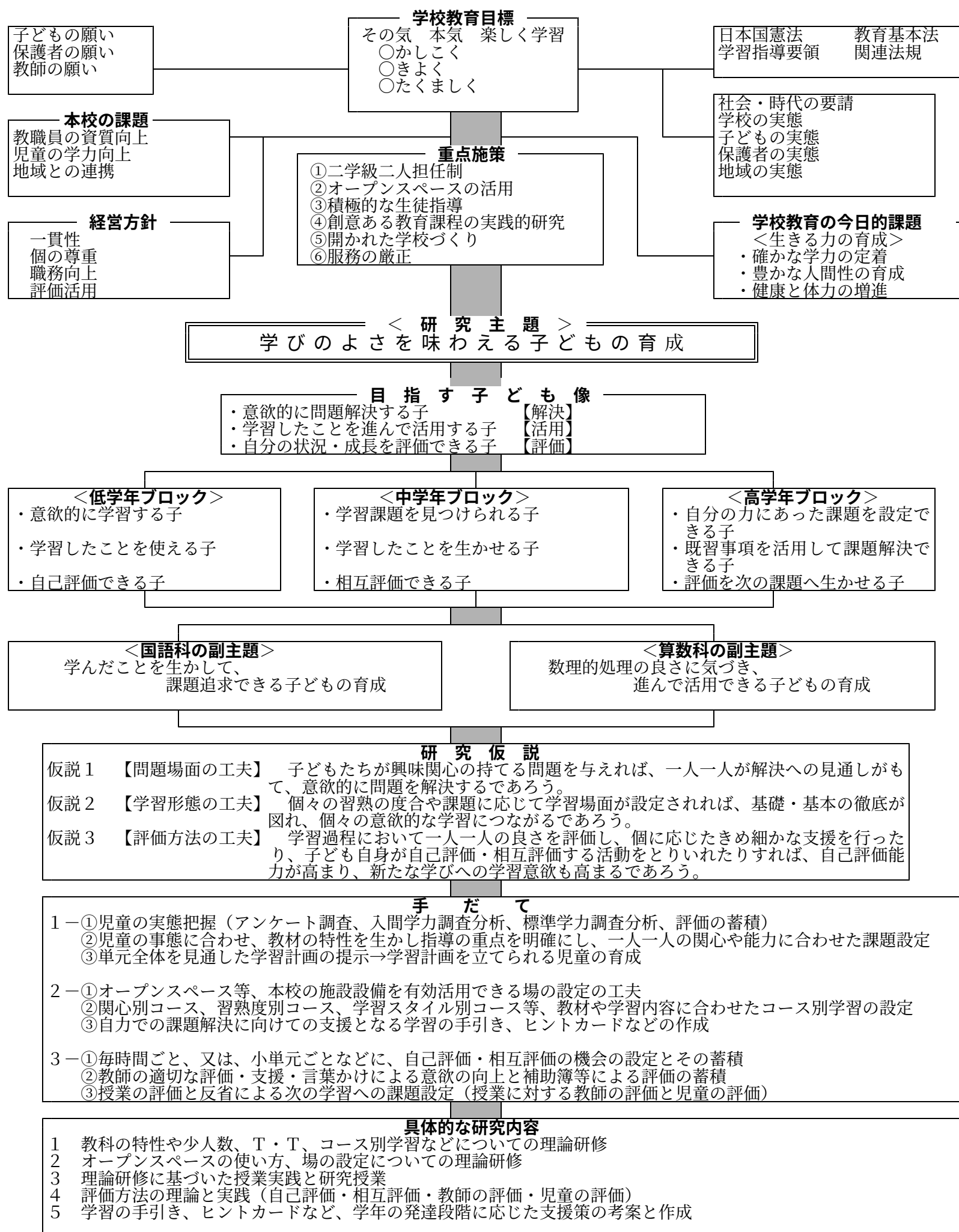
ととらえた。一人一人が自分の力に応じて、このような経験を積み上げていくことを目指している。その中で、自己評価能力も身に付け、さらに自己を伸ばそうとする児童の育成を目指し、本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究内容

(1) 全体構想



(2) 専門部の取組

①授業研究部

ア 指導方法・指導形態の工夫

児童の実態とそれぞれの教科・教材に合わせて、指導方法を指導形態をどのように組み立てていくべきなのかを全学年による国語科の授業公開とブロックでの算数科の授業公開から検証していく。本校においては、オープンスペースの活用を含めた本校ならではの施設・設備の有効活用も視野に入れた授業の展開に向けて、実践を重ねていけるようにした。本校の時間割編成は、算数科への少人数加配を中心に、コース別学習を行っているが、国語科でも、少人数を実践する場合は、算数科の授業の時間を国語科にして少人数指導を行うこともある。また、2クラス、または3クラスでのペア学級の中で、加配教諭がいなくても、少人数指導やコース別学習に取り組む実践もしていくこととした。

イ 基礎・基本の定着を目指して

研究主題にある「学びのよさを味わう」ことのできる児童を育成するためには、やはり、基礎・基本の定着がないとむずかしい。学習課題を解決する喜びを味わうことができることが、次への学習意欲につながると考える。自力解決するための力として、しっかりとした基礎・基本が大切である。習熟度別やコース別学習においても、児童や教材によって、何を教えるべきなのかという学習内容をしっかりと押さえ、それをどのように学習させるかという意識をしっかりと持って、授業を組み立てていくように心がけてきた。学びのよさを味わわせるための根幹を基礎・基本と考えた。

ウ 指導と評価の一体化に向けて

指導方法、指導形態の工夫や基礎・基本の定着に欠かせないのが評価である。まず、児童については、学びへの意欲的な姿勢を持ったり、自分がどのくらい分かっているのか自己分析し、コース選びを行ったり、他者との比較により、自分のよさやがんばるべきことに気づいたりするために、自己評価や相互評価が欠かせない。特に習熟度別の学習については、自分がどのコースで学習するのがよいのかを自己決定するために、自己評価能力の育成が欠かせない。今年度は、そのための自己評価カードやノートへの記入等いろいろな方法を各学年で試行していくこととした。

エ 指導案の形式について

埼玉県編成要領の指導案の形式をベースとし、研究主題とのかかわりの欄を設け、その中に仮説への手立てや具体的方法を書くようにした。その中に授業でのねらいを明確にする用にした。また、コース別学習の活動は、各コースの特色が出るように指導計画や本時の展開部分を分けて書くようにしていった。

②資料調査部

ア アンケートによる実態把握

1学期の段階で、これまでの経験や学習について、振り返り、児童が2教科についてどのような印象を持っているのか。また、コース別学習などの学習活動についてどのように考えているのかという情意面のアンケートを実施した。その中で特にコース別の学習と教科についての印象を年度末に再調査し、検証を行った。

イ 入間地区学力調査の分析

どの学年も、各領域にわたって入間地区の平均を上回っている。比較的学力は高いということが分かる。もちろん、正答数による比較なので、間違っている児童への個別資料としての役割もあるが、この結果からは、最近言われるようになってきた発展的な学習について、さらに検討し充実させていかなくてはならないと考える。

③環境整備部

ア 言語環境の整備

(ア) 各教室に常掲の掲示物作成

基本的な話形としての話し方、聞き方の目当て、声の大きさの目安、作文の書き方という4つに関しては、全教室に掲示し、機会がある毎に指導していくようにした。

(イ) 廊下掲示物による言語活動の活性化

児童が言葉への興味を持ったり、関心を高めたりするための方法として、言葉遊びができるような掲示物を作成した。

イ 資料保存方法について・・・コンピュータの活用

本校は、校内LANが組まれており、各教室までコンピュータが設置されている。自作のワークシートや資料など、継続的に保存することができていなかった。そこで、コンピュータハードディスク内にフォルダを作成し、各学年で保存するようにした。今は、まだその活用が十分に図られていないが、今後充実させていきたいと考える。

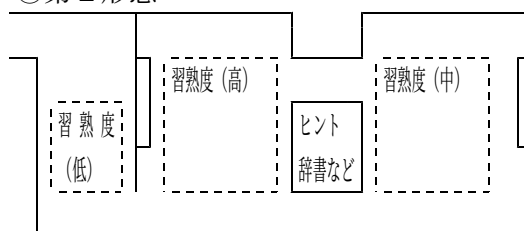
3 実践事例

(1) 学習形態

①第1形態 日常のクラスの一斉授業

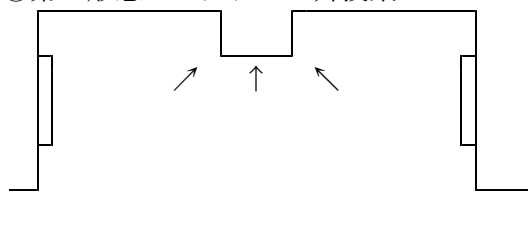


②第2形態

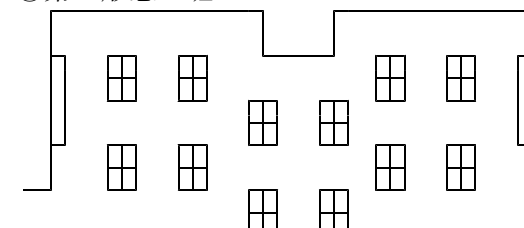


習熟度別では、オープンスペースや廊下の活用も

③第3形態 2クラス一斉授業

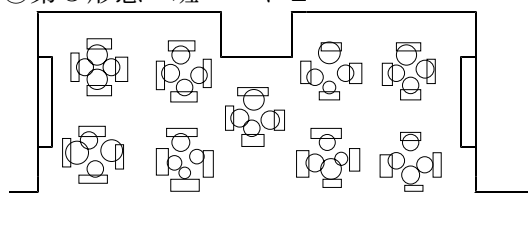


④第4形態 班

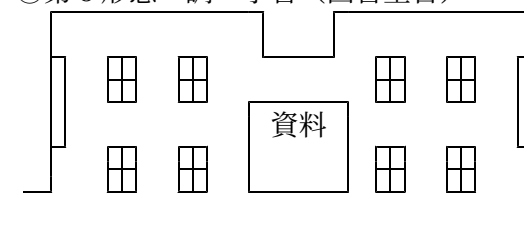


廊下や夢の広場の活用も

①第5形態 班パート2



⑥第6形態 調べ学習（図書室含）



(2) 国語科

①第1学年 単元名「ちがいをかんがえてよもう」教材「どうぶつの赤ちゃん」

説明文「どうぶつの赤ちゃん」を読んだ後に、興味関心別のコースでの発展的な学習の取組。この場面で少人数指導によって、既習事項を生かした学習活動が円滑に進められるように支援していけるような体制を作った。

どうぶつの赤ちゃんなぞなぞづくりコース
生まれたとき、育っていく様子の2段落の構成と接続詞や順序性を意識した文章を書き、挿し絵を入れる活動活動をする。

どうぶつの赤ちゃん図鑑づくりコース
生まれたとき、育っていく様子をとらえた上で、それをクイズの形で紹介できるように、調べたことをクイズにする。

②第3学年 単元名「場面の様子を想像しながら読もう」教材「ちいちゃんのかげおくり」

物語教材において、読み取っていく力の差は、数値や目に見えるものでは、はかりにくいものであるが、個人差があることは否めない。また、苦手意識を持っている児童もいる。そのような児童にとって、自分の力に応じた学習を進めていけるように、習熟度を意識した学習方法別のコース設定で学習を進めた。

音読コース
情景や心情を的確にとらえることができなかったり、叙述から離れて自分勝手な想像で文章を読み取ってしまう児童のためのコース。

ふきだしコース
情景や心情をとらえることはできるが、これまでの学習状況に鑑み、少し不安が残る児童のためのコース。

新聞づくりコース
情景や心情を的確にとらえることができ、読み取ることに対しても意欲をもっている児童のためのコース

③第4学年 単元名「わたしたちの体について調べよう」教材名「体を守る仕組み」

2人で3コースを指導する習熟度別の学習活動。習熟度の高いコースの児童は、基本的に十力で読み取っていく学習を進める。読み取ったことを自分でノートに整理し、それを説明できるようにする。他のコースも目的は同じだが、中位のコースでは、ヒントカードと教師の支援によって学習を進める。低位のコースは、教師と共に学習をすすめる。

④第6学年 単元名「生き方や考え方を読み取ろう」教材「海の命」

主題に迫るための読み取る活動を、課題別に2コースを設定し、自分で選んだ課題について解決していく学習活動。学習の手引きやヒントカードを充実させ、一人一人が自力で解決していくことを原則とし、交流の場所として、廊下やウッドデッキを活用した。最終段階では、学習スタイル別に3コース設定し、物語を読み味わわせる。

音読コース
優れた表現、あるいは気に入った表現について読み取ったことをもとに音読の仕方を工夫し、表現する。

視写コース
優れた表現、あるいは気に入った表現について読み取ったことをもとに視写の仕方を工夫し、表現する

鑑賞コース
優れた表現、気に入った表現そのものがもつ意味を考えたり、構成について考えたりする。

(3) 算数科

第6学年

3クラスでのペア学級に少人数加配が加わり、習熟度別の4コースで学習を進めた。これからの算数科においては、前述の発展的な学習の取組が必要不可欠となってくる。同じ学習内容が、コースによって負荷のかけ方に差を付け、最終段階では、既習の確かめから、発展問題へと力に応じて取り組ませる学習活動。

コースによる学習指導の目標の違い（例）

A コース	B コース	C コース	D コース
途中で約分できる分数同士の計算を、計算の途中で約分する良さを知り、約分できる数を見つけながら計算できる。また、帯分数や3口の計算もできる。	途中で約分できる分数同士の計算を、計算の途中で約分する良さを知り、約分できる数を見つけながら計算できる。	途中で約分できる分数同士の計算を、既習事項を生かしながら計算して、簡単な分数で表せる。	途中で約分できる分数同士の計算を、きまりに従って計算することができる。

4 研究の成果と課題（成果○ 課題●）

仮説1 【問題場面の工夫】 子どもたちが興味関心の持てる問題を与えれば、一人一人が解決への見通しがもて、意欲的に問題を解決するであろう。

- 児童一人一人の意欲を大切にし、できるようになりたいという願いを実現できるように学習を進めていくことによって、意欲の高揚が図れた。
- 単元の計画を示すことによって、児童がめあてをもって、学習に取り組むようになってきた。
- 少人数指導で低位のコースは、人数を少な目に設定し、充実した活動が行えるが中位のコースの個人差の大きさがあるので、そのコースの学習活動を工夫する。
- 国語科のコース別学習については、コース毎の目標設定を明確にし、活動を計画する。

仮説2 【学習形態の工夫】 個々の習熟の度合や課題に応じて学習場面が設定されれば基礎・基本の徹底が図れ、個々の意欲的な学習につながるであろう。

- 興味関心別や課題別など、自分のやりたいことを選べるという活動が、学習意欲を高めた。
- 国語科でのコース別学習の経験が、クラスでの一斉指導の中でも生かされるようになり、一人一人への支援活動が、充実してきた。
- 教材の特性をつかみ、習熟度別、興味関心別、課題別など、その特性に応じた学習活動を組み立てられるようになってきた。
- 国語科でのコース別学習についての実践を積み重ねることによって、これからの国語科の指導方法に広がりが出てきた。
- 国語科においても、日常的なコース別などの学習活動が促される環境を作る。

仮説3 【評価方法の工夫】 学習過程において一人一人の良さを評価し、個に応じたきめ細かな支援を行ったり、子ども自身が自己評価・相互評価する活動を取りいれたりすれば、自己評価能力が高まり、新たな学びへの学習意欲も高まるであろう

- コースを自分で選ぶという経験を通して、自己評価能力も高まり、自分に合ったコース 選びができるようになってきた。
- 学習形態や学習方法の多様化により、評価方法の工夫改善が必要である。

「自ら課題を見つけ、主体的に解決する子の育成」

～指導方法の工夫と改善を通して～

川越市立上戸小学校

研究のポイント

- 個に応じた支援の充実を図るための少人数指導
 - ・ T Tによる指導
 - ・ コース別学習（習熟度、課題別、興味関心別）
 - ・ 支援計画の作成
- 問題解決学習の推進
 - ・ 学習過程の工夫（つかむ→見通す→解く→考え合う→まとめる→ふりかえる・広げる）
 - ・ ノートの活用、学習の手引きの作成
- 学習環境の整備・充実
 - ・ 「算数コーナー」「作戦コーナー」
 - ・ コース別プリント、小テストの作成

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

指導方法の工夫と改善を通して

- ① 基礎・基本の定着を図り、確かな学力を身に付けること
 - ② 自ら課題を見つけ、主体的に解決する子を育成すること
- をねらいとして、研究を進める。

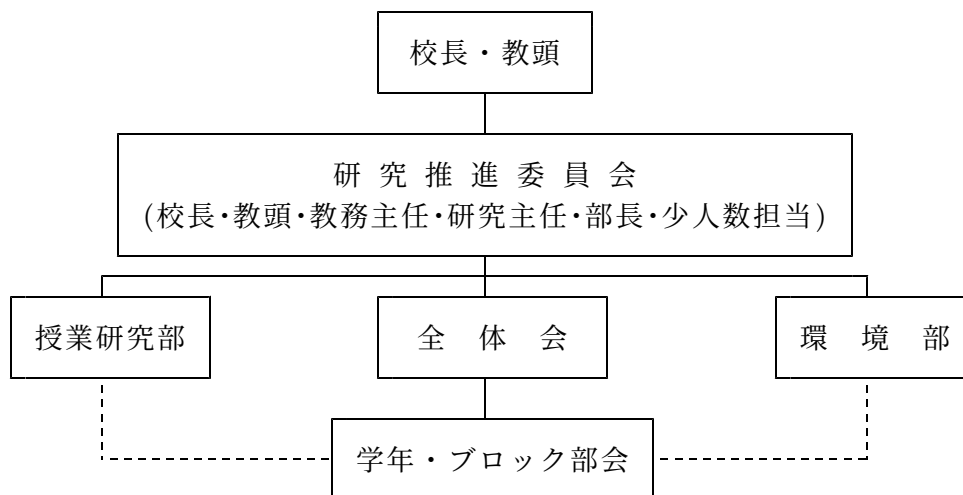
(2) 研究主題設定の理由

学力低下が懸念される現在、わかる授業を通して「確かな学力」を育成することが学校教育に求められている。確かな学力を育成するには、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るとともに、個に応じた指導を柔軟かつ多様に導入することが必要である。そのためには、児童の主体的な活動を重視し、楽しさと充実感のある学習活動を行っていくことが大切である。

本校児童を見てみると、素直で子どもらしく学習へも意欲的に取り組んでいるものの、自分の思いを表現したり自分で問題を解決することを苦手としている児童が多く見られる。

これらのことから、見通しを持ち、自分で考え判断したり、問題を解決していく力の育成が必要であると考えた。そこで、全職員共通理解のもと「自ら課題を見つけ、主体的に活動する児童の育成」を研究主題に設定し、指導方法の工夫・改善（問題解決的な学習過程や個に応じたきめ細やかな指導、支援、評価等）を通して基礎・基本の定着を図りながら、研究主題に迫っていくこととした。

(3) 研究組織



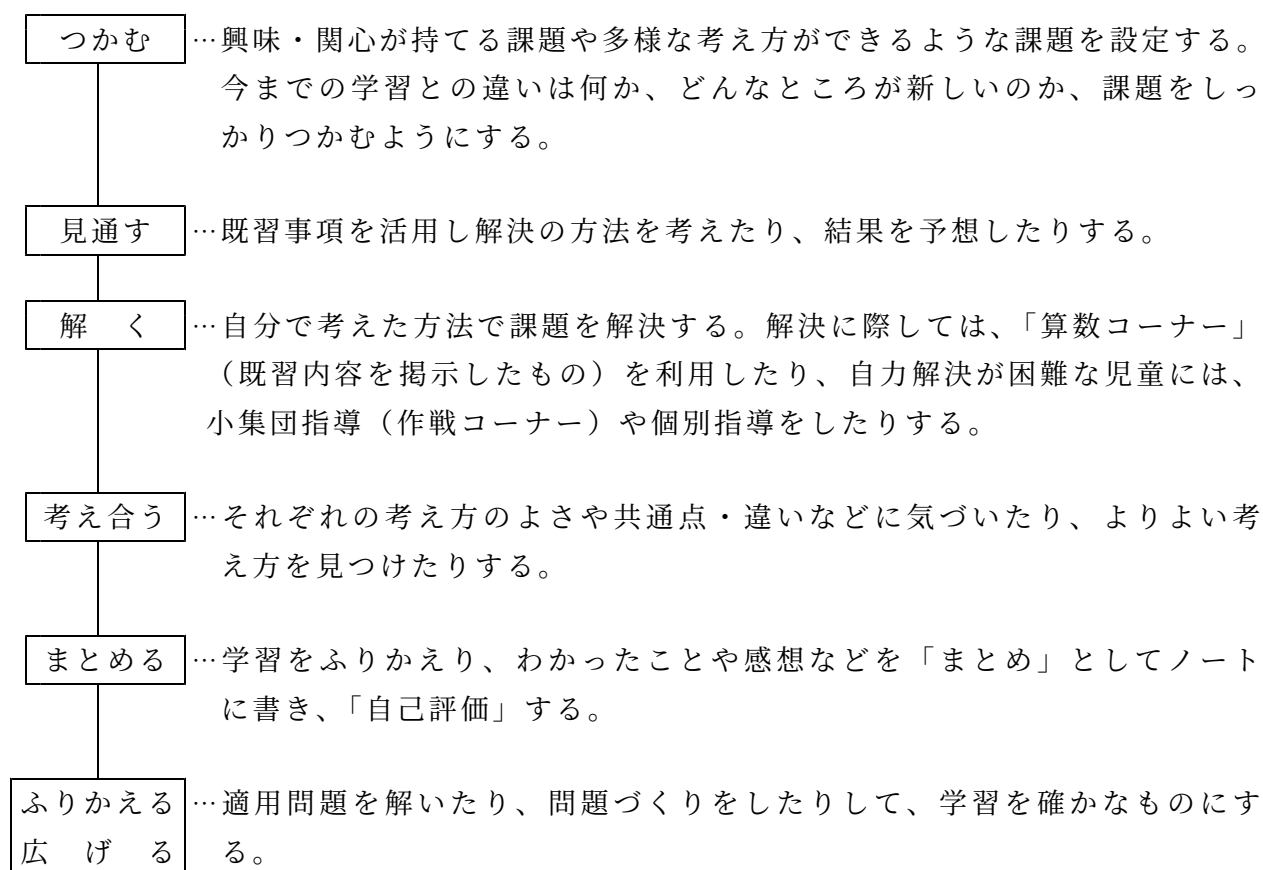
2 研究の内容

(1) 研究の全体構想



① 問題解決学習

「基礎基本の定着」－「確かな学力」は、児童一人一人が、既習内容と新しい学習内容を結び付けていく学習過程の中で身に付けていくことができる。それには、自分の持っている力を使い、自分の力でじっくりと解決することができる問題解決学習が求められる。また、「主体的に解決する子の育成」には、学習の進め方や学び方が身につく学習過程が必要であり、この意味からも問題解決学習がふさわしいといえる。



② 個に応じた支援

どの子も伸びたい、自分の力を最大限発揮したいと願っている。それには、児童に自分に合った学習の機会・場を保障し、一人一人にきめ細かな指導を行っていくことが大切である。

ア 指導形態－学習形態に関わること

1、2年生ではT T、3～6年生では課題別・習熟度別少人数指導を基本に進める。少人数のコースに分かれる時は、ふりかえりチェックテストやガイダンスにより、児童が主体的に選択できるようにする。

イ 支援・指導に関わること

(7) 「見通す」「解く」の学習過程の段階で

- ・既習したものを教室内に掲示した「算数コーナー」を活用する。
- ・自力解決が困難な児童には、小集団(個別)指導をする「作戦コーナー」の場を設けたり、ヒントカードなどを用意したりして、きめ細かな支援を行う。

(1) 図や表、数直線を重視する。特に、数直線を使えることが、理解が遅れがちな児童

にとっては自力解決の大きな力となり、理解を深めることにつながる。

- (ウ) 児童の実態を把握し、学習内容を補充・発展させたりするための問題づくりや教材開発を進める。

(2) 専門部の取組

- ① 授業研究部
 - ア 問題解決学習の流れ
 - イ 個に応じた指導の工夫
 - ウ コース別学習の類型化
- ② 環境部
 - ア 小テストの作成
 - イ 算数教材室の整備
 - ウ 教材開発及び学習環境整備

3 実践事例

(1) 問題解決的な学習過程と個に応じた支援(各学年の授業から；()は学年)

	問題解決的な学習過程	個に応じた支援
つかむ	○児童の興味関心に沿って問題提示(6) ○身近な問題、必要感のある問題、矛盾する問題の提示(5)	○単純化した数値での問題提示(5)(コース別) ○単位換算の必要ない問題(6)(コース別)
見通す	○既習事項との関連(5) ○既習事項の提示(1) ○既習の段を使って求める(2)	○前時の振り返り(ブロック、図等)(1) ○算数コーナー、作戦コーナー(2) ○ヒントカード、ヒントコーナー(6)
解く	○数直線の活用(6) ○時間の確保(5) ○アレイ図の活用(2) ○考え方を色別に(1) ○画用紙への記入(2) ○ノート指導(1)	○数直線活用(6) ○いろいろな解き方を考えさせる(5)(6) ○励ましの言葉、机間指導(全) ○意図的なヒント(全) ○算数コーナー、作戦コーナーでの小集団指導(1)(2) ○ヒントカード、ヒントコーナー(6) ○座席表の活用(2)
考え合う	○比較検討(5)(2) ○意図的指名(5)(2) ○ノート指導(1)	○時間の確保(5) ○発表児童への補説等(2) ○繰り返し押さえる(6) ○発表していない児童への評価(1)
まとめる	○自分の言葉でまとめる(一般化)(5) ○「まとめ」は赤で囲む。自分の言葉でノートへ(1) ○課題に沿うように、自分の言葉でまとめる(2)	○ノート指導(前時のまとめ方を参考に)(2) ○自己評価、他者評価(5) ○評価規準の明確化(1)
ふり広げ	○繰り返し(6) ○練習問題、問題作り(2)	

か え る	○練習問題(理解、補充、定着)(全)
-------------	--------------------

(2) 習熟度別におけるクラス名

基本的には児童にわかりやすい名称(例; 平行四辺形コース)を使用するようにするが、教材の特性や単元末等の習熟度で学習指導を行う場合は、学校で統一した名称を用いることとした。

補充・復習コース	基礎・習熟コース	発展・拡充コース
マスターAコース	マスターBコース	チャレンジコース

(3) 算数コーナー

各学級において算数コーナーをつくった。コーナーに掲示するものは、特別につくるのではなく、前時で使用した掲示物や子どもの考え方を掲示した。算数の学習の中でつまづいたり見通しが立たなかったりしたときに、コーナーで前時までの学習を振り返ることができるようにする。

なお、子どもの考え方を書いた紙には、本人の名前を書いておくようにする。



算数コーナー

(4) 小テストについて

各学年20コースずつ作成し、各学年の教室から近い場所に設置した。これは、その学年のうちに身に付けたい基礎的・基本的な内容を中心に作成を行い、自分の学習進度に合わせて各児童が選択し、補充にあてたり発展学習に活用したりできるようにしているものである。

また、各学級に小テストの内容がすぐわかるよう、テストを縮小してまとめたものと一覧表を配布した。小テストの原稿と授業で使用する単元別プリントの原稿を入れる棚を用意し、だれでも活用できるようにした。

第4学年 小テスト№61～80		
61	大きい数のしくみ(1)	A
62	大きい数のしくみ(2)	A
63	円	C
64	線	C
65	わり算の筆算(1)	A
66	折れ線グラフ	A
67	小数 たし算	A
68	小数 ひき算	A
69	三角形	C
70	分数(1)	A
71	分数(2)	A
72	わり算の筆算(2)	A
73	角度	B
74	角度	B
75	およその数(1)	A
76	およその数(2)	A
77	式と計算(1)	A
78	式と計算(2)	A
79	面積 組み合わせた形	B
80	ともなうて変わる量	A

小テスト単元一覧(4年)

(5) 算数教材室の活用について

教材・教具をすぐに見つけられるように、入口に教材室の図を貼付した。各学年で使用する教材・教具を単元ごとに書き出し、教材室にあるものについては、どこに置いてあるかすぐわかるように、A～Jの表示を付けて一覧表にまとめた。

低学年で主に使用するおはじきやブロックなどは、低学年の教室に近い2階の多目的室に置き、整理して利用しやすくした。

(6) 個に応じた支援の工夫

1単位時間ごとに段階を踏んで自力解決にむかえるよう、「問題解決の過程」及び解決のための「手びき」を作成し、全児童に配布し活用していった。また、コース別学習では「個別の支援計画」を作成し個に応じた支援の充実を図った。

児童	個別の支援計画
A	○集中力が欠けるため、はじめる度に声かけを多くする。図形の升目に目をつけ、升の数を数えることから面積を求めさせるようにする。
B	○個別に説明を十分する。教科書に出てくる「なおこ」か「なおや」の考え方に着目して解決できるようにする。
C	○少し時間がかかるが理解力はある。教科書の「りつこ」の考え方を中心に解決できるよう支援していく。
D	○長方形や正方形の面積を求める公式は理解できている。かけ算、わり算の計算方法が理解できていない。扱う数値を簡単にすることで正しい答えが導き出せるよう、問題を工夫する。

「個別の支援計画」(4年;面積)

算数の学習のしかた (5・6年)	
つかみ 分かっていること 求めていることをつかむ ・問題をよく読み、聞くと、 ・求めていること。 ・わかっていること。 ・今までと違うところ、似ているところ。 ・めあては、何かな。	(5・6年の手びき) ①図を書く。 ②単位図形(テープ図)を書く。 ③数直線を書く。 ④面積図を書く。 ⑤単位図形を使う。 ⑥なにかをつくる。 ⑦補助線を引いてみる。 ⑧簡単な数、面積に置きかえてみる。 ⑨表に整理して、きまりを見つける。 ⑩特別な場合を考える。 ⑪全体を「1」とみる。 ⑫公式にあてはめてみる。 ⑬式を書く。 ⑭だしひめておもしろ。
見通す 結果の予想をし解決の方法を考える ・予想 → ・あそこの答え。 ・方法、手順、考え方「手びき」	
解く 考え方の学習をもとに、手びき方法で解く ・自分の力で解いてみよう。 (図、式、ことば、...)「手びき」 ・だしひめてみよう。 ・別の考え方、方法でもやってみよう。 ・よりよい考え方はどれだろう。 (がんばらん、わがやう、いつでも、) ・説明できるようにまとめてみよう。	
考え合う 互いの考え方を比べ合いよりよい考えを見つけよう ・説明してみよう。(はじめ → つぎ → ...) ・友だちの考えをよく聞いてみよう。 ・くらべてみよう。(にている、ちがう、...)	
まとめる わかったことをまとめる ・ことばや式でまとめる。 ・わかったことを書いてみよう。	
ふりかえり 学習の確かめをし他の問題にも活用する ・まとめた考えを使ってみよう。 ・練習問題をしよう。 ・だしひめてみよう。 ・問題作りをしてみよう。	⑮別のとき方も考えておもしろ。

「問題解決の過程」と「手びき」

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・学習の進め方がわかり、課題に意欲的に取り組む児童の姿が見られるようになってきた。
- ・「解く」段階で、多様な考えで課題を解決しようとする児童が増えてきた。
- ・「まとめる」段階で、ノートを活用し、わかったことや感想などをまとめる「自己評価」が定着してきた。このことは、次への学習の意欲となって表れ始めている。
- ・少人数指導を継続的に実施することで、児童の自己評価・自己決定する力が高められ、自分のめあてに応じたコース選択もできるようになってきた。
- ・少人数指導(TT・コース別学習)を実施することにより、個に応じた支援の仕方やあり方を追究することができた。

(2) 課題

- ・「考え合う」段階で考え方を発表し合い、よりよい考えを導き出し深めるという点では不十分であり、工夫が必要である。グループで練り上げるという学習形態も考えられる。
- ・解決の見通しの持てない子に対する支援計画を、より実態に即したものにし、個別・小集団指導の充実を図る。
- ・コース別学習においては、個に応じた支援計画を立てていくことが必要である。
- ・抽出児童の学習の様子を追跡し、評価規準(おおむね満足)にどの程度到達したのかを観察することにより、評価をより確かなものにすることができると考える。このことは、特に、「努力を要する児童への手立て」——仮説の「指導方法の工夫改善」へとつながる。

「各教科等の学習指導に関すること」

生徒一人一人に確かな力を身に付けさせる学習指導法の研究

学校名 川越市立山田中学校

研究のポイント

教職員の資質の向上を図り、生徒一人一人に確かな力を身に付けさせる。

- 教師一人一人が自己研修に係わる年間計画表を作成し、その実現に努力する。
- 校内授業研究会を積極的に実施し、指導力の向上を図る。
- 保護者・地域社会等の外部評価を採用し、広い立場からの指導力改善を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 学校の課題に対し、教職員の総力を上げて解決に向かう体制づくりをする。
- ② 学校課題を解決するためには、それぞれの教科、領域（道徳・特別活動）、総合的な学習の時間等が有機的に機能し合い、効果的な教育活動が推進できるようにする。
- ③ 情報教育、少人数指導、環境教育等の今日的な課題に関して、最先端の情報を収集し日々の教育活動に応用していくような実験的な取組を進める。
- ④ 教育目標は、理念的な目標だけに偏らず数値的な目標を設定し、達成状況をより明確に把握できるようにする。
- ⑤ 学校の教育活動のすべてを目標の設定－実践－反省・評価の流れの中に位置付け、より確かな実践効果を得る方策を研究する。

(2) 研究主題設定理由

① 生徒の生活環境

川越市北西部に位置し、川越市の「北の玄関」として機能している。入間川が学区の西部・北部を流れ、田園風景が広がる地域である。また、学区の中央部を国道 254 号線が縦断し、南部は市街化区域となっている。生徒の大半は、地域内にある一つの幼稚園、一つの小学校を卒業して中学校に入ってくる。

② 生徒の実態

生徒の気質は純朴である。きまりや規律に関しては違反をする生徒はほとんどなく、校内生活も落ち着いた雰囲気のもとで日々の生活を送っている。しかし、学習に関しては、予習－授業－復習といった基本的な学習生活習慣が身に付いていない生徒が多く、宿題や忘れ物をしてもあまり気にならないタイプの生徒が多い。社会性に関しては、自己表現に乏しく、控え目な生徒が多い。体力に関しては、新体力テストの結果を全国と比較してみるとほぼ平均に近い結果がでている。その中で、持久力に関しては課題が残っている。

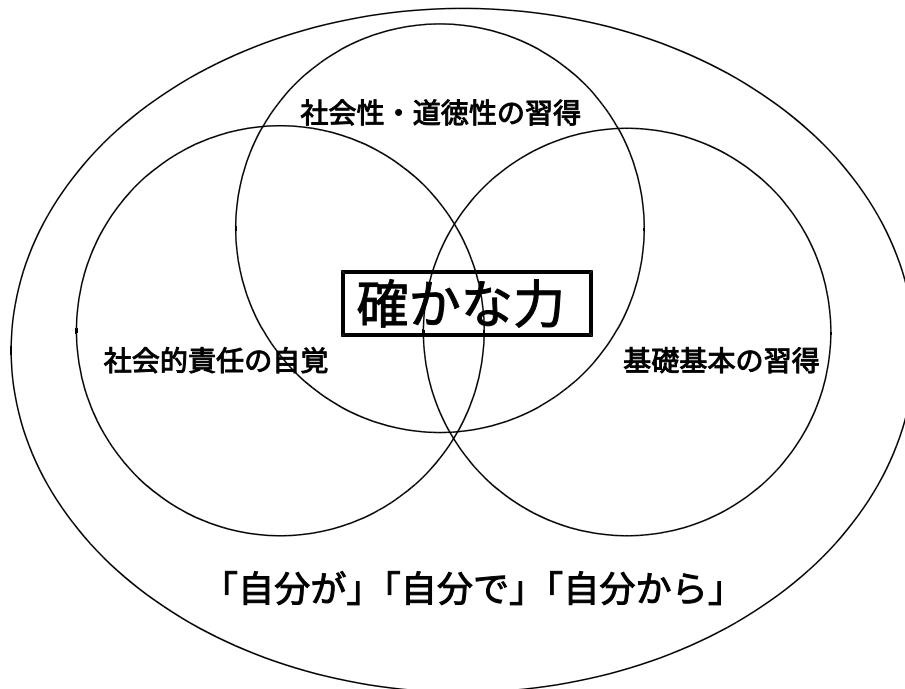
こうした本校の実態を考慮し、先に述べた指針を基に教職員一人一人の力量を高めることにより、生徒一人一人に確かな力を身に付けさせ、本校の学校教育目標である「ふるさ

と一山田（川越）に自信と誇りを持てる生徒の育成」をより確実に実現していこうとするものである。

（３）確かな力について

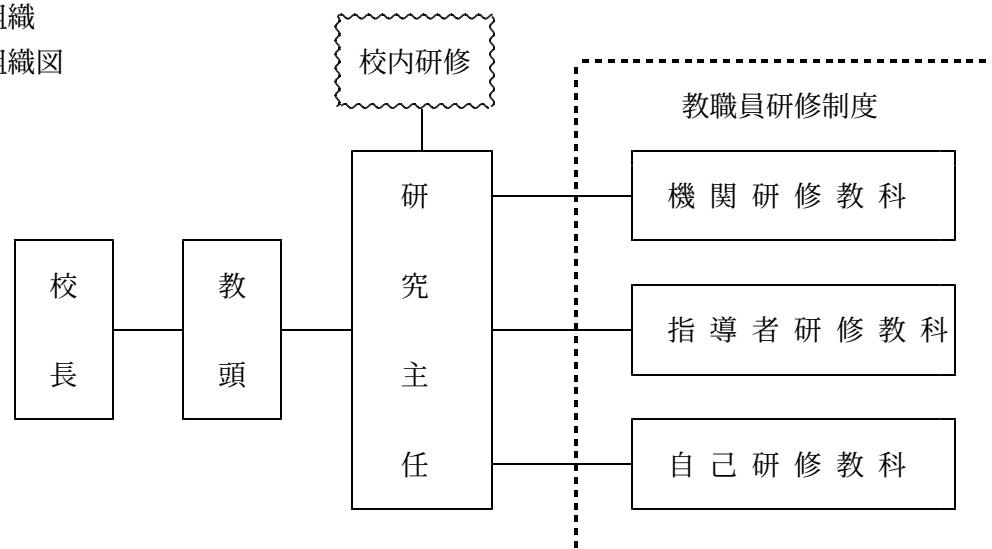
本校では、生徒自身が「自分が」「自分で」「自分から」といった意識を持って行動する力を「確かな力」と捉えている。

- 具体的には、
- 自分の生き方、在り方の目標をしっかりと持てること。
 - 学習の予習－授業－復習の生活習慣を守れること。
 - 集団や社会の一員として自覚を持ち、自己の行動に責任を持つこと。



（４）研究組織

◎ 組織図



◎ 教職員研修制度

研修制度は3つのグループからなり、1年ごとに①「機関研修」 → ②「指導者研修」 → ③「自己研修」 → ①「機関研修」の順にグループを移動する。

◎ 各グループの内容

機関研修	○ 川越市教育委員会または、県教育委員会主催の教科及び自己分掌関連の研修会を受講する。 ○ 自己研修中間報告を年1回校内研修会で行う。 ○ 最終報告を報告書としてまとめる。
指導者研修	○ 年度当初、自己教科及び自己分掌を指導してくれる指導者を決定する。原則として、指導者は川越市教育委員会指導主事・川越市教育委員会から推薦を受けた教師・県主催の指導者研修会に参加した教師とする。 ○ 指導者と協議し、研修課題を設定する。 ○ 指導者を招聘し、年2回授業研究を実施する。 ○ 最終報告を報告書としてまとめる。
自己研修	○ 年度当初、自己課題を設定する。 ○ 夏季休業日において中間報告会を実施する。 ○ 最終報告を報告書としてまとめる。

2 研修内容

機関研修	○ 学校教育の中での情報教育の生かし方 ○ 魅力ある音楽授業への取組 ○ パソコンの基本操作の習得 ○ パソコンの操作技術の習得による効果的な進路資料及び教材づくり ○ 豊かな人間性・社会性を育てるための生徒指導の在り方
指導者研修	○ 少人数クラスにおける効果的な指導方法 ○ 個に応じた指導方法や指導体制の工夫・改善 ○ 美術教育における豊かな感性を育てるための指導の工夫・改善 ○ 学校教育相談の進め方・不登校生徒への対応
自己研修	○ 掲示物を通しての保健指導 ○ 魅力ある学校づくりの推進 ○ 理科教育における個に応じた指導の工夫と改善 ○ 体力の向上を目指す指導の在り方 ○ コミュニケーションへの関心・意欲を育てる教科指導
全教職員研修	○ 学校行事・特別活動・地域行事等への取組について

3 研修計画

項目	実 施 日	内 容
自 校 研 修	4月26日(月) 5月17日(月)	○ 研修課題・研修計画について(協議) ○ 各個人の研修テーマについて(報告) ○ 各教科で確かな学力を育むための方策について(協議) ・各教科の指導の重点、評価の在り方について ・学習習慣の確立に向けての方策と指導形態の工夫
	6月21日(月)	○ 各教科で確かな学力を育むための方策について ・各教科部会から報告
	8月20日(金)	○ 確かな力を身に付けさせるための方策 ・各教科部会・各学年からの報告
協 議 ・ 報 告	8月23日(月)	○ 自己研修中間報告
	9月1日(水)	○ 地区教育課程研究協議会参加者からの報告
	12月13日(月)	○ 人権を尊重し、信頼を高める生徒指導の在り方
	1月24日(月)	○ 自己研修報告(各個人)
	2月21日(月) (予定)	○ 学校評価について ○ 次年度の教育課程について ○ 学校評価(まとめ) ○ 次年度の教育課程について
指 導 者 招 聘 研 修	7月22日(木)	○ 「確かな力を考える」 講師 川越市立川越西小学校長 松尾鉄城先生
	8月20日(金)	○ 小中合同人権研修会 講師 川越市教育委員会生涯学習課 田島係長
	9月13日(月)	○ 「確かな力を身に付けさせる教育の在り方」 講師 埼玉県立総合教育センター嘱託 柴崎光生先生
	10月18日(月)	○ 「総合的な学習の時間の充実を図る」 講師 川越市立川越西小学校教頭 若手三喜雄先生
	12月1日(水)	○ 「豊かな心を育て、道徳実践力を高めるための 道徳教育」 講師 川越市立鯨井中学校教頭 内田文夫先生
現 地 研 修	8月23日(月) (徒歩で現地視察)	○ 「山田の歴史・自然・文化を知る」 講師 川越市山田在住 鹿倉 利雄 氏 ・ 山田、福田、府川地区を現地視察 ・ 山田中学校区の歴史について

4 実践事例

学校行事・ボランティアでみられる生徒の活動

大排水路清掃 《地区の方も行事に参加》型

今年で2回目となる夏休みに行われる大排水路の清掃、百人以上参加する生徒だけでなく保護者、教職員はもちろん、地区の方、関係団体の方も参加し行われます。学校の脇を流れている大排水路を場所を変えて清掃しているので大分粗大ゴミなどが撤去されきれいな水路になっています。



かかしまつり 《地区の方の行事へ参加》型

9月に行われる山田地区の行事である『かかしまつり』にすべてのクラスと有志団体が参加しています。それぞれ工夫を凝らした個性あふれるかかしを出品し、地域の方々からその出来具合にお褒めの言葉をいただいています。また、かかしづくり以上に多数の生徒が当日の出店のお手伝いをし、お祭りの雰囲気を盛り上げています。



あすなろ祭 《地区の方も行事に参加》型

あすなろ祭とは学校祭のことで、3年前の本部が命名したものです。内容は年によって変動しています。今年は今まで2日間だったものを1日だけとし、内容も厳選しました。午前中は主にクラス対抗の合唱が行われ、午後はいろいろなステージ発表です。地域の団体も参加しました。写真1は地域の方が演技した《小江戸南京玉すだれ》また、有志による出し物も多くあり、クラス全員による劇、グループ発表など内容は多彩で盛りだくさんの1日でした。



登校時のゴミ拾い

通学路に落ちているゴミを用意したスーパーの袋に拾いながら登校し、用意してある昇降口の分別容器に処分しています。学校周辺の美化活動に取り組んでいるわけです。毎日、ボランティアや本部を中心に行っていますがマンネリ化を防ぐために地域クリーンアップ強化運動期間を設けています。

Clean up

これは月曜日と木曜日での週2回、本部やボランティアの人で、校舎内を中心に朝清掃をすることです。昇降口や廊下が中心ですが落葉の時期には外の落ち葉拾いを行います。

資源回収に協力

年2回、PTA主催の休日に実施される資源回収に生徒会は全面的に協力しています。自宅周辺の集積所と学校の2カ所に分かれて、生徒は手伝います。時間的には半日程度という短い時間ですが、保護者の方と教師と一緒にいい汗を流しています。



5 研究の成果

- 教職員研修制度を基盤として、教職員一人一人の研修に対する心構えが明確になってきた。また、研修した内容をどう生徒に還元していくかについて工夫改善がなされ始めた。
- 研修領域が多様になり、今日的な学校課題を多面的な面から係わっていくことが可能となってきた。
- 研修体制が整い始め、教職員一人一人の意識の高揚に繋がりはじめた。

6 研究の今後の課題

- 研修体制を更に確立し、効果的な教育活動や指導計画の実践に結び付けていきたい。
- 学校教育活動のすべてにおいて、目標の設定―実践―反省・評価の流れをシステム化し、より高い目標の設定を常に心がけられる教職員集団としていきたい。
- 生徒の自主的な計画の立案を実践できるための支援体制づくりや一人一人の生徒が今持っている力で「自分が」「自分で」「自分から」の意識の基に活動できる活動の場を保証してあげたい。